

79  
208



始





前角6

79-208

法學博士子爵田尻稻次郎著

增訂  
改版

經濟大意

東京專修大學

全  
9.5.10





緒言

本書初版以來版を更むること五回にして既に數年を経過せり、其間世運大に進捗し我國の形勢復た昔日と其觀を同うせず發達伸張の績見るべきもの少しとせず、然りと雖も一得一失は理勢の免れ難き所に於て万般の事恰も過渡の情況を呈し需給平を得ずして消費其序を失ひ頗る寒心すべきものあり、抑々國礎の安泰は需給の平衡其宜しきを得るに在り、是に於てや彼の保守を以て有名なる英國人士の如きも大に鑑みる所ありて従來の研究方法を更め消費を基礎とし以て其性質程度を推究し生産方法の精粗を考査し以て其効果を鑑み分配機關の利鈍を研究し以て其効驗の多少を判する等理觀を捨てずして事觀を本とし頗る經國の要領を得以て理勢の捷路に達せり我國土地豊饒人士俊秀而して



形勢能く世界貿易の樞軸たるに足り前途洋々大に望を屬すべきなり、然るに今や過渡の時期に際會し需給の關係稍々紊れ消費將に其序を失はんこす、經濟學を講ずる者達觀以て更に一大研究を要する蓋し此時より急なるはなし須らく心を百般事業の整理に致し以て固本の策を建つべきなり、今哉第十一版既に盡く依て訂正増補以て世に公けにす、抑々道の深遠なる之を得て究め難く之を究めて盡し難し本著の如き固より遠く無漏の地に達する能はず、雖も後學研究の一階段と成り聊か以て世を益することあれば幸太甚

大正五年十月

著者誌

改訂 經濟大意目次

第一章 總論

第一節 經濟學の釋義……………一

第二節 經濟の目的……………三

第三節 經濟の本分……………六

第四節 經濟學研究の困難……………八

第五節 經濟學の受くる攻撃……………一

第六節 經濟學と他學との關係……………一三

第七節 交換……………一五

第八節 富……………一九

第二章 消費費

第一節 消費の釋義及其生産分配との關係……………二三

目次



二

第二節 消費研究の必要……………二二三

第三節 需用供給の説明……………二二五

第四節 消費の區分……………三三〇

第五節 消費と生産との權衡……………三三三

第六節 個人の場合に於ては消費を慎み生産及貯蓄を貴ぶ……………三三五

第七節 貯蓄と吝嗇との別……………三七

第三章 生産

第一節 生産の釋義……………四〇

第二節 勞力……………四一

第一目 勞力と資本、土地との關係並に勞力の釋義……………四一

第二目 勞力の種類……………四一

第三目 生産勞力及不生産勞力……………四四

第四目 勞力の目的……………四五

第五目 分業及勞力の分類……………四六

第六目 分業及勞力分類の區域……………四八

第七目 麥等事業の分業……………五〇

第八目 日當及單に支拂法……………五一

第三節 資本

第一目 資本の釋義及分類……………五三

第二目 固定及流動資本……………五一

第三目 資本の區分は事業の種類に由り其比例を異にす……………五九

第四目 資本を得るの困難……………六〇

第五目 資本の効力……………六二

第四節 土地

第一目 土地の意義及其必要……………六三

第二目 土地の生産力……………六五



第三目	收穫遞減の法則	六八
第四目	收約的及粗法的耕作	七二
第五目	大農又小農の便否	七四
第五節	生産三要件結合の必要	七五
第一目	結合の實況	七五
第二目	三要件勢力の差違	七七
第六節	生産に要する諸般の設備	七九
<b>第四章 分 配</b>		
第一節	分配の通路	八一
第二節	營業所得	八二
第一目	營業所得の釋義及其説明	八二
第二目	危険は世運の進歩に従ひ増加す	八三
第三目	營業所得の歩合は世運の進歩に従ひ減少す	八四

第四目	營業所得歩合の多少を決する原因	八六
第五目	營業所得と他の所得との差違	八九
<b>第三節 勞 銀</b>		
第一目	勞銀の釋義及勞銀基金	九〇
第二目	勞銀平均増減の原因	九一
第三目	各個勞力者の勞銀の多少を決する原因	九四
第四目	勞銀の高きは必ずしも營業者の不利に非ず	九九
第五目	人口の増減と勞銀との關係	一〇一
第六目	勞銀歩合増加の利益を維持する能力の強弱	一〇二
第七目	人口の増加は勞銀の平均歩合を減するの傾向あり	一〇五
第八目	人口の抑制	一〇七
第九目	勞銀基金の増加は資本 増加と正比例を保つこと能はず	一一二
第十目	機械の進歩と勞銀との關係	一一四
第十一目	勞力者生計の困難	一一七



第十二目	職工同盟強請及同盟罷工	一二三
第十三目	職工同盟の利害	一五〇
第十四目	共同法	一五三
第十五目	共同法に對する駁論	一五五
第十六目	共同店	一五七
第十七目	勞力者救済に關する次位の設備	一六二
第十八目	社會主義	一七二
<b>第四節 貸付料</b>		
第一目	貸付料の釋義並に小作料	一七五
第二目	競争地代法	一七七
第三目	年期小作法	一八一
第四目	慣習小作法	一八二
第五目	小作料は世運の進歩と共に増加す	一八三
第六目	持地耕作法	一八四

第七目	利子の釋義及其歩合	一八七
第八目	利子歩合の差違	一八八
<b>第五節 信用</b>		
第一目	信用の釋義及其性質	一九〇
第二目	信用の本分	一九二
第三目	信用の効力	一九三
第四目	信用の危険	一九四
第五目	對人及對物信用	一九五
<b>第六節 價格</b>		
第一目	價格と市價との區別	一九五
第二目	一般價格には増減ありて昇降なし	一九六
第三目	市價の昇降	一九七
第四目	價格の源泉	一九八
第五目	價格の多少を決する原因	一九九



第六目	價格は物品の種類に由り其趨勢を異にす……………	二〇〇
第七節	貿易並に其機關……………	二〇五
第八節	地方貿易……………	二〇六
第九節	内國貿易……………	二〇七
第十節	外國貿易……………	二〇八
第一目	外國貿易の起因……………	二〇八
第二目	生産費の多少が内外貿易上に呈はす所の結果の差違……………	二一四
第三目	外國貿易の成立は生産難易の比例に差違あるを要す……………	二一六
第四目	外國貿易に要する注意……………	二一八
第五目	自由貿易及保護方策……………	二二〇
第六目	保護の目的を達せんと欲せば天然の利益を辭せざる可らず……………	二二二
第七目	保護は被保護者に特利を與へず、被保護品若くは其原料品を生産する土地の地主に利益を與ふ……………	二二四

第八目	保護は營業の種類を増加せず、資本勞力使用の方向を定む……………	二二九
第九目	百般事業の發達は實業界の關係を複雑ならしめ保護の不便を増加す……………	二三二
第十目	保護政策は一たび之を始むるときは容易に解く能はず動もすれば永久となるの傾向あり……………	二三五
第十一目	保護は物價を騰貴し輸出を妨げ外國競争を誘致し内國消費者を苦しむ……………	二三六
第十二目	保護政策を以て外國競争を排するの必要ありとの妄説……………	二六六
第十三目	英米兩國に於ける保護の差違……………	二六八
第十四目	外國貿易には多少の檢束を要す……………	二七二

增訂 經濟大意目次終



改訂 增補 經濟大意

法學博士子爵田尻稻次郎著

第一章 總論

第一節 經濟學の釋義

經濟學は人類が團結して一社會を成すに當り其有する所の關係を物件上より論ずる所の學問なり又簡單に陳述すれば經濟學は經國濟民の原理を物件上より説く所の學問なり

元來釋義は簡明を旨とし義豊かに文約にして貫穿總綴以て無漏の地に入るを要す故に意餘

りありて言足らざるの虞なきを得ず、依て今之が説明を下すは蓋し無用の業に非ざるべし、

請ふ少しく之を辯せん

釋義の說

第一節 經濟學の釋義



太古草昧の世に於ては城郭の居委積の守りなく人々各自に禽獸魚鼈を捕獲し若くは草根木實を採集して之を食ひ、餘りあれば即ち之を與へ、足らざれば即ち之を他に仰ぎ所謂特有財産なる者の觀念なく未だ以て各自の長所と土地の物産とを交換し業を分ち有無相通じ互に勞を省き所得を増加するの道開けず偶々之あるも纒かに男女老幼其業を異にするに過ぎずして人皆個々別々に此世に生存し未だ社會の體裁を完成せず、斯の如き人民の生活は固より經濟學の範圍外と爲す、然れども人口漸やく増加し既に一たび社會を團結し漸やく其發達を経るに至りては勢ひ交換の要を生じ互に長短相補ひ有無相通することとなるは自然の然らしむる所にして苟も其發達に一度を加ふれば交換の要亦一度を増加す故に釋義中故らに「人民團結して一社會を爲す」の句を用ひ以て太古に於ては經濟學の要殆ど絶無なりしこと、及社會外の人には縱令自から其人一個の所得を増加して之が幸福を増進する方法存するなきにあらざるも未だ吾人の認めて以て經濟學と爲す所のものあらざる所以を示したるなり。然れども世已に人民あれば衣食住の需要なき能はず、人民既に社會を組織するに於ては此需要を供給する方法なきを得ず、而して其之を供給し之を需要するの際には必ずや人民相互の關係を生ぜざるを得ず、「物件上の關係」とは夫れ之を謂ふ又經濟學を以て人間の關係を論ずるもの

と爲すと雖も人間には社會上、道德上、法律上其他種々の關係あり、故に釋義中故らに「物件上より論ずる」との句を用ひ以て經濟學の範圍を定め、道德法律等の事は敢て其論ずる所に非ずして經濟學は只管人間衣食住の需要供給に就き其關係する所を論ずるものなることを示す、經濟學の論ずる所夫れ斯の如し、請ふ今一步を進めて其目的に論及せん

## 第二節 經濟の目的

經濟の目的は最少の勞費を以て最大の結果を得るにあり、苟も此目的を誤らざれば宇内の事物盡く經濟の本旨に適せざるものなし、唯之を得るの方便に至りては實地の景況に由り千差萬別大に議論なきを得ず、夫れ目的は一定不動之を不朽に傳ふべし、方便に至りては即ち然らず自然の優劣資力の厚薄人口の多寡、民度の高底等に因り東西其便を異にし南北其緩急を同くせず、然るに世上往々方便を目的と誤り一時の方策を以て永世の目的と爲す者ありて世運の進歩を障害すること稀なりとせず今其一例を舉れば彼の自由貿易又は保護方策を以て各旗幟を樹つる黨派の如き即ち是なり

彼の自由貿易の説を唱ふる者は事物の發達を自然に任じ敢て人爲の獎勵干渉を用ひず甚だ



しきに至りては外國貿易の如きも之が監督を須ひず、關稅の如きも之を徵收するを不可と爲し政治、財政、警察上の必要に關しては之を度外視し殆ど顧みず、内外の貿易を自由自在勝手次第にせば國家の富強期して待つべしと爲し唯之を自由にするを以て目的とす、之に反し保護方策を唱ふる者は土地物産の自然の優劣、人口の多寡、國民の素質、資本の多少等を辯せず苟も内國中に於て生産、製造し得べきものは之を外國に仰がずして盡く之を内國に得んとし之が爲め國家の權道を藉りて有利事業の利を剝き、濫りに不利の事業を獎勵し或は人口資本共に増加するに至りては國中最上の財源にのみ依頼すること能はずして次第の財源に及ばざる可からざるの理を解せず、或は時未だ至らざるに弱者を惠むに汲々とし天賦の利益を辭して人爲の不便を醸成することあるも敢て自ら之を悟らず唯弱者を保護せば天下の事足れりと爲す、夫れ理は事に隨て變じ事は理に隨て融く天下の事理豈に變通なくして可ならんや是等の兩説は共に偏執論たるを免れずして固より採るに足らざるなり、順天の道設地の宜察せずんばある可らざるなり

抑々經濟の目的は自由に非ず、保護に非ず、最少の勞費を以て最大の結果を得るに在り、之を自由にし之を保護するが如きは固より一時の方策に外ならず所謂縁に應じ物を利すれば

所謂保護  
派の誤謬

即ち足る若し夫れ之を自由にして此目的を達するが如きの實あれば宜く之を自由にすべく又之を保護して苟も此目的を達することを得るの確證あれば須らく之を保護すべし、夫れ實地の情況は千差萬別なり焉を萬遍一律一定不動の法を以て之を萬世に推すを得ん哉、理に契ひ機に合し丈墨均石時に依り所に依り其宜を制せざる可らざるや論を俟たず、務に應じ時に適し道を以て物を制す是れ理世の極意なり、國家の經濟を論する者小心翼翼力めて事物の關係を詳にし以て彼の方法は現今の方法と比較し果して同額の資本勞力を以て多量若くは善良の物品を生産又は製造し得るの實あるや此方法は彼の方法に比し同額の資本勞力を以て事業上に幾多の進歩を來すべきや又は更に小額の資本勞力を以て同様の事業を爲し若くは多量の物品を製造し得べきや又新事業を起せば其事業は果して在來の事業と同様又は之に優るの利益ありや等の要點を研究し然る後其取捨を決すべし。凡そ經濟上の事業を爲すに當り標準とする所斯の如し漫に之を自由にし漫に之を保護するが如きは所謂規矩に求めて方圓を得權衡に求めて輕重を得るに止まるものにして固まり道に達する者に非ざるなり、空しく大海の鹹味を嘗むるも安んぞ龍宮の摩尼を得ん哉、夫れ眞理は寥廓として萬象を空弔の中に籠む一片の理一部の象何ぞ能く之を排するを得ん察せずんばある可らざるなり



## 第三節 經濟の本分

經濟の目的は已に陳述したるが如く勞を減して功を増すにあり、彼の保護論者の如く徒らに勞費を増加するに非ざるなり、故に若し宇内に虚無より有物を生ずるの術あらば經濟の目的茲に至りて極れりと謂ふべし、然れども斯の如きは固より物理の許さざる所にして有物を生ずるは必ず有物よりせざる可らず、是れ經濟の事業を擧げんと欲せば必ず先づ勞費を至さざる可らざる所以なり、今此勞費を爲すに當り先づ事物の原因結果の關係を示し之に依りて禍を未然に防ぎ、便益を將來に得るの原理を講じ又其方法を示すを以て經濟の「フオンクシヨン」即ち其本分と爲す、故に經濟は某事業は其地に適せず今日の人口資本の景況に應せず某事件は善は即ち善なりと雖も時未だ至らず、是れ彼れより急なれば先づ是れよりして彼れに及ぼすべし等の理由を示すに止まり固より法律の如く人の行爲を制裁するの力を有せず、依て今貿易信用等の經濟上の事業を擧げんと欲せば必ずや力を法律に藉らざるを得ず經濟に關する善良の法を得んと欲せば法律も亦經濟學の力を藉らざる可らず、隻翼沖し難く孤輪牽ぞ運ぶを得ん請ふ一例を引きて二者其本分を異にするの狀を示さん

經濟と法律との關係

同上の實例

曾て西曆十八世紀中英吉利、葡萄牙兩國の間に締結せられたる有名なるメスーエン條約は當時流行の互惠主義の好例にして葡萄牙は英國製毛布の輸入税を免じ英國は其報酬として佛國產葡萄酒を排し葡萄酒を葡國より輸入する事と爲せり。然るに葡國產の葡萄酒は之を佛國產の者に比して遙に濃厚なるに因り其飲用の爲め英國人民一種の疾病即ち酒風症(洋名「ガウト」)と云ふ足部に非常の痲衝を起す病症)なるものを起すに至れり、此弊の起るや法律は之に處するに先づ葡國產葡萄酒の輸入、販賣及飲用を檢束し又は之を禁制する方法を施し、且つ條約の改正に着手し佛國產の葡萄酒輸入、販賣、飲用を獎勵するの法を講ずべし、然るに經濟の之に處するは茲に出る能はず濃厚なる葡萄酒の飲用は大に國家の生産力を減する効驗あるの原由を説き以て淡泊なる飲料を用ふるの利益を説くに止まるべし、由是觀之法律は外形の如何を制し、經濟は内部關係の因縁如何を示すを以て其本分とす即ち知る兩者の關係する猶ほ風水の如し水風を待て波を起し風水に依て動相を現す而かも水は其靜相濕性を壞らず、風は其動相燥性を失はず又目手の如し目石の白きを見るも其堅きを見ず、手石の堅きを知るも其白きを知らず兩々相輔けて事甫めて全し、察せずんばある可らざるなり



## 第四節 經濟學研究の困難

實驗的  
試  
驗の  
出來  
る事

凡そ政治上、社會上に關する學問の研究は理化學の如く實際の適例を引きて其所論を證すること能はず多少想像推理の間に逍遙せざるを得ざるの不便あり、經濟學を研究する者亦此不便を免れざるなり、彼の理化學に於て空氣の壓力、物質の成立等を論ずるや只口頭の論理のみを以てせば聖者尙且つ之を解するに苦むべし況や才の凡なる者に於てをや、然れども若し一たび排氣鍾若くは分析の試験を施すときは事跡判明多辯を要せずして凡庸の士尙ほ能く自ら之を悟らん然りと雖も今經濟學を論ずるに當りては即ち此の如くなること能はずして其論ずる所多くは天下億兆の休戚に關する最も重大の事件に屬して輕々しく之を實地の試験に付するを得ず只推理を以て其然る所以を論ずるに止まるの已を得ざるものあり例へば經濟學の物價を論ずるや必ず物價の高低は需要供給の關係に因るものとし懇々其理由の在る所を説明すべしと雖も之を實地に證せんと欲す天下に號令して今年の田作は之を例年の半額に減すべしと曰ふが如きは到底得て爲す可らざる事に屬す故に其説く所理化學の如く適切なるを得ざるは其素質上已を得ざる所のものあり

實例

抑々實地の情況は森羅萬象單純の道理常に表面に於て直接に其成績を全くするを得ざるなり例へば人口繁殖し資本増加せば米穀其他の食品及原料品は必ず其價格を増加すべしとは經濟學の論ずる所にして又最も賭易きの道理なり、然るに事實は往々却て之が反對に出づる事あり。彼の英國の如きは之を西曆千八百四十六年の穀令（コーン、ロー）廢止以前に比すれば其人口資本の増加實に夥し、然れども穀類の價格は之を當時に比して今日は却て廉價なり（昔日は「クウートル」一石六斗一升二合餘八十志以上方今は三十志内外）「斯の如く道理の説く所と實際の成績と往々符合せざるものあるに由り、世人をして道理を頼むに足らざるの思あらしめ之が爲め眞理の發達を障礙すること尠からず、是れ豈に井絡を短うして而して水の溜れたるを疑ふの類にあらざらん乎、焉ぞ知ん單純の道理をして實地に其成績を全くすることを得ざらしむる所の他の道理あるを即ち英國の穀類價格の景況道理と符合せざるものある所以のものは該令廢止以前穀類の輸入自由にして北米合衆國、印度、露國等より大に之を輸入し昔日穀令の保護に據り纒かに耕作し得たる劣等の土地に穀類を耕さざるに由る、爾來牧畜蔬菜果樹園が昔日穀類を耕作したる土地に侵入し西曆千八百七十三年には穀作地、（大小麥、燕麥、蠶豆、豌豆）は一、三八二、四二「エイカ」一「エイカ」は四反二十四畝強）



にして永久牧場は二三、三六三、九九〇「エイカ」なりしか同千九百八年には前者は八、一三九、七六三「エイカ」に減じ後者は二七、五二三、五六三「エイカ」に増加し而して小實樹園は漸次増加の勢を示し西暦千九百七年には八二、一七五「エイカ」なりしか同八年には八四、八八〇「エイカ」と成り同九年には八七、一一六「エイカ」に増加し總果樹園は八九兩年間に二五〇、二九七「エイカ」より二五一、三三六「エイカ」に増加し最近二十五年間に三百「エイカ」以上の大畑にして穀類耕作に使用せし者は千七百九十五ヶ所を減し園藝及蔬菜地と變し大畑は僅かに全耕地の三分即ち百分の三を除すに至れり而して最近西暦千九百十二年に於ては畑地は總面積二割五分三厘となり牧場は約五割二分に増進せり是れ實に眞理の在る所は萬世を経て動かす可からず（獨逸の如きは前者約四割九分後者一割六分なり是れ不自然なる保護の致す所）一部局に於て外面其成績を實地に全くすることを得ざるが如き觀あるは他に繞密の關係の存在するに由る何んぞ之を以て實地と道理と符合せずと云ふを得んや。抑々深遠なる原因の探究は世人の難しとする所なり然れども測り難きの地に向つては須らく一穿八穴すべく半黄半青本色を曉らざるは學者の本意に非ざるなり、畢竟此等の困難は研究の足らざるに出づ夫れ研究の功は猶ほ鏡を磨くが如し磨けば則ち明體忽ち現はれ好醜・大小、方圓、長短應

に隨て現前す、磨かざれば則ち餘垢盡きす眞體眞を隔て、眞影を寫さず百折不撓進みて以て研究を積み眞理の在る所を探究せば智海の雲霧忽ち晴れ秋潭の月皎然として夫れ瑕なきを得ん豈に路傍の岐路荆棘に迷ふを要せん哉。

### 第五節 經濟學の受くる攻撃

經濟學は常に人間物件上の關係を論じ談高尚なる信義に涉らず言微妙なる人情の域に入らず貧者を見れば即ち曰く是れ汝が怠惰の罪なる汝宜しく努力せよ又不幸困難に陥る者を見るも君は是れ不幸の士我に餘財あり以て君に呈すべし宜く之を以て君が嗜好に充て憂を慰むべしとは曰はず、不幸實に慰むべしと雖も己に不幸に陥りたる上は已むを得ず宜しく一層の勉勵を加へ勤儉の道を守り以て此不幸を免るべしと云はん。是に於てか世人説を爲して曰く、「經濟學は信義人情を解せず、只管ら便利を説くに汲々として世に物件以上信義、情宜等の高尚温篤なる者あるを知らず」と。痛哉眞理の深きを批擬し漫に一極の端を窺ひ未だ曾て天高うして萬象正しく海濶して百川之に朝するを知らず亦是れ蹲鴟を解して著毛の雞と作すの族ひ將た是等の人なる乎。元來經濟學が物件上の關係を説くは其範圍を守るものにして、其



經濟と信  
義人情と  
は相離る  
可らず

利便を説くに汲々たるは其本分を盡すに外ならず、何んぞ夫れ之を以て信義に反し人情を捨てるものと云ふを得ん哉只信義の極端瘦我慢の弊に陥らしめず、人情を濫用して怠情を勸め以て勤勉の道を雍塞するの弊を防かんと欲するにある耳信義人情固より經濟と併立せざるを得ざるなり。抑々經濟上尊むべきは信用を以て最とす、徳義厚からざれば固より信用を保つを得ず、誠に通す之を信と云ふ人にして信なくんは其可なるを知らざるなり大車軌なく小車軌なくんば何を何てか行くを得ん。夫れ然り而して人情は社會組織の大綱なり、經濟學は人間社會物件の關係を論ずるを以て其本分とす焉ぞ此大綱の外に立つを得ん哉、人間の事元と悉く皆人情の近きに就きて之を處するを易しとし之を捨るを難しとす。經濟は難きを捨て、易きに就くを以て其本旨とす焉ぞ人情に背馳して特更に事の難きを選ばんや。然り而して經濟學は人間衣食住の需用を充足する方法に關し其捷徑法を説くを以て任とす、古人云はや衣食足りて後ち禮節を知ると則ち知る風評にして日月正しく雪晴れて天地春なり、然らば則ち道德、人情、經濟の三者は相互に親密の關係を有し鼎足の勢を以て長短あるを許さず、是れ所謂隨派、分岐、事理雙融難きを棄て易きに就き諸學調和、混融自在以て天下の利益夷齊同貫する者に非ずして何ぞ哉、豈に經濟を目して不道德、不人情なりと云ふを得んや、夫れ

眞理を覺るは猶ほ窓を隔て馬駒を見るが如し眼を眨せは便ち過く豈に敢て怠るを得んや

## 第六節 經濟學と他學との關係

經濟の道德、人情と須臾も相離るゝ能はざること及其法律と内外の關係を有するは既に之を論せり、凡そ物孤立して能く其目的を得、獨立して發達の極度に達し能く社會を益するもの蓋し稀なり、事物の進歩は必ずや牽連調和互に相輔くる所なきを得ず、知るへし走るに手を以てせざるも手を縛れば則ち走るに疾きこと能はず、飛ぶに尾を以てせざるも尾を屈すれば則ち飛ぶに遠きこと能はず文學、理化學、哲學、歴史、美術、道德、人情、法律、統計、政治、財政等諸般の學者多少經濟學と相關するものならざるはなし。而して經濟學も亦此等諸學の進歩を輔翼するものとす。若し夫れ文學の進歩なからん乎眞理の發見妙計、奇策、名案等數を盡すと雖も能く之を後世に傳ふるを得ず、造化の機密を探り人工を以て天工を奪ひ、難きを捨て易きに就き、無用を探りて有用と爲し所謂最小の勞費を以て最大の結果を得るの術を求むるは力を理化學に籍らざるを得ず、哲學なくんば、事物の關係を失し其位地分明ならずして百折不撓の氣象を養ふ能はず苟も此氣象なくんば、經濟の事業決して擧からざ



るなり又時勢の變遷を察し以て事の順序を質さんと欲せば史學の觀念に富まさる可らず、美術の思想なくんば質文に勝ち以て人の嗜好に投じ市場を制するの力を養ふこと能はざるべし統計備らず、政治整はず、財産紊るときは經濟の事復た謂ふを得ざるなり之に反し經濟の道開けず、難きを先にして易きを後にし、不便を探りて便利を捨つるが如きことあらば國富の發達、財政の運用、政治の改良等得て望むこと能はざるなり、夫れ鳥を捕ふるは羅の一目に依る而かも一目を以て羅を爲す可らず、十指長短あり然れども痛惜皆相似たり、由是觀之經濟學は他の諸學と其進歩を共にし鈎鎖連環して相離れず甫めて其發達を全ふすることを得其目的を達するものと謂ふべし、請ふ今一例を引きて事物の發達は決して孤立し能はざる所以を證せん

昔時西曆千八百七年米人フォルトン氏の汽船を發明するや船已に成り器械已に整ふ、故に數理を以て之を推すときは方今の鐵艦巨艦と雖も得て之を當時に製造す可らざるの理なきが如しと雖も實際に於ては此事なく、其能く巨大の汽船を製造することを得るに至りたるは僅に近年にあり、是れ頗る怪むべきに似て決して怪むに足らず、其故他なし造船業の進歩已に斯の如くなるに於ては固より人之を思はざりしに非らずと雖も只當時製鐵の業未だ今日の如

實例

く盛ならざりしを以て、巨船を運轉するに足るべき巨大なる器械を製造し能はざりしに由る耳、爾來蒸氣槌の設置を得て困難全く破れ、甫めて今日の如く巨大なる汽船を製造することを得るに至れり、經濟學の進歩も亦之れに類するものあるを見るアダムスミス氏の始めて富國論を著すや痛く貿易干渉の事を非難し貿易は須らく之を自由にすべしと説けり、然れども當時諸般の學未だ今日の盛況を呈するに至らざりしを以て、氏をして其望む所のものに到底之を英人に望む可らすとの歎聲を發せしめたり、然るに氏の世を辭せしより未だ百年を出でざるに英國の貿易は曾て氏が望みしより一層の自由を得、數層の發達を加へたり、是れ他なし曾てアダムスミス氏の時代に望む可らざりし事件も星移り物變りて前陳諸般の學科大に進歩し和合して相捨離せず、經濟の學も亦共に進歩することを得たるに外ならざるなり、經濟學の解釋、經濟の目的本分等のことは粗々之を論述せり故に今一步を進めて國家の經濟學に於て最も重要とする所の交換及富の事を論究すべし、請ふ先づ交換より之を説かん。

## 第七節 交換

交換とは互に有無相通じ長短相補ひ自己の最も要せざる所の物を以て最も要する所の物を



得、其最も易しとする所の者を以て最も難しとする所の者を得るの方法を云ふ、故に之を小にしては一家中若くは一社會中互に相輔くるの狀と成り、之を大にしては一國若くは國際の貿易と成る請ふ少しく之を辯せん。

人類の生活を爲すや初めは棍棒若くは弓箭を取りて山林に入り禽獸を斃し其皮を剥ぎて之を衣とし、其肉を屠りて之を食とす、此時に當りてや一人獸を斃せば相寄りて其肉を食ひ、其血を吸ひ鼓腹互に歡樂を盡すを常と爲し未だ其肉を鹽にし其皮を滑にして以て之を貯ふるの術を知らず、故に當時に在ては交換の術は殆ど絶無僅有と謂ふべし之を狩獵の時代とす、然れども人口漸やく増加し禽獸其數を減するに隨ひ衣食給せず人々相搏つて尙且つ足らざらんとするの勢を爲すに到り終に衣食の缺乏に驅られて甫めて獸類を牧するの術を發明し、之に依りて凍餓の憂を免るゝことを得之を牧畜の時代とす、此時に當りては已に家畜の所有起るを以て互に大小異類の家畜を交換し又は家畜と他物と交換するの要を生ず、斯の如くにして能く一時衣食の缺乏を免るゝと雖も、牧畜の業は之を耕耘に比して土地を要すること頗る多く（凡そ五倍八五）、人口増加するに従ひて衣食復た給せず終に耕耘の業に移り、甫めて其生を安んずることを得、之を耕耘の時代とす、而して其一たび耕耘の業に移るや土地の所有を

人類進歩  
の三大時  
代

生じ又農具、牛馬、收穫物等各自特有の財産を生じ已に之を共用せず以て交換の要益々起る尙ほ更に社會に進歩を來し人間の需用増進するに従ひ農産物其他の原料品に人工を加へ以て其用を増し、此需用を満足せしむべき事業起らざるを得ず、之を製造業とす又此等の業より生じたる物品を分配すべき商業起らざるを得ず、斯の如く進歩一層の度を加ふれば交換の要亦一層を増し終に進みて一國中の貿易と成り、更に進みて國際の貿易と成る然り而して交換の事たる相互の利益はくれば決して之を永久に持續するを得ざるなり、然るに世往々此理を解せず貿易を以て一方の所得は一方の損耗なりと論する者あり、是れ大なる謬見なり一言以て辯せざるを得ず。

抑々交換とは釋義、於て陳述したるが如く有無相通じ、長短相補ふの術なれば固より損失を以て其目的とせず、今若し甲乙互に貿易し甲は常に利し乙は常に損するが如きことあれば甲乙の間貿易忽ち消滅するは最も賭易きの理なりとす夫れ物品の生産、製造は土地の外勢（氣候、山川、動植物等の景況を云ふ）と人民の性質人口、資本の多寡等と、因り東西其便を異にし、南北其利を一にせず故に東方の難しとする所は西方之を易しと、南人に餘裕あるも北方人は缺乏を感ずることあるは時に免れ能はざる所の現象なり、果し、然らば東西南北間に

交換の成  
立は雙方  
に利益あ  
るを要す



有無相通じ、長短相補ふは雙方の便利たる固より論を俟たざるなり試みに英米兩國の貿易を以て之れを論せんに、英國は宇宙の富國其の資本に富むこと固より世界に冠絶す、而して人口亦稠密なり、米國は沃野千里加ふるに河川の利、大湖の便國中に縱横浮遊し天然の農利に富むは復た地球上多く見ざる所なり故に英は工産に便して米は農産に便なり是を以て米國非常の保護税を行ひ以て英國の工産を苦しめ、執近米國の工業頗る發達せしに拘はらず、尙ほ兩國互に工産と農産とを交換し各々相利するは人の皆知る所なり若し夫れ兩者の一方孰れが常に損失を蒙むらん乎、英米兩國間の貿易は決して永く成立すること能はざるなり、勿論一時甲乙の間孰れか一方に於て商機を過り損失を受けるが如きことなきに非ずと雖も是れ貿易の變事と謂ふべくして固より常勢と謂ふ可らざるなり、變事を以て常勢と爲すが如きは是れ認見のみ固より堂に上るの説にあらざるなり。

又適切の一小例を引きて交換は相互の利益たる所以を示さん例へば茲に一學生あり始めて英學を志し一書店に至り店主に問ふて曰く「ユニオン」第一「リドル」ありや、店主恭然として對へて曰く貴客之を要するや、學生曰く余一部を要す其價幾何なりや店主曰く五十錢なり學生懷を探るに懐敢て暖なるに非ずと雖も五十錢を出して之を購ふ、店主五十錢を受取り謝

引例

して曰く有難う、學生「リドル」を得欣然として去れりと假定せよ是れ學生の爲には「リドル」は五十錢よりも其用多く、書店の主人の爲には五十錢は「リドル」一部より其用多きに非ざれば則ち能く此の如くなることを得ざるなり、果して然らば交換は釋義に於て陳述したるが如く雙方の便益たる敢て疑を容れざるなり。

### 第八節 富

富の釋義

凡そ有形無形を問はず人類の用に供し得べくして他物と交換し得べきものは之を富と云ふ富は之を別ちて有形無形の二種と爲す蓋し有形とは什器商品等の如く形體を存して他物と交換し得る物を謂ひ、無形とは才智、藝能、權利等の如く形體 有するに非ざれど之を用ひて他の物品を得るの力ある者を謂ふ例へば教師の藝能、年金者の權利の如く之を有すれば恰も什器商品の如き有體物を所有し之を賣却して収入を得るが如く之を使用して収入を得べきなり、元來富は此の如く交換力に基するが故に昔日は全く交換力を有せずして富に非ざりし物も世の進歩に従ひ富と爲るものあり、又昔日大に交換力を有し富の一部たりし物も人智の進歩、嗜好の變更に隨ひ其交換力の一部若くは全部を失ひ無用の長物と爲るものあり、則ち石

世運の進歩に従ひ交換力を生ずる



炭、石油、護謨等の如きは昔日は人全く其用を知らず偶々其物あるに於ては却て邪魔物として之を棄却せざるを得ざりしと雖も理化學の進歩に従ひ此等の物品殆ど必要欠く可らざる物と成り其所有者の爲め巨大の財源と成れり、然れども上人、高僧等の遺物、昔時寺院より賣出したる守札の類は中世の歐洲の如く宗教に沈溺し迷信強き時期に於ては非常なる價格を有せしと雖も、人智漸やく開くるに隨ひ此等は其苟も美術上、歴史上の參考に供すべき者を除くの外復た人の顧みることなきに至れり又流行物の交換力の如きは年月と共に大に變更す、彼の萬年青、蘭、兎其他衣服美術品等の流行に係る物の交換力が時と共に變動するは人の皆知る所なり。

抑々富は交換力に基し時勢の變動に隨ひ變更すること此の如し、然りと雖も苟も交換力を有する時は皆富にして天下に人間の需用に應ずるもの増加せば是れ之を富の増加と謂はざるを得ず、然るに中古に於ては全く富の性質を誤り金銀を以て唯一の富と爲し只之を得るを以て國家の富を増加するものとするの黨派を生ぜり之を主錢黨と云ふ英語に所謂「モルカンチリスト」なる者即ち是なり而して其主義は即ち主錢主義にして英語の「モルカンチル、システム」是なり、凡そ金錢は一般の購買力即ち交換力を有するを以て富の一部分たるに相違なきも、黄金萬貫飢を療す可らず白玉千箱何ぞ能く冷を救んや以て直ちに煎て食ふ可らず、繼て着るを得ず只能く他物と交換するを得るのみ然らば則ち交換の器具即ち貨幣の原料とするに適すと雖も之を以て唯一の富と爲すことを得ざるや論を俟たず茲に一奇話あり請ふ左に掲載して主錢主義の妄を辯せん。

昔時大阪に大洪水あり、甲乙二人共に一大木に攀て之を避く水去らざること二十有四時間甲は握飯三個を所持し、乙は黄金を携ふ須臾にして甲乙共に飢を感じ甲は先づ握飯一個を出して其一半を食ひ以て氣力を養ひ靜に水の退くを待つ、乙之を見て飢に堪へず顧みて甲に向ふて曰く汝の握飯一個を我に與へよ我能く汝に十金を與へんと甲答へて曰く水退くこと正に幾日を期するや知る可らず、然るに今我十金の爲に握飯一個を汝に與へなば我は汝と共に餓斃せん故に我之れを汝に與ふるを得ずと故に乙は更に購ふに百金を以てせんとす甲尙は肯んせず、次に乙千金を以てせんと請ふ甲少しく心動くと雖も乙の窮を知りて尙ほ之を聽かず、乙益々氣力を失ひ將に餓死の域に迫らんとし茲に至りて終に萬金を抛ち漸くにして握飯一個を得たりと。

是れ固より一夕の小話に過すと雖も亦以て金銀の特に唯一の富とするに足らざること論



すべく又主錢黨の好むが如く只金銀を得るを以て國家の富を増すものとし國中の貨物は舉げて之を輸出し唯金錢のみを國中に堆積するが如きことあらば、終に前陳の乙某の如き憐むべき境遇に陥るの虞なきを得ざるの實を示す所の好話柄と謂ふべし、然れども幸にして外國貿易の隆盛なる今日に於ては主錢黨の好むが如き事を實地に目撃すること能はざるなり何となれば苟も其國、貨物減少し金銀漸く増加するに於ては忽ち金銀の交換力を減じ其結果物價騰貴と成り之が爲め國中の金銀を以て外品を購入するの資に供するを便とし忽ち物品輸入の増加を來し以て自然に金銀流出の道を開く可ければなり。

## 第二章 消費

### 第一節 消費の釋義及其生産

#### 分配との關係

消費とは其目的原因の如何を問はず物品を使用し其用を減じ又は單に其用を減するの義なり即ち凍餒を防がんが爲め衣服食物を使用し衣服を製せんが爲に布類を使用し、食物を製せんが爲に五穀、鹽類等を使用するが如きは皆之を消費と云ふ、元來消費は生産の目的にして生産は消費の源泉なり而して分配は其方便となる蓋し目的なければ以て事物の發達を促すこと能はず源泉なければ以て其基本を固うすること能はず而して方便なければ其目的を達すること能はざるなり、消費の生産分配に關係する夫れ此の如し。

### 第二節 消費研究の必要

人類が團結して一社會を成す哉豈に衣食往の要なからざらん、況ん哉一步を進めて國家を組織するに於てを哉、抑々國家の強弱とは前記三大需用の豊富なると缺乏するとの間に外な



らず、農工の業盛にして採集の業之に加はり商業販販にして國民の消費力甫めて全きを得べし而して之を涵養する者は生産にして之をして盛大ならしむる者は分配の業なり、然りと雖も生産は消費を以て目的とせざる可らざるは既論の如く目的なきの生産は徒勞に屬する哉論を俟たず故に經濟を論ずる者は先づ生産分配を論ずるに前ち國民の必要とする消費は如何なる物にして如何なる點にある哉を詳かにせざるを得ず、元來國民最大の需用は衣食住の三點にあり而して其物體は農業、採集業工業より出でざるはなし、國に若干の民あれば農産、礦産、林産、水産、工産若干の消費を要するは數の最も賄易きものとす、勿論以上五大産業の生産物は盡く之を一國內に求むるを要せざるべしと雖も必ず哉工に足らざる所は農を以て之を補ひ、農に足らざる所は工商を以て之を充さざるを得ず、知るべし、英國の如きは後者の好例にして印度の如き前者の好例たり、獨逸は輓近人口大に増加（一年百分の一半の比例なり）し西人の調査に依れば食量の不足すること一週年中約百日なり、然れども工商の盛なる此不足を補ふて餘りあり、佛國は氣候温暖百貨に富み加ふるに其民の勤儉なる需給其宜を得て國礎甚だ鞏固なり、北米合衆國は其本部のみを以て之を見るも面積英國に約二十五倍し農利に富み、鑛産、林産の豊富なる四海に冠絶するのみならず輓近工業亦漸やく發達し諸般の

物産既に其人口の倍數を養ふに足る、而してフエリツピンの富アラスカの特産之に加はるありて只に國內消費に充るに足るのみならず進で四海の供給者たるの地位に在り我國は今哉過渡の期に在りて需給の關係其平を得すと雖も臺灣の農利、北越油田の富、北海道農林の利、樺太の漁利以て收むべく、百事當然の緒に就くに方りては又以て多大の餘力を見るを得べし前途の望實に洋々たるものあり、然りと雖も王制に曰く國九年の蓄なければ不足と曰ひ六年の蓄なければ急と曰ひ三年の蓄なければ國其國に非すと曰ふ例へば今茲に人口五千萬を有する大國ありて連年農産物八九千萬圓を輸入し工商の收入を以て之を補ふ能はず、之が爲に輸入超過となり而かも其國債權國として海外より元利の支拂を受くるに非ず却て債務國として元利支拂の爲に巨額を海外に支出するを要するの地位に居るものとせば、需給の關係消費の情況決して其宜きを得たるものと云ふを得ず、正に努力して以て其缺を補ひ需給の關係をして穩當ならしめ以て國民の消費力を養はざる可らざる哉論を俟たず。

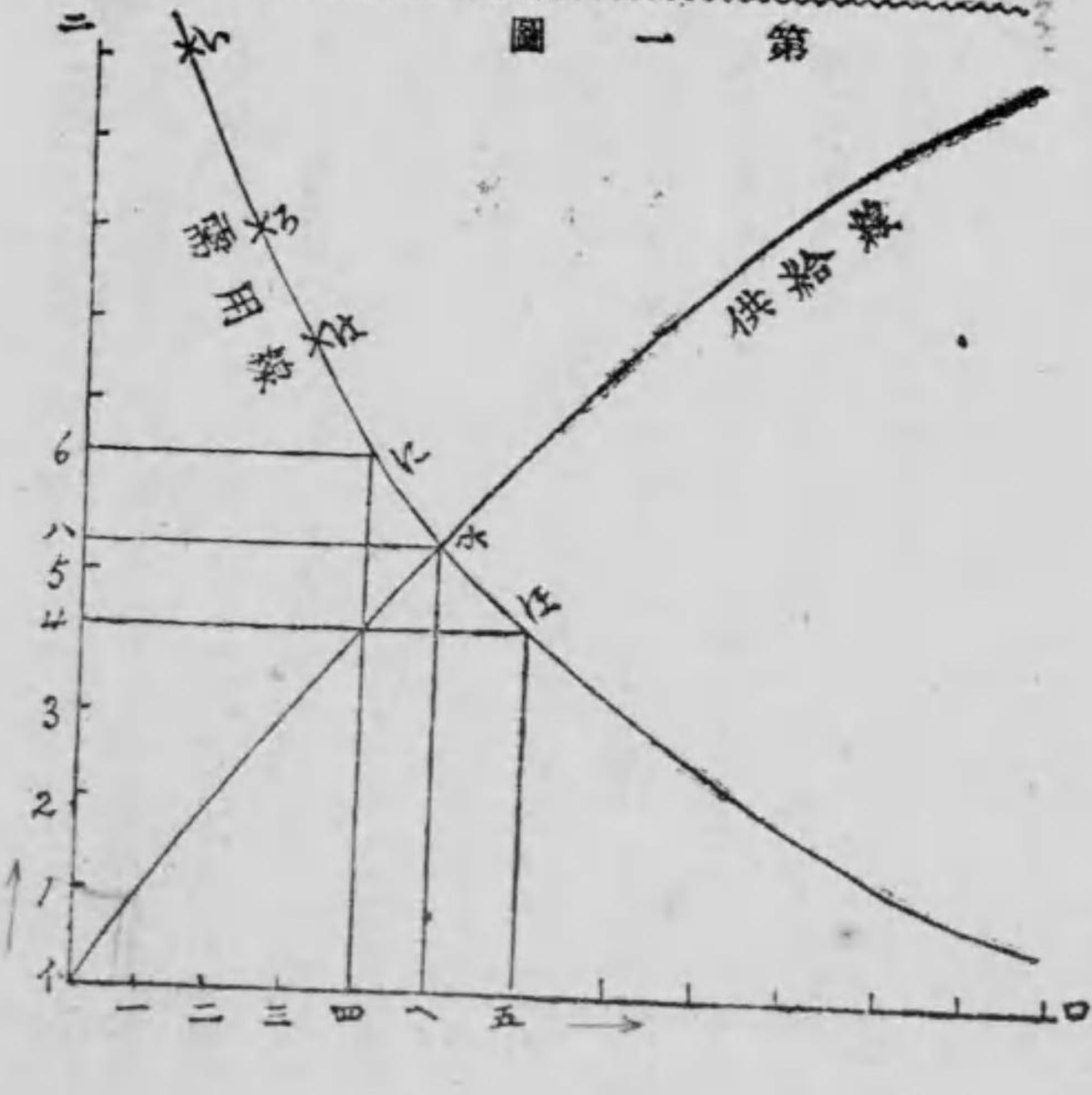
### 第三節 需用供給の説明

國家を維持經營するに方り需給關係の重要な既論の如し、依て今一步を進め消費に關す



る事項を論ずるに先ち大體に就き之が説明を試みるは敢て無用の業に非ざるべし請ふ少しく之を説かん。

夫れ需給は相互に原因結果の關係を爲し、需用を充さんと欲せば之を得るの供給なかる可らず而して供給は需用を以て目的とし目的なきの供給は得て望み難し西人之を論じて同體一物とし需給は恰も満月と三日月との如く月球に異體あることなく只觀る人の地位に由り其形狀を異にするの



第一圖

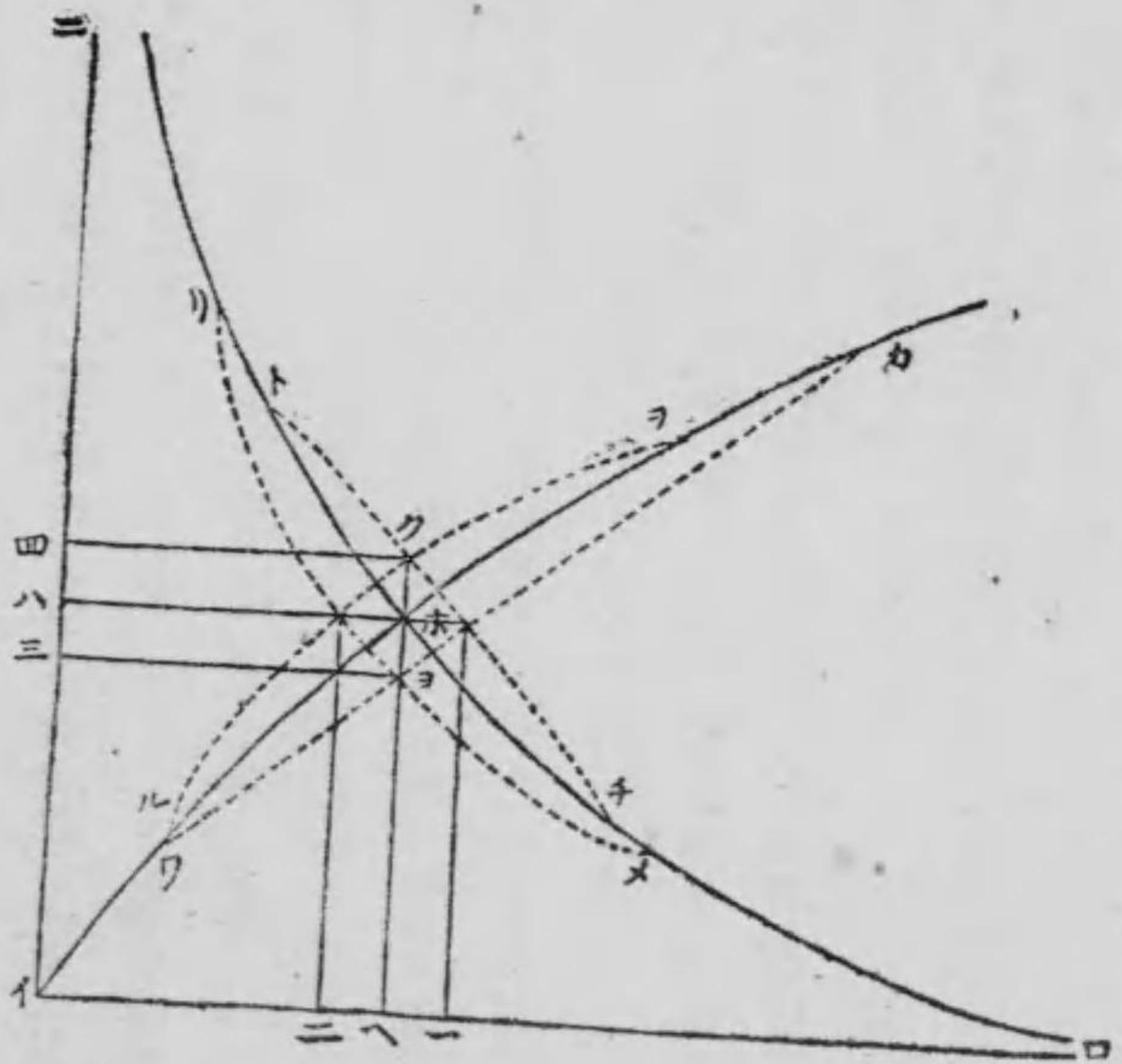
みと蓋し至言と云つべし。

兩者の素質夫れ斯の如し、然り而して其實際の運動は需給共に價格に依りて増減し、需用は其増加に従て減少し供給は則ち増加す而して兩者の遭遇する所は即ち市價の定まる所に於て其不符合は需給兩者の爲め共に便ならず請ふ圖解を以て之を示さん。

第一圖に於て「イロ」の横線は價格を示し其位は「イ」より「ロ」に向て増進す「イ二」の縦線は供給を示し「イ」より「ニ」に向て増進す「イ一」の點に於ては價格零なるを以て需用は無限なりと雖も供給せず、價格「一」の點に進み「イ一」と成れば最早需用は無限なること能はず、然れども其低廉なるが爲め緩かに「イの二」供給を生じ需用は「い」の高點にありて供給は「一」の點に止まり僅かに「イ一」の低位を保つを以て需給遭遇せず、價格「イ二」と成れば供給「イ三」となるも需用は「ろ」にありて需給尙ほ符合せず、斯の如く價格進むに隨ひ需用は順次に降下して「ホ」に至り供給は暫時に昇騰して「イハ」即ち「ヘホ」と同分量となり、此所に需給甫めて吻合し市價は即ち「イヘ」の位を以て定まる、今試みに需給の情況には毫も變化なきに市價「イ五」となれば需用は「ハ」の點まで下降し「イ四」の供給の外之を消費するを得ず「イハ」の供給は空しく生産者の手裏に残るべきを以て彼は生産費若くは損失を以て之が處分を爲さざる可らざる



圖 二 第



る悲境に陥るべし、之に反し市價「イ四」に止まれば需用は「」の點に昇り「イ六」の供給を取り盡すの勢と爲る、然るに供給は「イハ」に止まり「ハ六」丈は之なきを以て當初の消費過は後日の供給不足の因と成り、非常の困難を生ずべし、需給の離合概ね斯の如し察せずんばある可らざるなり又需給の變化より來る情況を示せば左の如し。

供給に變動なきに需用「トチ」の點線の如く増加すると

きは「イヘ」の價格にては需用「タ」の點に達し「イ一」の價格を以て「イハ」の供給を消費し盡すべし、之に反し需用「リヌ」の如く降下するときは「イヘ」の價格にては需用は「ヨ」に止まり「イ三」の供給を以て消費を満足し「三ハ」の供給は生産者の爲め相當の利益を生ぜざるべく「イ二」の價格にあらずんば「イハ」の供給を消費し盡すに至らざるべし、又需用の情況變せざるに獨り供給のみ「ルヲ」の點線に隨ひ増進する時は「イヘ」の高點に昇り「イ四」の供給の消費し盡すに至るべく「イニ」の價格にて「イハ」の供給を取り盡すべし之に反して「ワカ」の點線に隨ひ供給減するときは「イハ」の供給を得るには「イ一」の價格を支拂はざるを得ず「イヘ」の價格にては僅かに「イ三」の供給を得るに止まるべし、然れども「リヌ」「ワカ」の如く需給共に同比例を以て減少したるときは市價に變動なく只「イ二」の如く供給を減じ「トチ」「ルヲ」の如く需用供給同比例を以て増加したるときも亦市價に變動なく同價格を以て「イ四」の如く増加したる供給を消費するを得べし、由是觀之需給の増減は價格に隨ひ、其變動は該物品の價格に關係す常識の示す所實地に現はるゝ所之を學理に照すに符節を合するが如し復た何をか疑はん、請ふ進んで消費の要領に論及せん。



## 第四節 消費の區分

消費の大

消費は之を大別して生産消費不生産消費の二種と爲す。蓋し生産消費とは生産の爲めに物品を消費するを云ふ例へば船舶を製造するに板、鐵、麻等を要するが如し、此等の物品は取て消滅するに非すと雖も之を造船の爲に使用すれば板は變じて船體、甲板等と爲り、鐵は器械金具等と成り、麻は綱具等と成りて其元來の形を存せず、又造船に従事する各種の勞力者の使用する食品の如きは全く消滅に屬すと雖も此消費なければ船舶を製造すること能はざるを以て之を生産消費者と爲す、農を以て之を論ずるも例へば農業者の五穀を生産するや種子肥料を使用し又勞力者を養ふ所の衣食住の消費を要す此等の消費なければ生産の進行得て望む可らざるなり。

不生産消費とは生産を目的とせず又生産的勞力者を賛せず遊戯、逸樂等の爲に物品を消費するを云ふ例へば遊山、野遊、花見等と稱し身體を養ふが爲に要する外無用の飲食に耽るが如きは是れ即ち不生産消費なり、論者或は云はん是等無用の飲食を爲す人と雖も決して生産を輔けざるに非す何となれば此等の顧客あるが爲め飲食店の設置を要し、其設置あるが爲め

飲食品等の需用を増加すれば可なりと、夫れ或は然らん然りと雖も是れ決して一國の利益に非ざるなり、請ふ少しく之を辯せん。

是等の顧客なければ此等の飲食店を要せず其成立を見ざるは勿論なりと雖も之に使用する所の資本勞力は決して之なきが爲め使用を失ふものに非らず、其需用なければ他の生産事業に使用せらるべし、何となれば飲食店の需用なければ當初より之に資本を放下せず、其高は他に使用を求めざるを得ず或は之を銀行に預け入れ銀行は之を貸下げ又は之を以て手形の割引に従事し大に一國の生産を幫助するを得べく或は之を直接に農工商生産の事業に使用することを得べく又會社の株式等を買入れ以て實業を助くることを得ればなり、然るに前記の顧客あるが爲に生産の發達を鼓舞獎勵し得る所の資本は僅に菓子店、酒店に相當の利益を與ふるに止まり大に其効驗を失ふべし無用の消費は生産に害あること斯の如きのみならず又國民の身體にも利あらざるなり抑々遊戯、逸樂の事たる若し之をして身體を養ひ、精神を慰め以て國民の健康を増し其心神を高尙に赴かしむるに足るものならしめば一般進歩の爲め利あるは勿論經濟上にも亦多少の裨益あるや疑を容れずと雖も苟も此効驗なく之をして身體に益なく良心の恥つるものたらしめ又無用の消費を誘導するの媒介たらしめば是れ即ち有害物



時及事柄  
の消費

なり而して其消費は皆是れ不生産消費にして吾人の力めて避けざるを得ざる所のものなり。右の外時若くは事柄の消費、意思の消費、自然の消費と稱するものあり、蓋し時若くは事柄の消費とは形は顯然と存すと雖も、時の経過したるが爲め又は或事柄の起りしが爲に事物の用を失ひ又は大に之を減するものを云ふ、例へば昨年之の暦が今年一月一日より其用を失ひ、昨日の新聞紙が今日は其價を失ひ（例合昨日通讀せずとも今日は昨日程の面白みを有せず）大部の書籍中一二冊缺本となり又は靴、手袋等其片雙を失へば殘部は存在して毫も其形を變せずと雖も大に其價格を失ふが如きは是なり。

意思の消費とは物品は毫も其形を變せずと雖も、人民の意思の變化に由り大に其價格を減少するを云ふ、例へば流行の變遷に由り同物品の價格の變動あるが如き即ち是なり。此類の消費の強弱は人民の性質に由り各國に於て非常の差異あり、佛國の如きは流行の變動を感ずること甚だ厚く、和蘭如きは甚だ薄し、凡そ人民の流行に染み易きは其變化を好み幾分か活潑進取の氣象あるを示すものにして絶對に不利の性質に非ずと雖も屢々流行の變更に遭遇せば之に關係ある物品の價格非常に變動し工商其目的を誤まり或は不測の損失を被り或は僥倖の大利を得、以て多少投機空商の弊を醸成するは免れ能はざる所の勢なり夫れ活潑進取の氣

意思及自  
然の消費

象たる人之を有用の事業に用ふるは眞に可なり、然れど漫りに之を流行物に用ゆるが如きは決して希望すべきに非ざるなり、自然の消費とは氣候、氣象の作用に由りて家屋、什器等を損ひ又は害虫の災に由りて物品、作物を害ふ等を云ふ、實に熱帶地方の濕雨は木材を腐朽して木茸を生じ器具爲に膨脹して微を生じ其他莫大の損害を醸す又害虫の殿宇を覆し、蝗蟲の爲め饑饉を來たすは夙に世人の知る所なり。

### 第五節 消費と生産との權衡

生産には消費を要し消費は生産を以て之を支ふるは既論の如し、然らば則ち兩者の間に權衡を保ち生産をして其目的を誤らしめざる程の消費なき得ず、棉花耕作に對し相當の紡績事業あるが如きは最好の關係なり今夫れ兩者其權衡を失ひ百般物品中の或物の生産高にして之を消費すること能はざるの度に達せば供給需要に超過し忽ち其價格を減じ生産者の爲め多少の損失を來たすべし又或る物品の生産高にして之を他の生産品に比して少しとせば其需用供給に超過し價格騰貴し其使用に多少の不便を生ずべし、例へば一個の人口資本の景況に由り十萬の家屋を要するとし石材、木材其他の建築用品相比例して百疊敷の家屋十萬棟を建築



するの消費に充て以て過不足ならしめば差支なしと雖も獨り瓦の生産多きに過ぎ其供給のみ能く右の大きさの家屋十五萬棟を建築するに足るに至らば則ち瓦は石材 木材等に對て其價格を失ひ其生産者は多少の損害を被るべし之に反して瓦の生産高僅に八萬棟の家屋建築に供給するに止まらば則ち其價格騰貴して建築者の損失を來たすべし故に生産は消費の源泉なりと雖も不比例に或物品の生産を増加せば生産者の損失となり、不比例に之を減少すれば則ち消費者の損失となる。

以上論ずる所の生産超過は是れ一部分のものなり、一般の生産超過は經濟上決して起らざる所の現象なり、何となれば曩に例せし百疊敷の家屋十萬棟を建築する場合に於て建築用品悉皆相比例して十萬棟の家屋を建つるに足るの供給ありしに更に進みて建築材料各種の供給に二割の増加を來たし其他衣食に供する物品の生産も共に二割を増加せりとせば一方の供給増加は他方の消費力増加に由り悉皆需用せられ百疊敷十萬棟の家屋の代りに百二十疊敷の同数の家屋又疊敷は増さすとも従前より二割方上等の家屋を建築するを得べし、由是觀之世人の所謂生産超過は一部分の超過なり、一般生産の増加は消費力を増加し大に賀すべきものなり故に恐るべきは只一部分の超過にあり宜しく戒むべきなり。

一部  
の生  
産過  
は一  
般の  
生産  
に過  
ぎな  
し

## 第六節 個人の場合に於ては消費を

### 慎み生産及貯蓄を貴ぶ

消費生産の關係輔車相待つの勢あるは既論の如しと雖も、元來生産は消費の源泉たるを以て生産少しく消費に勝ち以て其源泉を固くせざるを得ざるは論の俟たざるなり、方今の如く外國貿易の盛大なる時代に於て最も然りとす而して個人の場合を以て之を論ずれば少しく前陳の論意と其趣を異にせざるを得ざるものあり請ふ少しく之を辯せん。

前節に於て論ずる所の消費と生産との關係は全局而より之を論ずるものにして國民一般の生産力は其消費力となり其貯蓄は株券、債券若くは銀行の預金となり共に生産の資に供せらる、今個人の場合を以て之を論ずれば其消費を支ふるには必ず生産力なきを得ず、生産を多くして消費を少くすれば其差違は即ち貯蓄と成り、餘財愈々多ければ生計愈々寛裕なるは多辯を要せず堯水九年湯旱七載の災野に青草なきも人に飢色なき所以のものは何ぞや儉以て性を養ひ静以て身を修むればなり故に個人の場合に於ては力めて消費を減じ生産を増加するに利あり、唯其消費を減するの限度は衣食住必要の需用を減じて其身體の健全を害するに至ら



す又各人地位相當の裝飾を缺き以て社會の嫌厭を來たすが如きことなく情誼交際の禮を缺き以て社交の利益を失はず事業に缺く可らざるの器具、機械材料を備へずして以て其生産力を減するが如きことなく又神心の慰養發達の道を塞ぎ以て心事の發揚を妨げざるにある耳、此限度を超えて消費を減するは一身上は勿論決して全局の利益に非ざるなり而して個人の餘財は積みて以て社會の富となり大に生産を幫助す他の銀行なるもの巨萬の金額を有し之を以て手形を割引し或は生産事業に對し資本の貸付を爲すは大に生産の發達を資くるものなり而して其資は何の所より之を得るやを尋ねるに各人の餘財即ち其貯蓄を收拾するにあり、之を收拾して以て全局の消費と生産との權衡を保つを得べし若し夫れ個人にして消費を増加し之をして其生産に超過せしめんか饑饉忽ち來りて吾人を攻むべし、豈に恐れざる可けんや請ふ一例を設けて貯蓄の便なるを示さん。

茲に金千圓を有する者ありとせんに之を使用するの道三あり

資金使用  
の三方法

- 第一 之を饗應等驕奢、逸樂の資に供すること。
- 第二 之を庭園裝飾の如き生産事業の資に供すること。
- 第三 之を農工の如き生産事業の資に供し又は之を銀行に預け若くは公債證書の如き確實

なる證券を購買すること。

是なり、此千圓の所有者若し第一の道を選まば唯八百屋魚屋料理人等に通例の營業所得を與ふに過ぎず、此饗應なくとも彼等は早晚之を得べし唯之あるが爲め少しく早目に之を得るに過ぎざるべし而して其消費する所の物は全く生産消費に屬し却て少しく其價格を増加するの理由ありて生産勞力者に供給する物を減少するの勢あり第二の道を選まば勞力者に食料を與ふと雖も是れ亦不生産勞力にして國家の主産を發達するに足らず、第三の道に依らば或は直接資金（株券に投するは其目的投機に非ざる以上は直接生産に従事すると同様なり何となれば株券に放下する金員は直に營業に使用せらるゝものなればなり）に生産を増加し年々其増加の度を進むるを得べく又之を預金とすれば銀行より割引貸付の爲に之を支出し、貯蓄者より見れば間接に生産を助け又は國家の事業を助け永久に其利益を傳ふることを得べし、由是觀之個人の場合に於ては特に消費を戒め生産貯蓄を尊ぶべきは更に多辯を要せざるなり

## 第七節 貯蓄と吝嗇との別

個人の場合に於て生産貯蓄の以て尊ばざるを得ざるや前節に於て論究せし如し即ち儉者は



其身を正し其心を清す、然れども世に所謂吝嗇家なる者あり、蓋し吝嗇とは義理を辨せず情誼を汲まず只管自己の爲に錢貨を愛惜するを云ふ、是れ大に經濟の趣旨に反す、經濟は目下の支出にして能く將來の利益とならば固より之を辭せず、義理、情誼を盡すが如きは下に利益を將來に傳ふるものなれば決して之を爲すを不可とせず、唯情に迷ひ原因結果の如何を問はず姑息に流るゝの弊を戒むる耳、其貯蓄を勤むるが如きも前節に記する所の諸件を缺き尙ほ之を爲すべしと言ふに非ず唯冗費、濫用を戒むるにあり、孔子禹を謂ふ「飲食を菲ふして孝を鬼神に致し、衣服を惡ふして美を黻、免に致し、宮室を卑ふして力を溝洫に盡す」と是れ眞の儉約なり、吝嗇と儉約との差違斯の如し、然れども之を冗費濫用と比するときは尙ほ或は恕すべきものありとす、凡そ吝嗇の守錢奴は生前敢て一人を養ふより多くの物品を消費せず爲に物價を騰貴せしむるの虞なく其貯蓄若し銀行にあれば生産を資すべく之を公債に放下せば以て國家必要の費用を幫助すべく之を株式債券(投機的に非ざる以上は)に投すれば以て民業發達の資に供すべく、之を私庫に藏するも其死後に至りて之を生産事業に使用することを得べし、然るに濫費浪費を事とする者は生前に於ては徒らに一人の消費に必要な物より多くを消費して約體なく甚しきに至りては不生産的遊民を養ひ死後毫も世に傳ふるものなく

其存する所のものは只負債のみにして即ち其生産せし物と消費せし物との差減を残す耳、吝嗇濫費共に經濟の趣旨に反すと雖も濫費に至りては最も害あり、獨り眞正の貯蓄は所謂福を惜む延壽の道にして個人に利あるは勿論延きて國家に益あり、努めずんばある可らざるなり消費の要項概ね斯の如し而して其源泉は即ち存して生産に在り生産の事固より大に研究せざるを得ざるなり、抑々生産事業は力を自然に藉らざるを得ざるもの頗る多く農業に於て最も然りとす、然りと雖も金融、運輸、通信機關等の如き人爲の施設を加へざるを得ざるもの亦少しとせず而して工業の如きは學術の應用其他八爲の施設に俟つもの最も多し、請ふ次章に於て其梗概を述べん。



## 第三章 生産

生産の釋

## 第一節 生産の釋義

生産とは新に貨物を産出し、在來の物品を利用するの道を發明し又は之に人工を加へて其形を換へ其用を創成し若くは増加する方法なり（ロツシエル氏の説に據る）生産の物たる夫れ斯の如し其新に貨物を産出するとは農夫が耕耘の術を施し五穀、野菜等を産出するを云ひ、在來の物品を利用するの道を發明するとは石炭、石油若くは藥草の如き天然、使用の道を發明し無用を變じて有用と爲すの類を云ひ在來の物品に人工を加ふとは木皮を以て紙類を製造し、土砂を變じて硝子と爲し棉花を以て綿糸を造る等を云ふ、要するに生産は地球上已に成立せる物の効用を増し人類の満足を求むるの方法にして其方法手段は之を人爲に辦るもの固より少からず、雖も之を消費分配等に比し經濟事項中其効驗を自然に待つもの最も多く採集事業及農業の如きは即ち最中の最たり故に其研究の要目甚だ多く而して消費、源泉及分配の目的物と成り國家の隆替に重大なる關係を有す、其要目を明にし其施設を全ふするは實に經國の要務、理世の秘訣たり、請ふ次を逐ふて之を説かん。

## 第二節 勞力

## 第一目 勞力と資本、土地との關係並に勞力の釋義

勞力と資本、土地との關係

生産に必要な缺く可らざるもの三つあり、何ぞや、曰く勞力、曰く資本、曰く土地是なり、三者相待つて以て生産上鼎足の勢を爲す、蓋し勞力ありと雖も資本なくんば生産未だ了せざるに當り以て其勞力を支ふる能はず、資本ありと雖も土地勞力なくんば終に之を用ゆるに所なし、請ふ勞力より之を論せん。

凡そ大小となく一事業を爲すには必ず多少の腦力若くは體力を要せざるなし、書を讀まんと欲せば必ず腦力を用ゐるを得ず、畑を掘り、薪を割らんと欲せば必ず手足の勞を要すべし、此の如く腦力、體力を使用することを經濟學上名づけて勞力と曰ふ。

## 第二目 勞力の種類

勞力を分ちて左の七種とす。

## 第一 發見、發明

發見とは其物己に世に存在すと雖も人未だ之を知らざるに當り始めて之を見出すを云ふ、

## 第二節 勞力



彼のコロンブスが米洲を見出し、フランクリンが電氣の天空に充滿せるを見出せしが如き即ち是なり。發明とは人の未だ爲さざる所を爲し、其尙ほ造り出さざる所の物を造り出すを曰ふ、弘法大師が「いろは」の假名文字を造りワットが蒸氣機關を造り出せしが如き即ち是なり。蓋し發見、發明は勞力中最も貴重なるものにして其世を利する亦恐くは此二者の右に出るものなかるべし。

## 第二 採集業

採集業とは伐木、鑛業、漁獵の如く自然の天然物を採るを曰ふ。

## 第三 原料品の生産

農業、林業（採集業の伐木は只天然の木を伐るを曰ひ、林業は樹木を培植し、茸類、木實等の如き森林の副産物を收穫する等の事を爲し只伐木を爲すのみに非ず）の如く製造品の原料と爲るべきものを産出するを曰ふ、養蠶、牧畜の如きも亦此業に屬す。

## 第四 製造

聖泥を以て陶器を製し、木材、金屬等を以て器具、機械等を製するが如く、在來の物品の形を變ずるを曰ふ。

## 第五 土木

道路の開鑿、家屋の建築等一切の工事を曰ふ。

## 第六 分配

商賈が物品を運搬、賣買し互に有無相通じ長短相補ひ、又は消費者の貨物を賣卸する等を曰ふ即ち輸入者、製造者、農業者等より卸賣商に貨物を賣卸し卸賣商より小賣商に小賣商より消費者に賣渡す等皆分配の業とす、土地、家屋等の貸附人、金貸營業人等も亦此類に屬す

## 第七 執務、就業

役人、僧侶、教師、辯護士、僕婢等の如き者の労働を云（以上ロツシエル氏の説に依る）凡そ此等七種の勞力は互に相待ち以て生産の業を助く蓋し農ありと雖も工なくんば農産に人工を加へて其用を増し以て人間高度の需要に應ずるを得ず、又工ありと雖も商なくんば農工の物産を其需要地に致すこと能はず其結果南隣は飽食暖衣して北隣には饑餓凍餒の慘狀を呈するが如き弊を見るに至るべし、然らば即ち此等七種の勞力互に相待ちて甫めて國家の安寧を維持し、徳義を厚ふし教育を盛にし國民の健康を保全し、經國の事得て談すべし若し夫れ否らざれば又何を以てか農工商百般の業を盛にすることを得ん。

各種勞力  
調和の必  
要



## 第三目 生産勞力及不生生産勞力

各種の勞力が互に相助くる斯の如し、然るに學者中往々勞力を大別して之を生産勞力と不生生産勞力とに二分し彼、農工の如き直接に物品を産出し又は製造する者を以て生産勞力とし役人、教師、醫師の如き間接に生産を助くるを以て不生生産勞力と爲す者少しとせず、然れども是れ唯其勞力の一國營業上の直接間接の關係あるを示すに過ぎずして役人、教師等の勞力を以て固より無用とするに非ざるなり即ち役人は國家の安寧を維持し以て直接に生産者と身體財産を安固ならしむるを務とし、教師は少年子弟の智識を啓き技能を磨き以て營業上新法妙案の發明を助け併せて其徳義心を養ひ以て相互の信用を厚くし、營業上に効驗を増加す醫師は生産者の健康を保全し其病日を減じ以て勢力の効驗を増加す。然れども之を一般人口に比例し、此等間接生産者の數か不比例に多きは國家の慶事、非ざるなり、畢竟世に此等の勞力を要するは人間、免れざる不完全の事あるに由るものなれば吾人は進みて人間最高度の地位に達し以て斯か、間接生産者の數を減少するに努めざる可らず蓋し人智進まざれば迷信多く隨て僧侶を要すること多く、健康高からざれば醫師の數を増加せざるを得ず、悪人多ければ多數の法官、辯護士等を要すべし、古人云はすや一人を以て耕して百人食すれば其害を

不生生産  
勞力者の減  
少を要す

爲すや秋螟よりも甚しと實に至言と云ふべし故に國民をして性質の純良と身體の健康とを兼有せしめ大に間接生産者の數を減せざるべからず、然らば則ち此等の人は最高尙なる教育と聰明なる智力とを以て直接に農工商の業に従事することを得べくして大に國家の富強を發達するを得べし、教師、醫師等の如き高尙なる事業を爲す者は寧ろ農夫及職工の如き直接生産者に勝るの功あれば之を以て生産上無用視することを得ざるには相違なしと雖も畢竟此等の世に需用多き所以のものは人民の徳義、智力、健康が高度に達せざるに基するもの多しとす故に吾人は成るべく其原因を矯め人口に比例し、直接生産者の數を増加することに努めざる可らざるなり。

## 第四目 勞力の目的

勞力の目的は力めて徒勞を避けて其効驗を増加するに在り、故に勞力は之を有効要急の事業に用ふるを要し、之を無効不急の事業に用ゆる可らず、水を擔ふて河頭に賣り、雪を擔ふて共に井を埋む何の効か之あらん、彼の保護方策黨が時未だ到らず、漁利未だ盡きざるに農業を起さんとし、人口足らず土地餘ありて農利未だ收め盡さるるに既に工業を起さんとし又煙草に適するの地に強て桑を植へ、麥に適するの土地に茶樹の培養を奨励し以て番茶一斤を得



るに大枚三弗を費し而かも經營數年終に業成らずして空しく之を枯死せしめたるが如きは皆是れ米國の實例なり。是れ勞力を無効不急の業に費したるの最も甚しきものと言ふべくして其經濟の旨趣に背戻すること實に大なるものなり、嗚呼勞力の使用上其方針を選ばざる可らざる所以のもの亦一に此に在り元來勞力の効驗を増加せんと欲せば其之を用ゐんとするの業を選ぶことの緊要たる論を俟たず、然れども其選擇の如何は時勢の狀況に因り千差萬別或は經濟上財政上の思想を後にし、兵事政治上の急務を先きにせざるを得ざることもあり或は一般の社會の進歩の爲め刻下の計算上の利益を犠牲に供し以て永遠の大利を圖らざるを得ざることなしとせず、理世の要は千差萬別一片の理論を以て豫め之を座上に論定すること能はざるは論を俟たず、然れども凡そ何れの場合を問はず勞力の効驗を増加し得るの方法二あり講せずんばある可らず其第一を分業とし、第二を勞力分類とす請ふ少しく之を辯せん。

## 第五目 分業及勞力の分類

## 分業

分業とは各就業者をして各々其分を守らしめ、心身共に其事に専ららしむるの方法なり果して心身共に其業に専らなることを得ば人各々其術に精巧なるを得る期して待つべし而して苟も其術に精巧なることを得ば善良なる貨物を廉價に製造することを得るや必せり聞く彼

## 勞力の分類

の留針の製造に於ては同時に十人の勞力を用ひて分業すれば以て二日五萬箇を製造すべく、分業せざれば以て僅に二萬箇を製し得るに過ぎずと、嗚呼分業の利益亦實に大なる哉、而して分業の發達したるものを勞力の分類と爲す、元來分業の利益たる前陳の如く夫れ大なりと雖も單に分業と云へば男女、老幼、強弱を問はず甲者一業務に従事し、乙者他の一業務を爲せば以て其意に背かざるべし、然れども斯の如くしては男女、老幼、強弱各々其固有の性質と長短とに従ひ業を分つを得ずして天與の長所を盡すを得ず、是等の特質と長短の存する所とに従ひ業を分つを勞力分類と云ふ例へば留針の製造に於て針金を製造するには大なる腕力を要するを以て之が爲めには壯年の力量ある者を用ゐざる可らず、其針金を適當の長さに切るが如きは腕力を要せず又非常の熟練をも要せざるが故に老幼と雖も尙ほ之を能くするを以て之が爲め壯年の力量者又は高價の勞銀を要する熟練家を用ふるが如きは頗る牛刀の憾なきを得ず、然れども針の先きを尖らし又之に頭を付けるの業は熟練家に非ずんば得て之を爲す能はざるを以て之が爲には熟練家を用ひ、留針指しの紙に穴を穿ち又は之を入る、箱を張るには壯年男女よりも却て勞銀の廉なる婦女子に特長あるを以て之には婦女子を用ゆるが良しとするが如き等是なり、由是觀之男女老幼、強弱、熟練、不熟練等に因り各々其業を分ち以



て小舟岸に在り大艦洋を渡るの利を收めざるを得ず謂つべし勞力分類は以て分業の最も發達したるものなりと。

第六目 分業及勞力分類の區域

分業及勞力分類の利益大なること凡そ此の如し、然りと雖も一面市場の情況と營業の性質とに因り一面社會一般の利益の爲め極端に之を推すこと能はざるものあり抑々生産の目的は消費に在りて損失に非ざるなり、然るに世運未だ開けず需用尙ほ旺盛ならざるの社會に於て大に分業を執行するが如きことあれば之が爲に貨物の生産過剰を生じ一部の供給需用に超過して生業者の損失を來すべし、若し夫れ分業及勞力分類の法にして同比例を以て悉く各營業に行はれ、百般の營業者皆同比例 以て其供給を増加し、互に購買力を増進して相互の供給を相互に需用し盡すが如きことあれば決して損失を來すの恐なかるべし、雖も斯の如きは假令同業者中たりとも決して實地に望むべきことに非ず、況んや百般の事業に於てをや又農業の如きは決して工業の如く十分に分業を行ふこと能はざるものとす例へば田作の種蒔に熟し之を以て專業とする者ありと雖も晩春、初夏の候播種の季節を除くの外、春夏秋冬共に爲すべきの業なきを奈何せん今若し種蒔の季節に於て此種蒔専門家に其以て一年を支ふるに足る

一般の事に増し  
比例の實現  
加に事  
出に難し

農業の如  
き季節に  
依る者は  
分業を十分  
するを得

丈けの給料を與ふること、せば徒に農家の勞銀を高くし偶々以て農産の發達を妨ぐるに過ぎず、故に總て季節時期に依り勞働を異にする所の事業は彼の年中一人の勞力者引續きて同一の業務を爲し得る所の製造業斯の如く精密多岐なる分業を爲すこと能はざるなり、夫れ農は季節に依り又時期に依りて大に其業務を異にせざるを得ず、耕耘其時を異にし、晝夜其業を等ふせず側ら牛馬を飼ひ、農間にありては或は山に樵り薪を市に鬻ぐが如く一身を以て種々異様の業を爲さざるを得ざるは世人の普く知る所なり、分業の以て均一に之を百般の事業に及ぼすことを得ざるや又多辯を要せざるなり。

若し又分業を極度に推すときは人類をして殆ど器械同様の境遇に陥らしめ其精心の墮落は勿論、甚しきに至りては健康を害し天壽を奪ふの結果なしとせず、思はずんばある可らず例へば茲に一人あり幼少より活版屋に傭はれ年五十に至るまで活字拾ひにのみ従事し他に一事を爲さざりしとせんか、此者固より其業には非常の熟練を得るに相違なしと雖も、人間の仕事とし云へば活字拾ひの業を除くの外殆ど一事を知ること能はざるに至るべし、斯の如きの人物社會に多きは決して好ましきことに非ざるなり又茲に一人あり市街の掃除を專業とし數年此業に従事せりとせんか此者亦下水掃除に非常の熟練を得るに相違なかるべしと雖も元來

極度の分  
業に人道  
に害あり



掃除業の如きは固より精巧勞力に非ざるを以て之が爲め非常の熟練を要せざるや必せり、故に此者をして永く自ら不健康なる事業を爲さしめんより時々違ふたる人足を備ふ方便利なるべし何となれば下水掃除の業たる一時之に従事するも敢て健康を害する程の業にあらずと雖も數箇年の久しきに涉り斷へす之に従事するが如きは頗る不健康の業たるを免れざればなり果して然らば分業を極度に推し人類を器械の如くに爲し又は其健康に害あるの度に及んでは或は器械を以て之に換へ或は其分業の度を緩め或は爲に轉業を圖り以て此害を避けざる可らざるなり。

## 第七目 高等事業の分業

如上は専ら手足の勞に關する所の分業に就て論せしと雖も政治財政法律醫術等の如き高等事業にも自から分業の利なきを得ず是等高等事業に従事せる者にして各其分を守り其學を講し其術を磨き以て其業の進歩を計るは勿論なれども、其事たる廣く他業と相關係し決して各自孤立するを得ざるものたれば苟も普通道の學を經過せずして當初より是等高等専門の學に入るは又得策に非ざるなり勿論資力、年齢其他已むを得ざる事故ある者が普通の學を終すして直に専門の學を修むるが如きは格別の事なりと雖も成るべくは普通學を以て其學問の基礎を

高等専門  
の術は普  
通學上に  
築かざる  
可からず

廣くし然る後高等専門の學に入り深く其蘊奥を極めたる上にて高尚の事業に従事せんことを要す若し否らざれば自己の修めたる専門外に事業あるを知らず又他業の効力を解せずして之が爲め自己の事業を擴張する能はざるの虞あり故に分業は固より之を尊ぶべきも、高等事業に至りては彼の一業は他業の關係を見るに及ばず専ら一科の學を修めば他は之を顧みるを要せずと言ふが如きは大にが當を得ざるものとす、然れども一人にして各専門の學を修め各高等の事業に従事するが如きは到底人間の爲し能はざる所なれば先づ普通學を以て其學問の基礎を作り此廣き基礎の上に自己の専門を築くを要す家々の門路長安に通ず普通學科以て修めざるを得ず關係の學科亦其概要を知らざるを得ざるなり然れども縦合驢騾鼠を捉うるも則ち跛猫に及ばず専門の學以て修めずんばある可らざるなり。

## 第八目 日當及單價支拂法

茲に又勞力を用ゆるに日當及單價支拂法の別あり、日當とは一日若干の勞銀と定むるを曰ふ大工の手間賃の如き即ち是なり、單價支拂法とは仕事の出來高に應じ一個若干と其勞銀を定むるを曰ふ、疊屋が疊一枚の刺賃を若干と定め出來高に應じて勞銀を受取るが如き即ち是なり、今兩者何れが利なりやと謂ふに其間互に得失ありて一概に一を取り一を捨つる能はず



然れども要するに單價支拂法に依るときは製品粗造に流るゝの弊あれば精巧を尊ぶ所の物品に關しては日當を良しとて、數量を目的とする所の物に關しては單價支拂法を良しとす又農業、獸類の皮剥等の如き事業には單價支拂を主張する者ありと雖も此等の事業に於ては通例日當の方却て便利なるが如し、例へば一段歩の田地を耕さば幾許一段歩の稻を刈れば幾許、一石の米の俵造りにすれば幾許と豫め其手間賃を定め置き出來高に應じて勞銀を與ふることせば大に其業を勵み頗る便利なるの想なきに非ざれども斯の如くするときは耕すときは深く鋤を打込みて十分に土を碎くことを爲さず、刈るときは注意周到なるを得ず動もすれば穂を落し或は之を害ふの虞あり又俵造りをなすときは勢ひ粗略の弊に流れ易く往々多量の米粒を地上に散失する等の如きことなきを保せず故に人口尙ほ未だ稠密ならずして耕地甚だ廣く只早く多量を收むるを尙び米粒の散失等は敢て之を意とするに足らずとなすが如き時期に於ては單價拂を便とすべしと雖も農業既に高度に達したるの今日に於ては却て日當を以て便とす又彼の皮剥事業の如きも單價支拂にては勞力者が徒に數の多からんことを争ふて動もすれば皮を破り害ふの虞あり故に數量のみを尙ふ時代に於ては多くの場合に於て單價拂を可とすも上等の皮革を要するの今日に於ては日當の方却て利ありとす。

因に云ふ瓦斯管、水管等敷設のため地面を掘鑿する場合の如きは單價拂法最も便利なる何となれば深さ何尺何寸廣さ何尺何寸と云ふ如く單位最も精粗の別を要せざればなり。

### 第三節 資本

#### 第一目 資本の釋義及分類

資本の釋義

資本とは過去の勞力の結果にして未だ消費し盡さず以て將來の生産を資くるが爲に使用し得べき者を云ふ而して其分類は左の如しロツシユル氏の説に據る。

第一 土地改良の結果即ち原野を灌漑し池沼を疏通し以て水田となし、森林を開拓して陸田となし以て耕耘の用に適せしむる等の類是なり、凡そ此等の改良は皆是れ過去の勞力の結果にして將來の生産を資くるものとす。

資本の分類

第二 建物即ち住家、倉庫器械室、商店等を云ふ凡そ此等のものは又是れ皆過去勞力の結果ならざるはなし、然り而して住家なくんば資本金家勞力者の生活を保つこと能はざるべく倉庫器械室等なくんば將來の生産を資くること能はざるなり。

第三 道具、器械及器具、是等も亦過去勞力の結果にして皆將來の生産を資くるに必要缺



く可らざるものとす蓋し道具とは鋸、鋤、錐、鋸等の如く直接に手足を以て使用する者を言ひ機械とは米搗き機械、紡績機械等の如き者にして人力、蒸氣力、電氣力、水力等の如きは只連轉の原動力を生ずるに止まり、木源に於て之を用ふれば相傳へて他の部分に及び複雑なる組織と雖も容易に之を運轉するを得る者を言ひ器具とは鍋釜の如く直に或る用をなすが爲に使用せらるる者を曰ふ。

第四 實用に供すべき家畜、家禽即ち鶏、豚、牛、馬の類を謂ふ。

第五 粗生品即ち製造の原料に供すべき物にして棉花、地鐵、材木等及半製品の類を謂ふ

第六 助成品即ち紺屋の染草、獵夫の彈藥、農家の肥料の如く其業に於ける目的物の一部分を構成せずと雖も其者の力を假らざれば其業を成し、其目的物を得る能はざる者を謂ふ。

第七 飲食物即ち之を以て生産者が生産の業に従事し居る期間、其飢を支へる者を謂ふ。

第八 商品即ち商買が其倉庫に藏置し又は店頭に羅列して購買者を待つ物品を謂ふ。

第九 貨幣即ち交換の媒助、價根の標準として世上に流通する者。

第十 無形資本即ち才智、藝能の如く之を使用して一身を立て又國の財源を發達し得る者

又有名なる會社の得意の如き者を云ふ。

## 第二目 固定及流動資本

資本の原理は概ね前陳の如し而して之を大別して固定資本及流動資本の二種となす其所謂固定資本とは家屋、器具、機械等の如く一度之を設置せば久しく使用に耐へ消費甚だ遅緩なる者を謂ひ流動資本とは勞力者に勞銀を支拂ふ所の基金及原料品の如く一時の用に供し速かに運轉し、或は其處を換へ或は其形を變ずる者を謂ふ、斯の如くして流動資本は勞銀基金及粗生品の二類に細別せらる蓋し勞銀基金とは一國資本の總額中勞力者の報酬即ち勞銀の支拂に充つべき分を云ひ、原料品とは製造の原料と爲るべき物品を謂ふ、然れども此場合に於ては原料品の購買に充つべき基金と見る方便利なるべし請ふ今一國資本の成立を明にせんがため左に一方式を設けて之を示さん。

因に云ふ勞銀基金の存在に就ては多少の議論なきに非ざるも其微妙深遠なる純理は暫らく之を論外とし方今の實況勞力者は其從事する事業の成品賣却代價の分配を俟つを得ず、就業中に資本家より勞銀の支拂を受け其生活に充るを以て勞銀は現實未來の生産の結果より出です、一たびは現在の資本より支出せらる故に勞銀基金の實在は之を現實資本中に認



めざるを得ず。

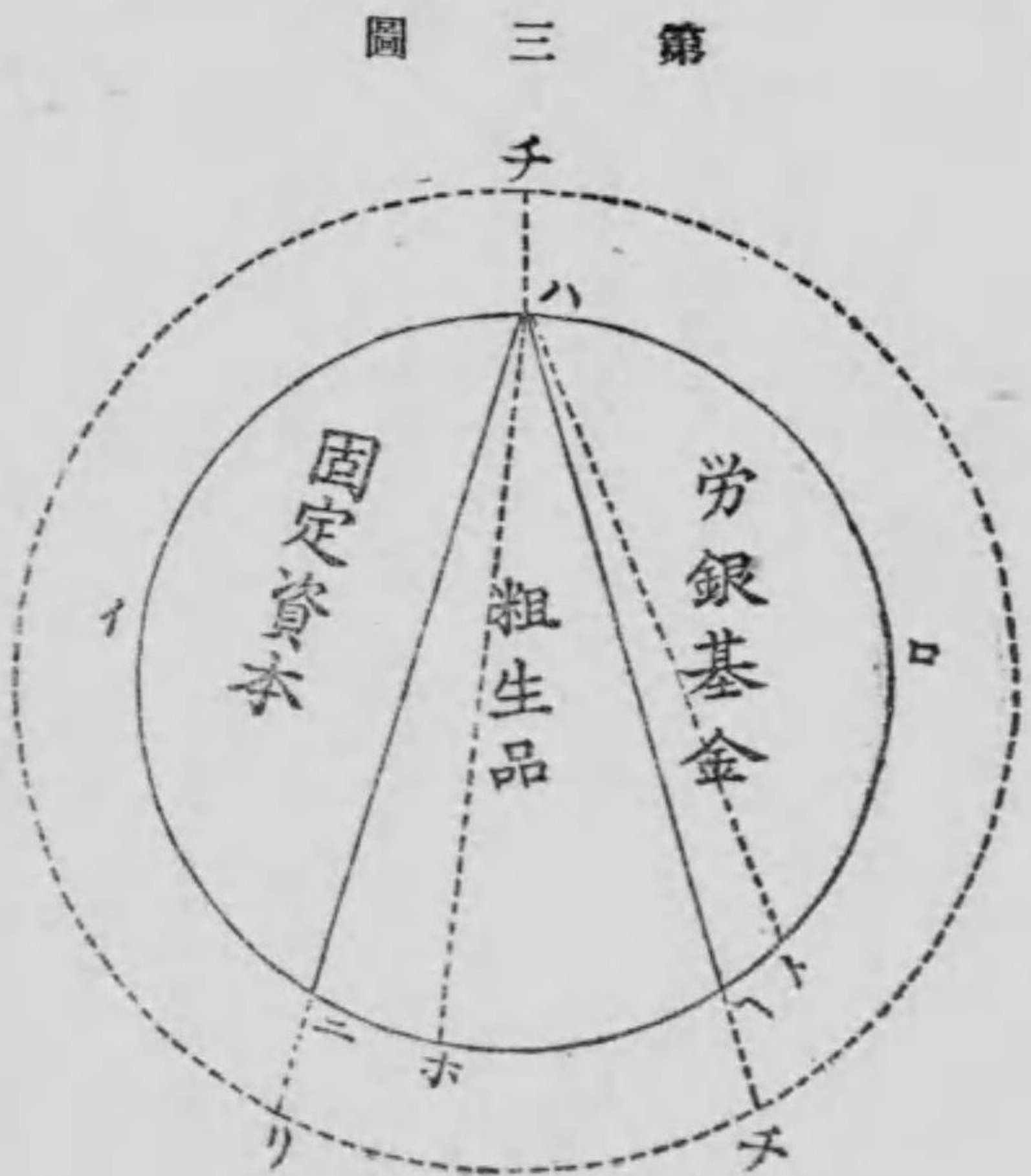
$$\begin{array}{r}
 \text{「ハ」 流動資本} \\
 + \quad \left\{ \begin{array}{l} \text{「ホ」 勞銀基金} \\ \text{「ニ」 原料品} \end{array} \right. \\
 = \text{「ロ」 固定資本} \\
 = \text{「イ」 一國資本總高}
 \end{array}$$

資本の區分せらるゝ情況概略斯の如し、此の方式中「ロ」「ハ」の關係即ち固定資本と流動資本との關係能く其比例を保ち調和して互に相翼くることなければ、生産の發達得て望む可らざるなり、是れ所謂霧海の南針、夜途の北斗なり又何をか疑はん例へば「ロ」が不比例に大にして「ハ」の内容殊に「ニ」即ち原料品の不足を告ぐるが如きことあらば之がため却て一時「ロ」即ち機械の運轉を停止し又は既設の機械中其一半若くは三分一のみを使用し、他は皆徒に腐朽に歸せしめざるを得ざるが如き悲境 陥るなきを保せず、之に反し「ニ」が不比例に大なるときは爲に「ロ」即ち固定資本の缺乏を生ずるは勿論「ホ」即ち勞銀基金も「ニ」の爲に蠶食せられて機械勞力共に缺乏を來し徒に原料品を以て倉庫を充滿し資本の運轉を遲鈍ならしむべし

又「ホ」が不比例に大なるとき之れがため機械の進歩、原料品の改良に供すべき資本を缺き、農工百般の事業は得て發達す可らざることとなるべし、而して「イ」即ち一國資本總高の未だ増加せざるに俄に「ロ」を増加するが如きことあれば勢之を「ハ」に供すべき者より取らざるを得ず、隨て「ホ」「ニ」の基金に缺乏を生ずるは必然の數なりとす、是に於てか其折角増加したる新設の機械も之が爲め其運轉を爲すの元資たるべき原料品を得ること能はず勞働者も亦其勞力を試みるの所を失ひ巧妙の機械却て有害の障礙物と爲るの歎あるを免れざるなり、今予の解し易からんが爲め圖解を以て其然る所以を示さん。

左の圖解に於て「イハロヘニ」の圓線書を以て一國資本の總額とし、圓線の書中「ハイニ」の部分で固定資本とし「ハニヘ」の部分で原料品として「ハロヘ」の部分で銀基金とし先づ其分配の模様にて資本の三區分其當を得たるものとせん然るに「イハロヘニ」の圓線書依然として動かさるに俄然「ハイニ」の部分を増加して「ハイホ」の部分で以て固定資本の區域とせば原料品と勞銀基金との部分の減少の數は免れ能はざる所にして原料品は「ハハト」に勞銀基金は「ハロト」に其區域を狭縮せらるべし、今若し原料品の部分を変せず又は新に増加したる固定資本の所要に應ずるが爲め此部分を従前より大に爲せるとせば、勞銀基金の部分





の益々減少して勞力者の困難は勿論、甚しきに至りては或は之が爲め勞力の効驗を失ひて終には資本家の損失となるが如きことなきを保せず故に前陳資本三區分の比例を失はず、生産の効驗を減せず一國の經濟を紊さす以て安全に固定資本を増加し得るは唯一國の資本總額を増加するより他に方策の存するなし、即ち前圖に於けるが如く資本總額たる「イハロヘニ」の圓線畫を

増加して「チリヌ」の圓點線畫と爲すときは以て右三區分は毫も其比例を失ふことなく、均しく増加して固定資本は「チリ」原料品は「チリヌ」勞銀基金は「チヌ」の部分を保つことを得べし吾人の望む所のは實に此増加にあり、資本總額は依然として動かす唯其一部分に不比例の増加あるが如きは固より吾人の望む所に非ざるなり。

第三目 資本の區分は事業の種類に由り其比例を異にす

資本の區分せらるゝは前陳の如しと雖も其主として農業に用ひらるゝと工業に用ひらるゝとに於て分配の比例を同くせず、北米合衆國及濠洲諸殖民地の如く沃野千里に連り人口尙ほ稀薄なる國に於ては農利の盛なる論を俟たず、抑々農業は工業の如く高價の機械を要せずして其要する所のもの主として勞力にあり故に是等の國に於ては勞銀基金の割合、之を資本總高に比較して多からざるを得ず、白耳義、英吉利の如き國に於ては即ち然らず、人口餘りありて土地足らず、其工業の盛大なる蓋し勢の已を得ざるものあり、夫れ工業は巨大高價の機械を要し資本、總額中固定資本の其重要なる部分を占むるは又數の免れ能はざる所なり故に前掲第三圖の如く資本總高増加するときは其増加したる部分は主として工業の爲に用ひられ固定資本の區域其増加の大部を占め、原料品勞銀基金の部分は只固定資本の増加を支ふる



丈けの増加を見るに止まるべし之に反し其増加したる資本が主として農業の爲に使用せらるゝときは勞銀基金の區域に重なる増加を來すべし、果して然らば甲乙兩國に於て其資本總類は同額なりと雖も其國重要な營業の種類に従ひ又同一國に於ても資本總額の増加するに及び其主として農業に用ひらるゝと工業に用ひらるゝとに於て勞力者 利益に著しき差違あるものとす、然れども苟も資本にして増加するに於ては勞力の需用を増し此増加したる資本は假令主として固定資本の爲に使用せらるゝも幾分か勞力の需用を増加すべく而して此増加したる固定資本をして其用を爲さしめば將來に於て大に資本を増加すべく此増加は結局勞力の需用を來し其利益を増進するや論を俟たす唯其使用の方向に依り利益の度合に多少の差違ある耳。

## 第四目 資本を得るの困難

資本は過去の勞力の結果にして未だ消費し盡さざる物なれば之が獲得は唯勞力を施して之を得、之を生産するを以て足れりとせず必ず其得たる物を貯蓄せざるを得ず、然るに時草昧に屬し農工の業開けず、人民食を山野水邊に求むる時代に於ては固より今日の如く前世貯蓄の餘澤を受け農の生産する物は工更に之が用を増し工の製造する物は商之を其需要ある處に

致し、事業連絡以て其生計を易くするの術あることなく隨て獲れば隨て消費し、唯是れ衣食を求むるに汲々として未だ餘裕あることを得ざりしなり而して貯蓄は目下現に得べきの快樂を棄てゝ其尙は知る能はざる未來の爲を計るものなれば、開明の人と雖も尙ほ或は之を難しとす况んや未開野蠻の人民に於てをや、彼の亞米利加、亞弗利加等の土人が始めて耕耘の業を開明國の人に學びたる頃に當り五穀の種子を得れば即ち之を貪食したるが如きは又以て怪むに足らざるなり、抑々勞働は日常の生計の爲に之を爲すも尙且つ之を難しとす况んや事を將來に期し勞働の結果を貯蓄するに於てをや、其困難なる更に數層を加ふるものあるは言を俟たざるなり、然るに資本の蓄積は此兩者を兼要す其得易からざること知るべき耳、故に人智漸く開け未來の以て慮るべきを知り、制度文物漸く整ひ、節儉の結果を未來に收め得るの期望確乎動かす可らざるの世にあらずんば則ち貯蓄の念を喚起すること極めて難しとす、加ふるに其始めに於ては殆ど必要の衣食を缺き以て之を貯蓄せざるを得ず、資本増殖の難き夫れ斯の如し、然れども之を増進するの術亦自ら備はる、何ぞや教育を盛にして人智の發達を謀り人民をして未來の以て慮らざるを得ざる所以を知らしめ、制度文物を整頓し以て資財の道を開き國民をして現在の勤勉節約の結果を將來に全くするを得せしむるにあり、果して然



らば資本の増殖亦何ぞ之を難しとせん、夫れ資本の貯蓄は勞力と忍耐との結果にして、勞力忍耐の奨励は人智の發達と制度文物の整頓とに依らざる可らず、之を夫れ力めず或は特に一事業を偏愛し或は勞力者に特惠を與ふるが如き（八時間労働問題の如し）其他種々の奇策、怪説を唱へて以て資本の増殖、事業の擴張を謀らんと欲するが如きは是れ固より資本増殖の道に非ず、所謂木に縁つて魚を求むるの類にして只に其効なきのみならず偶々以て世を惑はし民を愚にするに過ぎざるなり、人あり一説を唱へて資本の増殖、事業の發達を謀らんとするに際し其説果して勞力を奨励し貯蓄を誘導するの實あらば余輩則ち之に左袒すべし苟も其實なければ是れ全く無用若くは有害の説たり又何ぞ顧みるに暇あらんや。

#### 第五目 資本の効力

元來資本は生産將來の資に供する者にして生産事業の進行中勞力者に衣食住を給し工業の爲には原料品農業の爲には種子、肥料等を給するが如き生産をして循環連絡以て間斷ならしむるは總て是れ資本の力なり、試に思へ餘寒未だ除かずして冬衣未だ重きを感じざるの日に於て商賈の店頭早や已に春衣を備へ、織機既に夏衣の製造を試み、製糸の機械は已に冬衣の爲に忙はし、事業の循環連絡する夫れ斯の如し而して其能く斯の如くなることを得せしむ

るものは是れ資本の力に非ずして何ぞや、資本缺乏するときは春衣を賣り盡したる後に非ざれば夏衣の製造を爲すこと能はず。又夏衣を賣却し畢るに非ざれば冬衣の爲め製糸機械の運轉に着手すること能はざるべし、農商の業に於けるも亦然り、農は春夏の候其田を耕し其稻を養ひ徐ろに收穫の終るを待ち、商は貨物を千里の外に送り泰然として其收利を期することを得るものは過去の勞力と節約との結果即ち資本の力に頼らずんばある可らず、由是觀之資本は事業を連絡し之をして循環其時を失はしめず以て生産を増加し、國家の發達を助くること多大なり、是れ之を以て生産上三大要件の最と爲す眞に故あるなり。

### 第四節 土地

#### 第一目 土地の意義及其必要

生産に欠く可らざる第三の要件を土地とす蓋し土地とは原野、山林、沼澤、河川、海洋及其包有物を總稱す例へば茲に一國あり假令資本に富み人口亦稀薄なりとするも、若し耕すべきの原野なく採伐すべきの森林なく、採掘すべきの鑛山なく、狩獵すべきの山野、漁すべきの河海なくんば資本も放下するの途なく勞力も用ゆべきの處なきを如何せん、土地の生産に



必要なる多辯を要せず、然れども若し始めよりして右の如く耕すべきの土地、獵すべきの山野、河海全く之なきに於ては固より人口の増殖、資本の蓄積得て望む可らず、人口、資本の事得て論すべきに非ざるなり、然りと雖も其己に一國を成したる後に於て人口資本共に餘りあるも土地足らざるが如きことあれば頗る不便を感ずるものなしとせず彼の英國白耳義の如き即ち是なり故に工商を盛にし以て其不便を避く、就中白耳義の如きは人口最も稠密（全國平均一英方哩五八九人、西曆千九百年）他國の棄て顧みざる土地と雖も尙ほ能く資本、勞力を加へて其耕耘を務むるは人の熟知する所なり即ち彼のフランドルス海岸に沿ひたる砂地の如き殆ど砂漠に類し草木も得ず其生を保つこと能はざるの瘠瘠の土地なりと雖も白耳義人士の勵勉なる尙ほ之を棄せず、初め先づ之に「ブルーム」樹、漢名金雀花、灌木にして黄色の花あり能く砂地に産す）を植付け其根に依りて砂を固め、其葉腐朽して其地の肥へるを俟ち、曩に植付けたる「ブルーム」樹は之を薪とし、多少の肥料を施して蕪を培養し、其地に羊家を放牧し之に此の蕪を與へ以て動物的肥料を地上に散布せしめ、其地の一層肥へるを俟ちて初めて之に麥を耕作す、其勞實に想ふべきなり、之に反して北米合衆國の如きは固より土壤廣大にして沃野千里に連なり斯の如き土地は棄て、之を顧みず只膏腹の地を選びて之を耕作す

る耳、是を思ひ彼を思へば生産上土地の關係國情に依りて異なること思ひ半ばに過ぐるものあり察せずんばある可らざるなり。

#### 第二目 土地の生産力

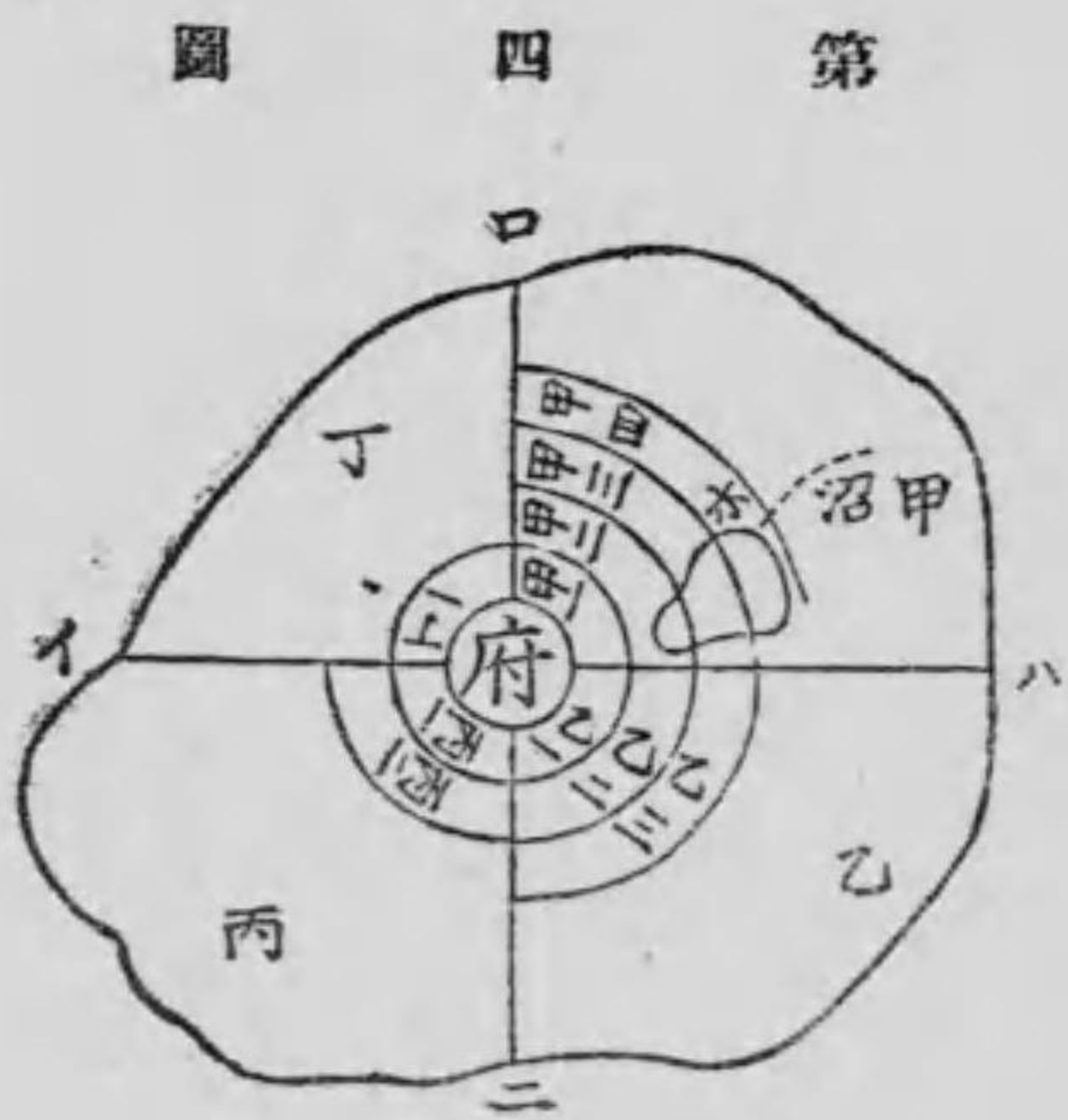
凡そ土地の生産力は地味の肥瘦に由りて厚薄あること勿論なりと雖も單に土地の養力のみを以て之が生産力の多少を斷す可からず、其給濟的地位即ち市場と交通する難易及資本勞力の景況等亦以て之を考察せざるを得ざるなり、元來生産力とは生産者が其生産者に利益を與ふるの力を謂ふ單に地味の膏腹なるのみを以て生産力多しとせんか、亞非利加洲若くは南亞米利加湖の中央の如き其草木の繁茂する、禽類、蟲蛇の多き其の最たるものと云はざるを得ず、耕作を以て之を例せば墨西哥の成る地方の如きは一家の主人僅かに一週二日の勞力を以て能く一家數口を養ふに足る、其生産力實に驚くべし、是れ他なし元來同地方は芭蕉實を消費すること多く、芭蕉の實は廣茅相均しき耕地に之を耕して麥に比して其收穫能く二十五倍の人口を養ふに足ればなり而して其耕作は之を麥に比して其難易固より同日の論に非ず只新芽を發する季節に幹根の四周の地を少しく軟柔ならしむれば則ち足る由是觀之其地方土壤の豊饒なる地球上恐くは其右に出づるものなかるべし、然れども今若し此等の土地に至り五穀



を耕し以て之を開明國の市場に需がんと欲せば當初資本、勞力を之に移すことの難きと收穫物搬出の不便なるに山り非常の高價を求めざるを得ず果して然らば勝を市場に制すること

能はずして忽ち敗を招き以て損失を來すや必せり、是れ地位の便不便は土地の生産力に大關係ありて地味膏腹の一事のみを以て其功を全くする能はざる所以なり斯の如きは固より極端の例を示すものにして稀有の場合なりと雖も、理に於て敢て妨げなく又一國一郡にても前陳の理は十分に其働きを示し得るものとす、請ふ今圖解を以て其然る所以を示さん。

上の圖に於て「イロハニ」の廓内を一國とし其中心に人民集團して一府を爲すものと假定し而して其土地を豊饒の度に因り甲、乙、丙、丁の四等に區別するとせん、然らば即ち第一に市民の耕すべき部分は甲等の土地にして府内市街に接したる「甲一」の部分たるべく、其人口漸



く増加するに隨ひ「甲一」の地を以て之が衣食を支ふること能はざるに至るときは「乙一」又は「甲二」の部分耕作すべし蓋し、乙等の土地は其豊饒の度に於ては固より甲等の土地に及ばずと雖も「乙一」は其府内市街に接するの故を以て「甲二」よりは運搬の便あれば「甲二」の豊饒なるも「乙二」に比しては土地の遠隔なるを以て其收利の力「乙一」に超ゆること能はざ故に「乙二」と「甲二」とは生産者の爲め同一の地位に立つものと謂ふべし、又人口更に増加して「甲一」及「甲二」若くは「乙一」の地を以て其衣食を支ふること能はざれば「甲三」「乙二」若くは「丙一」の地を耕すに至るべし、是れ「丙一」は前陳の理由に因り生産者の爲め「乙二」及「甲三」と其收利の方を均しくすればなり、而して人口更に一層の増加を告るに至りては「甲四」「乙三」「丙二」若くは「丁一」の地をも耕やさるを得ざるべし、之を要するに耕作の地積は一國人口の増加するに従ひ土地豊饒の度と其位置の便利とに因りて漸次に擴張するものとす、是に於て土地の生産力は只地味膏腹の一事を以て之を決すること能はざる所以を知るべきなり然れども土地の生産力を斷ずるには資本、勞力の景況亦以て考へざる可らざるものあり、請ふ其然る所以を説かん例へば前記の圖中甲等の土地中に「ホ」の如き一沼ありと假定せよ若し此沼を疏通し以て其地を水田と爲せば其膏腹なる蓋し此田地の右に出づるものなかるべく



開墾の順序に關し  
土地と資本  
の勞力と

且つ右の例に據れば此沼は又府内市街に遠からず之を水田と爲すに於ては非常の收益あるに相違なかるべし、然りと雖も元來沼澤を疏通して水田を開拓するが如きは多少の歲月巨額の資本、勞力、精巧なる藝術等を要する所の事業なれば其未だ資本、勞力の供給裕かならず且つ測量、治水等の術未だ十分に開けざるの時代に於ては開墾の如く目下の收穫なく未來の收利に期する所の事業を企圖するは頗る困難の事業なるを以て只其沼の周圍を耕すを以て満足せざるの己む事を得ざるの情なしとせず、是等の事情あるを察せず資本勞力未だ裕ならざるに己に是等の改良に着手するが如きことあれば却て目下衣食の急に迫り終に中途にして其事業を廢せざる可らざるに至らん又原野の灌漑、森林若くは山岳を隔てたる土地の開墾等總て巨額の資本、勞力を要するものは假令其地味は現在の耕地より數等膏腴なるも未だ以て直に之を耕すこと能はず、資本勞力の増加を俟て精巧なる藝術の補助を得、尙且つ運搬の便に依らざる可らず、由是觀之、資本勞力の景況、亦土地の生産力を斷するに重大なる關係を有する所以を知るに足るべし即ち土地の生産力は地味に肥瘠地位の便否資本、勞力の景況如何に由りて定まるものと謂ふべきなり。

### 第三目 收穫遞減の法則

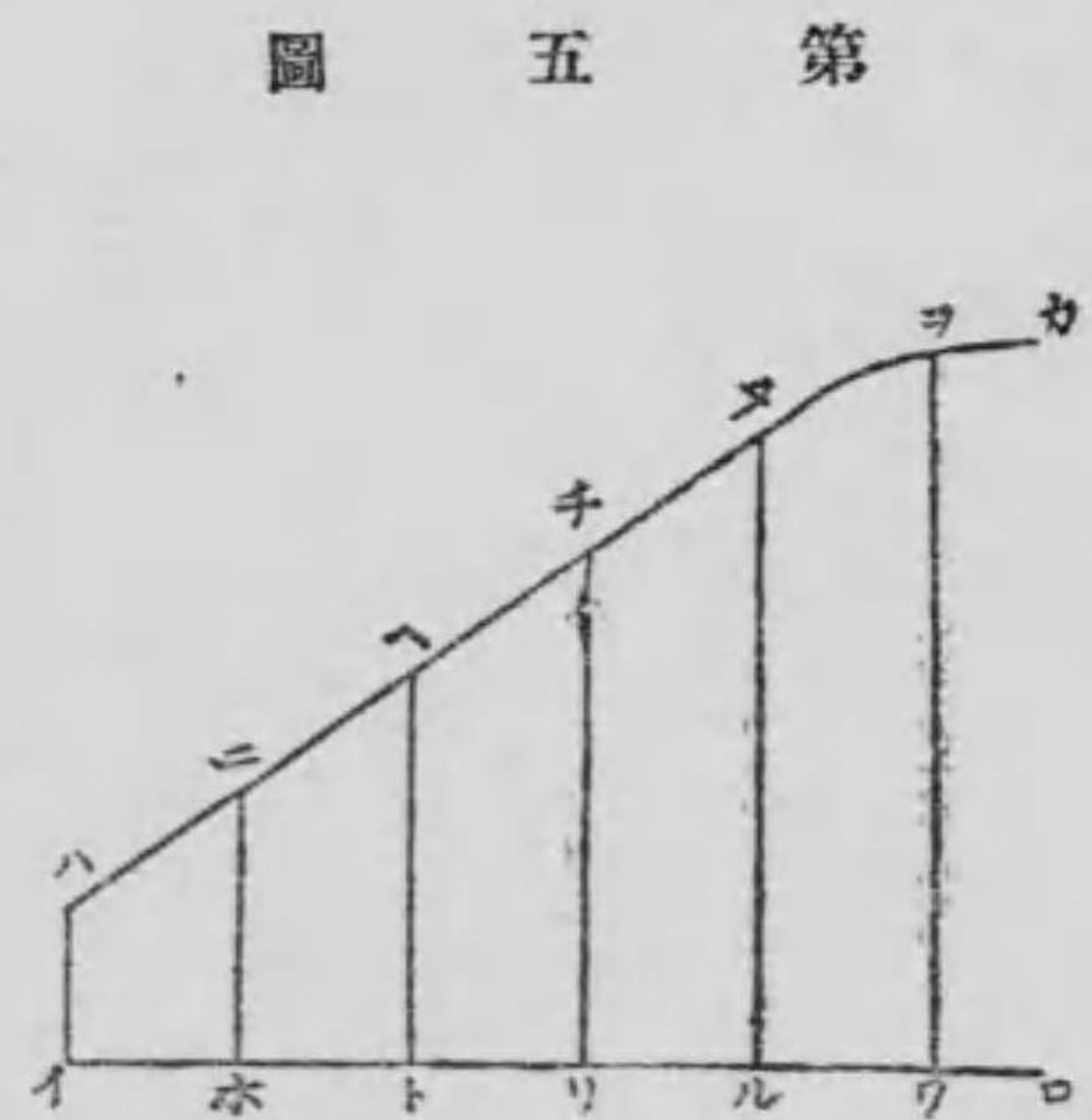
夫れ土地は能く草木を養ふの力ありと雖も之に人工を加ふるに非ざれば以て昔人の用に供するに足らず即ち之を耕し以て耘り、之に播種し以て培ふ等皆是れ人工に依らざるはなし之を稱して耕耘の業と云ふ而して之を爲すには農具、種子、肥料等の資本なかる可らず又勞力なかる可らず、以て之を土地に施し茲に資本勞力、土地の三者相待ちて耕耘の業甫めて成るものとす、然れども土地の生産力亦自から限度あり假令之に際限なく資本、勞力を加ふるとも決して其割合に之が收穫を増加すべきものに非ざるなり、例へば農夫の勤勉なる者は一人の力を以て年中斷えず一町歩の土地を耕し、之が作物を彼れ是れ轉換し、交互之を植換へ以て寸間も土地を遊ばせることなくして甫めて最大の收利を得るとせん、果して然らば一人に付き耕地一町歩を超過せば農夫の力足らざるべく、一町歩に足らざれば全力を盡すに由なし更に一例を設けて一國の人口尙ほ稀薄にして五町歩の土地に一人の農夫ありとせん、斯の如き時期に於ては人口其一を加ふる毎に農産物を増加すること一人の全力を盡し得る丈けに達すべく、換言すれば五町歩の土地に五人の耘夫を出すに至るまでは耕夫一人を加ふれば其れ丈け土地の生産力を増加し共同の力更に其増加歩合の大なるを得べきなり、然れども人口漸やく増加し一町歩に二人若くは二町歩に三人の耕夫あるに至れば勞力餘りありて土地足らず



一人の勞力にて耕し得べき地面を一人半又は二人にて耕さざるを得ず、夫れ一株の稻は之を二株にするを得ず二本の大根は之を同一塲所に植ゆること能はざるなり、只少しく好くし能ふは従前より深く土を掘り精密に土塊を碎き雜草を抜き害虫を除き、培養十分なるを得るよりして幾分か稻穂若くは大根を大ならしむることを得るに止まるべし、肥料の分量に於ても亦自から限度あり徒らに之を増加するも收穫を増すべきものに非ずして過量の抄肥は却て作物に害あり例へば三百基(一基は凡そ二斤半)の「ダワノ」を(「ダワノ」は海鳥の糞にして白露國の名産なり)用ゆれば三年の間に「エクタル」(「エクタル」は「凡そ一町に當る」に付き乾草の收穫二千四百六十九基を増加するを得べきを通例とす故に今六百基の「ダワノ」を用ゆれば收穫は右に倍したる増加を爲すべきかと言ふに決して然らず其肥料増加の割合に收穫を増加することを得ずして僅かに二千八百七十基の増加に止まる又鹽を肥料に用ふる場合に於ては「エクタル」四十基を極度とし若し其極度以上に及べば分量を増加する毎に收穫を減じ、分量愈々増加すれば收穫愈々減少し終に土地をして耕耘の價なきに至らしむ、是れ農學上の實驗に依るものにして本論の資とするに餘らあり。

由是觀之土地の生産力は自から限度ありて徒らに資本、勞力の多きを加ふるも正比例を以

て際限なく其生産力を増加し得べきものに非ざるなり、唯資本勞力の使用を増加し耕耘益々其精を加ふるときは幾分か其生産高を増加し得べきも苟も人口と土地との割合にして前記の比例に達せし以上は假令資本、勞力を倍すとも之を以て最早當初の如く其生産高を倍するに至るが如き増加を見ること能はず、之を名



けて收穫遞減の法則と云ふ蓋し學問上法則とは萬世を経て動す可らず事正に斯くあるべしと定むる所の者を指して謂ふなり而して之を遞減の法則と云ふ所以のものは前陳の如く資本、勞力の使用は之を増加し得るも其増加の割合に收穫の増加せざるに由るなり、請ふ今一圖を以て遞減の景況を示さん。

上の圖に於て「イロ」の線には人口を盛り「イ」より「ロ」の方へ一段一段に人口の數を増加するものとし「ハイ」「ニホ」等の線は生産高を示すものと假定す、今人口の割合五町歩に一人の耕



夫ある場合即ち「イ」の位に居るときは其生産高は之を「ハイ」とせば人口増進して五町歩に二人即ち「イホ」に達せしときは生産高「ニホ」と爲るべく、人口三人即ち「イト」に達せしときは生産高「ヘト」と成るべく人口四人即ち「イリ」に達せしときは生産高「ヲチ」と爲るべく人口五人即ち「イル」に達せしときは生産高「ヌル」と爲るべし、斯の如く人口漸次に増加して此點に達するまでは勞力者一人を増加する毎に各々其全力を盡して生産に従事することを得べしと雖も既に此點に達したる上、尙は多く勞力者を増加するとともに之に従事する勞力者は最早其全力を盡すこと能はざるに至り、生産の高は「ヲワ」の如く僅に増加するに過ぎず今「イハ」「ニホ」等の線の上端に一線を施せば「ハカ」の孤線を得べし、是れ生産の増進を示す所の線なりとす、此線の「ハ」より「ヌ」に至るまでは生産高勞力に比例して増進し勞力倍すれば生産高も亦倍加すべしと雖も「ヌ」より先きに進めば最早勞力者の増加と同一の割合にて生産高を増加するを得ずして只「ヌカ」の如く微々たる増加を實地に見るに止る耳、夫れ人は其父生んで而して師之を教ふ父養ふ能はず師教ゆる能はざる所の人口は國を損ふ察せずんばある可らざるなり。

## 第四目 收約的及粗放的耕作

土地の生産力に限度あること既論の如し是に於てか人口漸く増如し土地乏しきを告ぐるに方り第四圖に例せし「丙」「丁」等の如き劣等の土地と雖も之を耕耘に用ひざるを得ず、又「甲」「乙」の如き優等の土地を有する者と雖も人口の増加第五圖に掲げたる「イル」以上に達せば其上人口増加すと雖も新地の以て耕耘に供するものなく其所有地を餘さず四隅に至るまで悉皆町疇に之を耕さざるなり耕作の景況此の如くなるに至れば之を號して收約的耕作と言ふ即ち耕作の高度に達したるものなり、方今歐洲諸國(露國を除く)の農況既に此極點に達せり農工商の業を奨励せざるを得ざること亦宜なりと謂ふへし之に反して人口足らず土地餘りあるの時期即ち第五圖に於て示したるが如く人口尙は「イト」「イリ」に止まりて未だ「イル」に達せざる間は土地廣濶なるを以て劣等の地は之を耕すを要せず優等の土地と雖も各自所有の田畑を四隅に至るまで間隙なく耕作するの勞を厭ひ、唯其中央の最も耕し易き所を耕し餘力あれば更に新地を取り又其中央の最も耕し易き所を耕すを便とす、斯の如き農況を稱して粗放的と云ふ即ち耕作尙は寛度に止まる者にして米洲諸國の農況の如き即ち是なり斯の如きは一見粗漫なるが如しと雖も決して然るに非ず、唯人口土地の關係に由り經濟眞理の作用を實地に示すものにして固より其所とす。



## 第四目 大農及小農の便否

農産品は概ね食品及原料品に属するを以て大農的に其生産を爲すに便利あるが如しと雖も葡萄酒藍玉の如きは原料品の不良に由り非常に其價格に影響するものなれば葡萄蔓、藍草等の耕作の如きは最も注意を加へざるを得ず然るに之を非常の大仕掛に爲して手入、監督行届かざるが如きことあるときは品質精良なることを得ずして之が爲め却て耕作者の損失と爲ることあるべし故に此等の耕作には却て小仕掛を用ふるを可とす、其能く大農的仕掛を用ひて便利なることを得るものは雜穀、葛草等の如く粗大の物品の耕作是なり蓋し此等の耕作は特に精巧の勞力を要せずして大に機械力を使用することを得べく、且つ其監督者も馬上にて東西に駆け廻り以て一人にして廣く勞力者の監督を爲すことを得べければなり、之を要するに品質を第一として分量を次にするが如き耕産品の場合に於ては小耕的仕掛を使とし分量を第一とし品位を第二とするが如き耕産品は無論大仕掛を可とす故に耕作を爲すには宜く物品の種類性質に依り仕掛の大小を決すべし、然れども凡そ事業は之を大仕掛にて爲せば生産費を減少するものなれば彼の品質を以て第一とする物品と雖も資本案、勞力者と收益を分ち其同法の如き法を設けて兩者の利益を一にせば勞力者の粗漏寛慢よりして其生産物の品質を貶

するが如き弊を避くるを得べくして大仕掛に其業を營むを得べし蓋し共同とは後に詳説する所あるへしと雖も之を略陳すれば勞力者に當然の勞銀を與へたる上若し資本の利益にして例へば五分以上に昇れば其五分以上の分の幾分を割きて勞力者に與へて資本案、勞力者と營業の収益を分ち其利益を共にするの謂にして、生産の効驗を増加する上に於て多大の効驗あり。

## 第五節 生産三要件結合の必要

## 第一目 結合の實況

以上論ずる所を以て之を觀れば勞力、資本、土地の生産に要用なるや疑を容れず三者相待ちて鼎足の勢を爲し其内何れか一を缺くに於ては生産の業成り難し、其之を全うするは實に經國の要務なり、夫れ英國は世界の富國にして其資本に富むこと四界に冠絶す而して勞力も亦乏しからず、然るに之を人口に比して土地欲乏し食品を供するに足らず之を外國より輸入し以て其不足を補ふ就中麥の如きは其消費高過半を輸入に仰ぎ、細民の生計は之を北米合衆國其他の新國に比し稍々困難の狀なきを得ず元來英國の勞力者は合衆國の勞力者に比して勝



るものあるも劣ることなし、然るに尙且つ此狀を呈する所以のものは食品、廉ならざる之が一因たらずんばある可らず、北米合衆國は新開の國にして沃野千里唯人の之を拓くを俟つ、近年に至り資本漸やく増加し勞力は尙ほ古國の如く夥多ならずと雖も亦特に之が缺乏に苦まず西印度諸島の英國殖民地の如きは土地固よも餘あり而して資本は之を母國に仰ぎて其供給に苦まず、然れども曾て一時は勞力足らずして土地漸く荒蕪に歸せんとするの勢を呈せり、是れ蓋し諸島諸地に於て自然の人口乏しきが故を以て然るに非ず、全く西曆千八百三十三年英國政府が非常の英斷を以て奴隸制度を廢せしに依る。

元來彼の奴隸輩の如きは其愚昧なる殆ど獸類と伍を同くし生計の度甚だ低く僅に饑渴を凌ぐを以て足れりとす、而して西印度諸島の地たる固より天産に富み草根、木實以て彼等の口腹を満足せしむるもの甚だ多し、彼等一たび解放に遭ふて自由の身、爲りしより唯逸樂に耽りて勞を執るを好まず、假令高價の勞銀を以てするも能く彼等の勞力を誘ふに足らず既に奴隸たるに非ざる以上は鞭撻以て彼等に勞働を強ゆるを得ず、然るに西印度の氣候たる彼の亞弗利加人種なる黒奴は之に介意せずと雖も白哲人種の如きは固より熱帯地方の勞働に堪へず厚報を以て之を誘ふも尙且つ之を得るを難しとす、是に於て乎終に人口ありと雖も勞力の不

足を生ずるが如きの奇觀を呈せり、抑々奴隸の制度たる人類を以て牛馬視するものなれば其不道理なるは固より論を俟たず、早晚之を廢せざる可らざるは論なしと雖も其尙ほ土地廣濶食品餘りあるの時期に於ては奴隸は生産上の利器たる敢て疑を容れざるなり、故に其制度に寬嚴の差ありと雖も此時期に於ては世界中孰れの地に於ても奴隸制度の行はれざるもの殆ど稀なり而して人口漸やく増加し食品漸く貴きに至りて其制度自ら消滅するを通例とす、歐洲古代の歴史、北米合衆國北方の景況等此事の虚ならざるを示すに足れり、然れども彼等需用の低き一たび鞭撻を免るれば之を幸として勞働を厭ふこと彼の西印度黒奴の如くなるは又以て怪むに足らざるなり故に之を解放するにも自ら時期あり苟も教へずして漫然之を放つが如きは慈惠に似て即ち然らず恰も市に赤子を放すに異ならず却て之が爲め彼等の不幸を惹起し其極終に一國の經濟に影響せざるを得ざるなり、察せずんばある可らざるなり。

## 第二目 三要件勢力の差違

之を道理に質し之を實地に驗するに勞力、資本、土地の生産に要用なるは大略前陳の如し然れども開明の度に依り三者の勢力自ら差異なきを得ず、時正に草昧に屬し人類の生計主として天恵に頼らざるの時期に於ては土地の勢力最も大なりとす、此時に方りてや事業の循環



連絡せるものなく獸類に遇へば即ち之を搏ち魚類を見れば則ち之を捕ふる等、唯時々其遭遇するものに對して勞力を施すに止まり、資本の如きは稍々粗造の弓箭、棍棒等に過ぎずして當時人民の生計は一に天産即ち土地自然の産物に頼らざるを得ざるは勢の然らしむる所なり既にして耕作の業漸やく進み粗造の製造少しく其萌芽を發するに至りて勞力の勢力始めて盛なり蓋し當時に於ては其業既に其緒に就き耕田、播種收穫の事業循環連絡し來るを以て其勢力最早單に獲獸、捕魚の類に非ず、之を施すに自から時期あり、然れども製造の様に至りては固より未だ巧妙の器具機械あるに非ず、専ら勞力の分量とす手先の精巧とを要す故に勞力の貴き蓋し此時を以て最とす而して世運大に進歩し事業廣大なるに及びては或は成功を數年の後に期し或は賣買を萬里の外に試み或は商工上の雌雄を萬國と争ふ等遠大の事業大に増加すべし、是に於て巨妙なる器具、機械、堅牢なる船舶、貨車の必要を生じ、運輸通信の道を開く等巨額の資本を要す、此時に方りては實に人工を以て天工を奪ひ天恵の薄きも大に障害を爲す能はず精巧の勞力も機械の爲に壓せられて其能に殆り其優に利する能はず資本の勢力亦實に盛なりと謂ふべし而して四海の氣運今哉既に此第三期に入れり資本の勢力年に其盛大を致す亦宜なる哉。

### 第六節 生産に要する諸般の設備

生産の要項概ね斯の如し、抑々生産は經濟事項中自然に頼る者最も多しと雖も學術應用の廣大なる亦之に若くものなし故に各種専門的研究を要し運輸、通信の便、金融、保險、倉庫、生産組合等の施設亦之に伴はざる可らず、其所謂専門的研究にも上中下の三級を要す蓋し上級は事業の發達進歩の爲に必要にして發見發明を促すに便あり、中級は事業の管理監督に必要にして下級は即ち現行事業の効力を進むるに便あり、三者相依りて以て鼎足の勢を爲し苟くも長短あるを許さず、運輸通信の便は以て生産事業をして需給の状況を詳かにし吾人をして過不足の不遇を免れしむ、今哉通信の便は一片の飛電以て千里を致し米國の如きは、(輓近西曆千九百一年)鐵道事務大に發達し一噸一英哩の運賃僅かに一錢四厘八毛六の割合となれり、之を往昔物品其生産地を離るゝ百哩にして其價を加倍せしに比して其便利固より同年の論に非ざるなり又金融機關の如き農業信用又工業信用は商業信用と大に其趣を異にし後者は資金の運轉活潑にして固定することなしと雖も前者は長期の貸付を要し資本固着す而して其償還の如きも商業の如く之を一時に爲すを得ず、年賦償還の必要あり、是れ勸業銀行、



農工銀行、興業銀行等の設けありて其他村落信用組合等の必要ある所以なり、是等専門的機關の特色は自から専門の研究に屬し此所に敷言せずと雖も（拙著財政と金融坤第二編第二章第一章以下參看）要するに特質を有する者に對しては特別の設備を要し事物をして其處を得せしめ、事其目的に應じ其効驗を増すを必要とす其他保險倉庫等の設備生産上に必要なる多辯を要せず、夫れ民化して而して政に従ふ、前記諸般の設備は則ち民を化する所以の道なり努めずんばある可らず、方今四海各國競ふて此等施設の發達伸張を圖り汲々として怠らず營々として倦まざる所以のもの亦偶然に非ざるなり。

## 第四章 分配

### 第一節 分配の通路

前章に於て陳述せしが如く生産の目的は消費にあり、然りと雖も生産は漫然之を分賦するを得ざるは猶ほ水の分配に河川、溝渠を要するが如く必ず哉當然の通路なきを得ず而して之を分つに相當の機關なきを得ず、請ふ次を逐ふて之を論せん。

生産に資本、勞力、土地を要する所以は既に之を説明したり、凡そ是等の者は皆偶然に獲得せらるべきものに非ず故に之を使用せば必ず之に報ゆる所なくんばある可らず、其之に報ゆるは必ず天下の生産物に依らざるを得ず、然れども生産物、漫然Aの望に應じて之を分つこと能はず、其之を分つには各其道に依らざるを得ず則ち分配の通路は之を分けて左の三種とす。

#### 第一 營業所得

#### 第二 勞銀即ち勞働の報酬

#### 第三 貸付料

#### 第一節 分配の通路



是れなり苟くも生産物の分配を得んと欲せば必ずや是等通路に依らざるを得ず、今是等の通路を開かんと欲せば、或は自ら資本を投じ多少の労働を爲し以て一業を営み、或は人の爲に労働を爲し、或は所有の財産を他人に貸付けざるを得ず、請ふ少しく各種に就て其真相及特質を陳述せん。

## 第二節 營業所得

### 第一目 營業所得の釋義及其說明

營業所得は營業者の放下する資本と其労働及危険に報ゆる所の報酬なり蓋し營業者の労働とは營業の組織を按じ其損得を鑑み或は出納の計算を司り、勞力者を監督する等を曰ふ、其危険とは業の成否を未來に期し目下現に其嗜好に供し得べき所の資本を事業に放下するを曰ふ、抑々資本は過去の勞力と節儉との結果なり、之を放下するに何ぞ其報酬なきを得んや、其労働を爲し危険を冒すは固より其報酬あるを期す其之を期せずして労働を爲すは蓋し絶無僅有の場合と曰ふべきなり故に營業所得は資本の利子よりは勢其歩合多からざるを得ず、營業者が資本を放下し労働を爲し、危険を冒し以て得る所の報酬は即ち營業所得なり、然るに

天下の富は皆生産に成り、各種の所得は富の一部分を得るにあり故に營業者の所得は其源を生産に發す、然らば即ち營業所得は生産を分つの一通路たること論を俟たざるなり。

### 第二目 危険は世運の進歩に従ひ増加す

往古社會の組織未だ全からず農工商の事業未だ發達せざりし時に方りては生産は各自の消費を目的とし一步を進るも尙ほ工は廣く商の注文を受るに至らず商は店頭に顧客を待ちて廣く市場に出入せず所謂受身の事業を經營し、社會漸く發達し農工商百般の事業稍々其緒に就き分業行はれて各種の營業連絡するの時に至るも營業業尙ほ未だ廣く世界の市場に注目し其景況を察して生産に従事することなく通例は先づ需用の起るを俟ちて生産を爲す之を注文の時代に於ては資本を放下するに付きて冒さざる可らざる所の危険の度も自から亦今日の如く甚しからず、然りと雖も方今に於ては分業益々盛にして事業の種類愈々増加し、百業互に競ふて資本亦増加せしを以て徒に他の注文を待ちて時日を費すを常とせず、豫め市場の景況を觀測して大に資本を事業に投じ、其生産品を以て市場に雌雄を決するを常慣とし生産事業に従事する復た昔日の如く自己消費の爲に之を爲し、又は營業者先づ需用を待ちて其生産品を出す如きことあるは甚だ稀にして、通例は生産者先づ世上の需用を察して其生産を爲し

危険増加  
の順序

第二節 營業所得

第一目 營業所得の釋義及其說明  
第二目 危険は世運の進歩に従ひ増加す



生産に事従すること常に需用に先つを以て生産者の報酬を期すること亦昔日の如く確實なる能はず、隨て之を往日に比すれば危険の度も亦増加したりと謂ふべし、然りと雖も是れ世運進歩し、資本増加し、需用頻繁なるの致す所なれば決して嘆すべきに非ず却て大に賀すべきことなりとす、夫れ昔日の如く生産は専ら注文に依るものとせんか事業の循環連絡するは決して之を望むこと能はず其注文なき時は器械の運轉、勞力の使用を停止せざるを得ず果して然らば生産の費用大に増加して終に物價の騰貴を致すや必せり、今や即ち然らず生産者の業を營むや競争に基りし、市場の景況に依り一品を出せば更に他品の生産に従事し、事業前後相連絡して間斷あることなし、斯の如くして國富始めて發達することを得べく、物價始めて廉なることを得べし、然れども營業の景況斯の如きに至れば多少營業者の爲め危険の原素を増加するは又已むを得ざるの勢なり。

### 第三目 營業所得の歩合は世運の進歩に従ひ減少す

既に陳述せしが如く營業所得は營業者の使用する資本の報酬、營業者が其事業の管理監督の爲め要する所の勞力の報酬及其冒す所の危険の報酬より成立つものなれば右三者の中孰れが増減するときは其歩合も亦増減せざるを得ざるは最も略易きの理勢なりとす、然るに既論

の如く營業の危険は世の進歩に従ひ益々其度を加ふるを以て世運の進歩は一見營業所得の歩合を増加するものゝ如しと雖も是れ決して然らざるなり、抑々世運の進歩が營業上に危険の度を加ふる所以のものは方今の生産は主として市場の景況を卜し之が好機に投せんとし昔日の如く始めより需用者の確定したるものあること稀れなりとの謂ひにして敢て世に需用なく賣買を爲し得ざる物を生産すると謂ふに非ざるなり故に生産中は未だ確然たる需用者あらずと雖も其之に従事するときは已に市場の景況に依り最も需用多き物を最も多く生産し進行するを以て一たび之を生産して市場に出すに當りては苟も生産者にして商機の如何を見誤らざる以上は方今需用の頻繁なる、各種生産の關係互に深密なる決して其生産物は久しく賣捌く能はざるが如きことなかるべし、果して然らば彼の危険の度を増加すると云ふが如きも其大部分は理論に屬し事實に於ては外部より想像したるが如く甚しきものに非ざるなり、又營業者の勞働も事業の進歩するに従ひ大に増加すべしと雖も、一方より之を論ずれば營業の組織益々其精を加へ、智力亦大に進歩し昔日の難しとする所は今日復た之を難しとせざる等の事實あり又使用人即ち勞力者の如きも教育の進歩に由り昔日の如く鞭撻、若くは監督の嚴密なるを要せず、加ふるに彼の共同法の如き方法を施行せば大に監督の勞を減することを得べし



歩合と收  
得金高と  
の差

由是觀之同額の營業を爲すに今日の昔日より容易なる敢て疑を容れざるなり、然り而して今日の生産は己に市場に賣買を試みるが爲に之を爲すものなり、需用廣大百般の事業活潑の勢を呈するの今日に於ては資本の運轉又昔日の如く遲鈍なるものに非ず、其額亦決して昔日の比に非ざるなり凡そ資本は假令一運に所得の歩合少しとするも數運轉の所得を積めば以て勢大利を得るに至るべく且つ小額に重き歩合を得るより大に輕き歩合を得れば其所得より得る所の金高は却て敵に増加すべきなり故に所得の歩合即ち投資額に對する百分比は減少するも營業者の収入金額は之を減することなく、其所得額を増加すると同時に生産費に減少を來し物價を低廉ならしめ國民亦其生計の度を進むることを得べくして此減少は實に經濟上賀すべきものと言はざるを得ず、世人常に勞銀歩合の高きを憂とし營業所得歩合の高きを顧みず蓋し誤まれり。

## 第四目 營業所得歩合の多少を決する原因

世運の進歩に伴ひ營業所得の歩合減少することは既論の如しと雖も、何れの場合に於ても其輕重を決する原因なきを得ず、請ふ左に之を陳述せん。

## 第一 營業者が其營業上に有する學識、經驗及天稟の性質、才智

凡そ百般の業を營むや多少其事業上の學識と經驗とを備へざる可らず殊に百業者しく進歩して其經營の複雑なる今日に於ては學識、經驗の必要を増すや疑を容れず、茲に一紡績事業を營む者ありとせん、彼れ若し學識なくんば其器械の改良を計り、製造品の精巧を致すこと難く、營業一般の改良を按すること能はずして徒らに古法を墨守して敢て之に改良發明を加ふることなくんば事業の進歩得て期す可らざるなり、若し又彼に經驗なくんば實地の不便を看破し、事業上圓滑の働きを爲すこと能はず且つ世の嗜好の變動を察し、機に投し精巧の良品を以て市場を制すること能はざるべし、己に其人學識、經驗を兼ね備ふと雖も、其天稟の性質勉勵を好み熱心其業を執ることを快とし、且つ能く人の信用を博し、使役する所の勞力者は令せずして能く其分を盡し、機臨み變に應じ事業の緩急に處し、勞力使用の寬嚴等を計るの才智なくんば又決して營業所得其多きを致すことを得ざるべし故に危險難易の度を等くする同業中と雖も、營業者の學識、經驗、性質、才智等の如何に因り營業所得に著しき差違あるや多辯を要せざるなり。

## 第二 營業危險の多少

事業を營むには資本を放下し其報酬を、未來に期せざる可らざるを以て其間多少の危險



を冒さざるを得ず、其危険の度に因り所得の歩合を異にするは理の最も賭易きものと言ふべし、茲に甲乙の營業者あり甲は米穀、薪炭等の如く最も需用の廣き物品を取扱ひ、乙は美術品上等衣類の如き需用狭く且つ商況の浮沈に由り最も其需用に影響すべき物を取扱ふとせん、甲は商況の浮沈、世人嗜好の變更に由り變動を受くること軽く隨て其所得を變ずること少しと雖も乙に至りては即ち然らず右等の變動ある毎に大に其影響を受くべし故に甲の業に於ては所得の歩合低しと雖も敢て妨げなく乙の業に於ては高き報酬を得るに非ざれば以て事業を維持すること能はざるべし。

## 第三 永久及一時の事業

是れ亦賭易きの數なり例へば等しく宿屋事業たりと雖も東京馬喰町旅宿の如きは週年旅客の斷ゆることなく収入次を得て豫め之を期するに難からず、其投す處の資本に對して所得の歩合輕きも収入の總額は尙ほ業體相當の利益を收むるに足るべし、然れども温泉宿、避暑場の宿屋の如きに至りては季節に依り來客の數に甚しき増減あり、或は暑中兩三ヶ月間に週年の計を爲さざるを得ざる場合あり以て宿泊料の割合に高きを當然とす

## 第四 營業の合意嫌厭

凡そ事業を爲すに植木屋、彫刻師等の如く其營業者の意に適合するものあり又屠獸、肥料取扱等の如き頗る不快にして嫌厭すべきものあり、是等の業に於て假令甲乙の間其經營の難易、危険の度相同しきも甲の業に於ては報酬必ずしも多からずして尙ほ人能く之に従事すべく、乙の業に於ては所得割合に多からざれば之に従事する者なかるべし。

由是觀之營業上の學識經驗危険の多少等は營業の便否、適否、資本の多寡等を論せず、其所得の歩合を定むるの原因たること敢て疑を容れざるなり。

## 第五目 營業所得と他の所得との差違

營業所得は勞銀及貸付料の如く豫め其高を知ること能はず、之を知るは其業を了り精算を爲せし後にあり故に營業所得を以て生計を營む者は勞銀若くは貸付料に依る者の如く豫め其収入を計りて日常の費用を定むること能はず現に所有する處の者を以て平生の生計を營まざるを得ざるなり即ち勞力者の地位より之を見るに勞銀減少し又は解僱に遭ふことなきを保せざれば未來に得る處の勞銀を頼みて喰込を爲さざる様平生其費用を慎むべきは勿論なりと雖も其就役中は次回の支拂日（歐米各國にては勞力者は毎土曜日に給料を受取るを通例とす）に至れば若干の金員を得べしとは豫め之を期することを得べし故に前以て之を見當として信



用買を爲すも平時に於ては強て差支なかるべし又貸付料を以て生計を營む者は苟も非常の事あるに非ざれば先づ期限には豫期の金額を得るに相違なかるべし、然れども營業者に至りては決して右等の如き前以て其収入高を豫期すること能はゆるなり、果して然らば營業者は勞力者其他の者より一層生計の費用を平生に慎みて苟も將來の収入を見込み徒に現在の所有者を多く消費するが如きことを爲す可からず、而して其収入を獲得するも一時に之を消費せずして之を次回の収入を得るまでの費用に充てざるを得ず若し夫れ然らざれば其資本を喰込み營業減縮の禍に遭遇することなきを保せず、豈に慎まざる可んや。

### 第三節 勞 銀

#### 第一目 勞銀の釋義及勞銀基金

勞銀とは一日の勞働時間を若干(例へば十時間)と定め之を單位とし一ヶ月或は一週間に積算し或は毎日之を與へ又は勞働の分量若干に付き若干と金額若くは物品の量を定めて勞力者に與ふる所の報酬を云ふ。

斯の如く勞銀は勞力者が其勞働に對して得る所の報酬なり、然るに此報酬は一國現在の富

勞銀の釋義

勞銀基金

の中より之を支出し、富は生産より生ずるを以て勞銀は生産を分配するの一通路なるや明なり而して生産より報酬を得る者は獨り勞力者に止まらず、既論の如く營業者も其報酬を得る處は生産に在り、資本家の報酬も亦生産に依らざるを得ず、故に勞力者の得る處のものと他兩者の得る處のものは共に一國生産の一部分たらざるを得ず而して第三章第三節第二目に於て論じたる資本の區分に依れば流動資本の一部なる「ホ」は即ち勞力者の得る處の者にして之を勞銀基金とす。

#### 第二目 勞銀平均増減の原因

勞銀基金は既論の如く一國資本の總高と固定資本、原料品の高とに相應する處の割合を保たざるを得ず而して其如何に勞力者に分配せらるゝやに至りては勞力者の數と照應せざるを得ざるなり若し夫れ基金の高に變動なくして勞力者の數を増さんか勞銀の平均は必ず減すべく之に反し基金に増減なく勞力者の數を減せんか、勞銀の平均増加すべし又勞力者の數を變せずして基金の高を増さんか、勞銀の平均は増加すべく之に反して基金の高を減せんか勞銀の平均減少すべく而して勞力者の數と基金の高と比例を以て増減せば勞銀の平均變動することなかるべし故に勞銀の平均を増加せんと欲せば基金の高を増加するか、勞力者の數を



世界の富  
の増加

減するか何れか其一に出でざるを得ず、然りと雖も勞力者の數を減ずるは國家の慶事に非ず、基金を増加するも亦容易の業に非ざるなり（英國の統計家マルホール氏の調査に依れば、最近世界の富、増加は年々凡そ二十四億五千萬弗にして八億二千五百萬弗は北米合衆國、三億七千五百萬弗は佛國、三億二千五百萬弗は英國、二億萬弗は獨逸國、其他七億七千五百萬弗は他の諸國、増加なりといふ）況や國家の進運は原料品の價格を増すと同時に固有資本の爲め割合に多額を要するの勢ありて勞銀基金は多少増加するに相違なきも、資本の他の部分と同一の割合を以て増加することを得ざるに於てをや、勞銀基金の増加決して容易なりと謂ふを得ず、今事の解し易からんが爲め請ふ一方式を以て勞力者の數、基金の高及勞銀の平均が互に相關係する景況を示さん。

次の方式に於て「ホ」を勞銀基金とし「ヘ」を勞力者の數とすれば「ヘ」を以て「ホ」を除し得たる「ト」は即ち勞力者の得る處の勞銀の平均高なり、然れば即ち「ト」の多少は「ホ」「ヘ」の大小に由ること明なり故に若し「ホ」に變動なくして「ヘ」を増せば、増加したるものを以て同額のものを除することとなり「ト」は必ず減少す之に反して「ヘ」を減少すれば減少したるものを以て同額のものを除するを以て「ト」は必ず増加す、若し又「ヘ」に變動なくして「ホ」を増減す

れば必ず「ト」を増減す、然れども「ホ」「ヘ」共に同一の割合を以て増減せば「ト」には變動を生ずることなし、事分明四達通せざる所あるなし誰か能く之を誣いん

$$\begin{matrix} & & \text{ト} \\ & = & \\ & & \text{ホヘ} \end{matrix}$$

平均勞銀の増減する原因斯の如し故に勞銀の歩合を増加せんと欲せば須らく勞銀基金の増加若くは勞力者の減少を計らざる可からず、之を外にして如何なる嚴法奇策を用ゆるも勞銀歩合の増加は數の許さざる所なり消息數あり盈虚争ひ難し、然るに世之を解せず或は最低勞銀、勞働時間制限法等を主張し又漫に同盟罷工を企て資本家に迫りて勞銀の増加を強請し若くは之が當然の減少を拒むが如き暗愚拙劣の手段に出る者なしとせず、是等の方法は他に自然の勢力能く之を助けるものあるに非ざれば假令一時其目的を達することあるも固より數理の許さざる所にして永久の効力なく却て生産自然の分配を妨げ資本の増殖を障害し、勞銀基金の増加を妨ぐ勞銀歩合の平均を減少すべし瞑目停觀須らく之を心に觀るべきなり若し夫れ人あり勞銀歩合増加の方法を説くあらば先づ其方法は果して勞銀基金を増加するに足るや不



當なる人口増加の傾向を減するの効力あるやを詳かにし然る後其有効無効を斷すべし、萬般の其說争ふて實の如きも苟も其說をして是等効驗の一を生ずるに足らざらしめば畢竟是れ空を敲きて響を作し木を撃て聲なきの類のみ決して奏功を期する能はず、夫れ誠は天の道なり之を誠にするは人の道なり察せずんばある可らず。

## 第三目 各個勞力者の勞銀の多少を決する原因

勞銀の多少を決する所の原因は全局より論すれば勞銀基金と勞力者人口の關係如何とにあるは既論の如しと雖も其局部場合に付き勞銀の多少を決する所の原因自から在りて存す、請ふ之を説かん。

## 第一 勞力の難易

勞力の難易は其分量と時間とを以て之を算す即ち同一の勞力と雖も勞働の度を重ね時間の數を増せば必ず之に多くの報酬を與へざる可からざるは皆人の知る所なり、是れ實に單純の事實なりと雖も理に於ては未だ此の如く簡單ならざるものあり、抑々人類には日用缺くべからざるの需用あり、此需用を充さんが爲には必ず多少の勞苦を忍ばざる可らず故に意を決して勞働を爲すときは其初め勞苦を感せず却て勞働の爲め快を覺ゆることあるべきも其時間に長きを加ふるに従ひ體疲れ神倦み非常の厚報を

得るに非ざれば耐忍の念慮を生せしむるに足らず、然れども勞働の度劇からず、時間の數多からざれば身體の疲勞心神の倦厭なきを以て敢て厚報を要せざるべし、只當初に於て未だ決せざるの意を決せしめ未だ起きざるの身體を起さしむるを以て足れりとす、此事に就きては英人シエボオンス氏曾て一圖解を製せり、請ふ今事の解し易からしめんが爲め左に之を掲出せん。

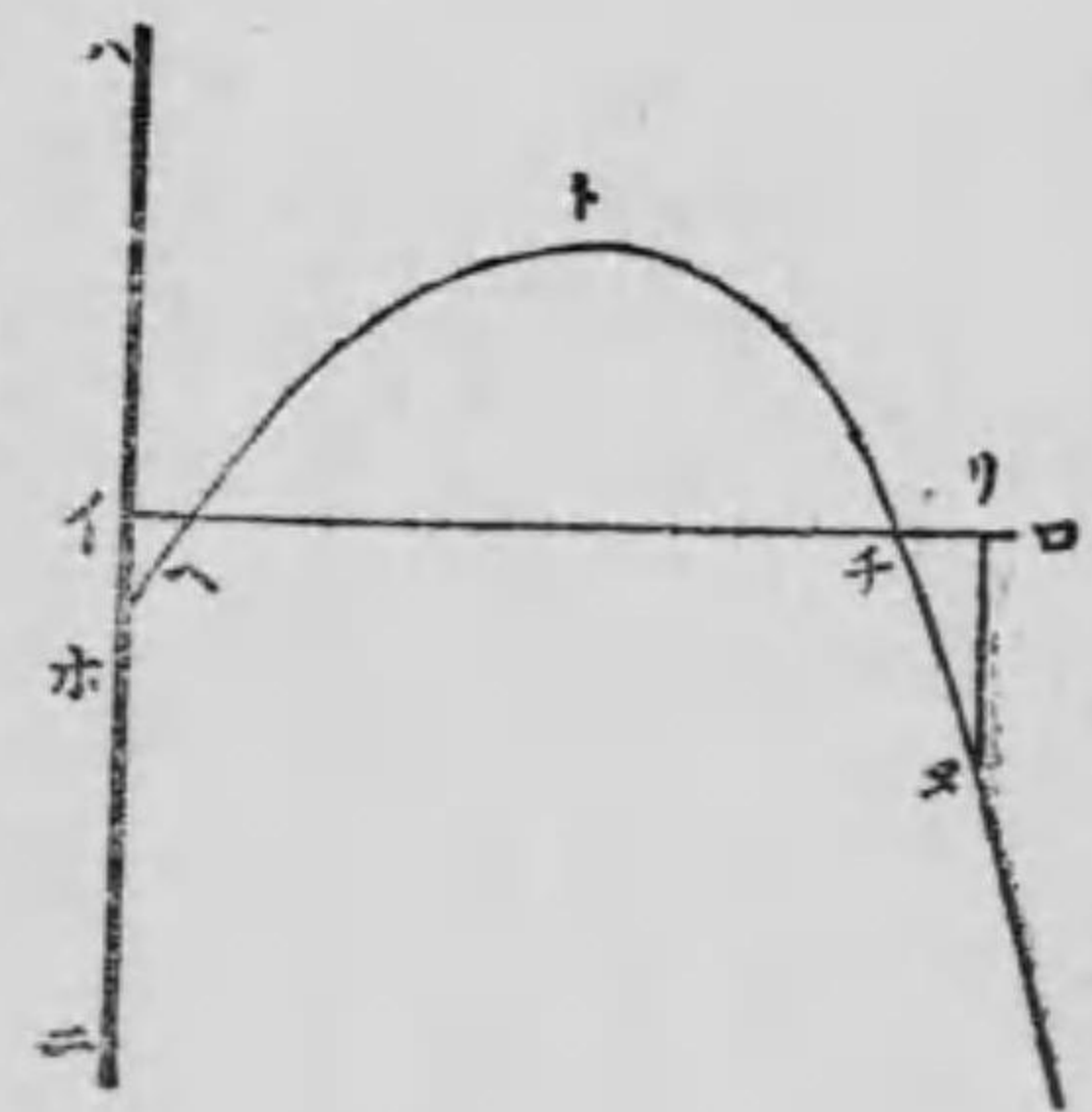
次の圖に於て「イロ」の線は勞力の報酬と其長短とを量るものにして「イ」より「ロ」に向ひて進み「イヘ」を十錢とし「イチ」を五十錢とせん「イハ」の線は快樂の度を量り其度「イ」より「ハ」に向て進み「イニ」の線は勞苦の度を量り其度「イ」より「ニ」に下向きに進むとし「イ」の點は苦もなく樂もなきとせん、然るときは苦界より樂界樂界より苦界へ入るに「イロ」の線を経過するときは苦もなく樂もなきものなり故に今勞力を爲すもの「ホ」より「ヘ」に至るまでは心體共に未だ勞働に傾向せず少しく之を厭ふの氣味なきに非ずと雖も之を忍ばざれば「イヘ」の勞銀を得ること能はず之を得ざれば忽ち饑渴に迫るを以て力めて「ホイ」の勞苦を忍ぶべし、然れども己に勞働を始めて半時間若くは一時間を経過せば心體之に染み敢て勞働を苦とせず、「ト」に達するまでは樂を増し其より「チ」に至るまで



勞力停止

は絶えず之を減ず而して「チ」に至れば已に平日の勞銀を得、復た他に求むる所なかるべし、然るに尙ほ更に進みて勞力に従事すれば即ち勞苦の界に入らざるを得ず故に進みて勞苦を忍び纔に勞銀を増加せんよりは寧ろ之を止めて逸樂を求むべし之を勞力停止の點

第六圖



と爲す、彼れ若し非常の勉強家なれば、「リュ」の増苦を忍び「チリ」の増報を得べしと雖も、之を超過せば勞報相償はず必ず他に非常の報酬を得ざれば勞働に従事せざるべし、其他勞力の性質に由りて自ら難易の別あり、其度の強弱に依り報酬に厚薄あるべきは固より論を俟たざるなり。

第二 危險の多少 危險の性質に依り勞力者の健康、身體に危險なるものあり即ち傳染病者の取扱、其排泄物の運搬（是等は次に論ずる嫌厭の元素も甚だ多し）劇藥の調劑等は皆健康に害ありて身體に危險の虞あり又岩上の石切り、鑛山の坑夫等は他業に比して頗

る危險を冒すものなり、之に反して農夫、植木屋人足等の如きは殆ど身體の危險あることなし故に是等の間に於て勞力に差違あるは疑ふ可らざる事實なりとす

第三 勞力の合意、嫌厭 勞力の性質に依り健康に害なく、危險の虞なく勞力者の意に適ふものあり、花園の手入れ、小細工物の製造の如き即ち是なり之に反して屠獸、死體取扱等の如きは人情の望まざるものなれば勞力の割合には厚報を要す。

第四 永久の勞力、一時の勞力 永久に繼續する事業の定備なれば絶えず勞銀を受くるの望あるを以て勞銀は少しく低廉なるものに満足すべしと雖も一時の事業の爲に備入る、勞力者は同様の勞力を爲さしむるにも勞銀の割合少しく高からざるを得ず例へば避暑場等にて一時備入る、所の給仕人の如きは市街の旅店にて備入る、者より其勞銀高きを通例とす、然れども永久の勞力少うして一時の勞力多きは穩健なる經濟情態と云ふを得ず何となれば斯の如きは民に恒産ある者少うして而して職に安すること難きを示せばなり然るに輓近獨逸に於て一時の勞力頻りに増加し西曆千九百年には其比例總勞力に對し五割八分に止まりしに同千九百二年の恐慌以來、其數大に増加し總數の六割一分 なり同千九百九年には更に増加して七割八分を占め一人にして年に二十回三十回勞働市場の斡旋

第三節 勞銀 第三目 各個勞力者の勞銀の多少を決定する原因



を受ける者稀れなりとせず甚しきに至りては六十回に及べる者あるに至れり獨逸労働界亦安穩なりと云ふを得ざるなり。

第五 勞力者天稟の性質 是は頗る勞銀に關係するものなり、仕事の性質に由り勞力者の鋭敏、緻密其他之に類する性質を要するものあり、是等は其性質の爲に異常の厚報を受くることを得べし。

第六 信任の多少 金錢の出納財産の管理等の如く特に當事者に信任を置かざる可らざるものあり、此等には其信任の多少に由り報酬の多少あるべし即ち銀行、保險會社等の役員、財産の管理人等は其勞力の割合には報酬厚きものとす。

勞力者各個の勞銀歩合を決する原因は大略斯の如し、勞力者の輩は宜く此理を察し、甲種の勞力者は之を乙種に比して割合に勞銀厚し是れ不公平なりと云ふが如き無法を唱へて同盟罷工等不心得の事を爲す可らず、勞銀歩合を決するには其全局に於ても亦局部に於ても自ら動かす可らざるの理由存す、此理を究めず妄に其増減多少を論ずるは是れ無法の説なり、凡そ世を害し民を賊ふは無法より甚しきはなし、勞銀増減の理は深く之を講究せざる可らざるなり。

#### 第四目 勞銀の高きは必ずしも營業者の不利に非ず

營業所得と勞銀とは共に生産分配の通路にして勞銀高ければ一見營業所得を減ずるの状あり又勞銀は事實に於て勞力者が生産を了せざるに先ち營業者が資本を以て一時繰替ゆるものたるが故に勞銀を以て直ちに生産の費用と看做し其高きは營業の發達を障害し營業所得を減ずるものなりと思ふ者多しと雖も、是れ決して然らず、元來勞銀の高低は既に或事の結果にして漫然定まるものに非ず必ず之を定むる所の原因なる可らざるなり若し其原因をして疾病、饑饉、戰爭等にあらしめば甚だ患ふべしと雖も其歩合の高きは營業所得の多きと同一の原因より生ずる處の結果なるときは却て大に喜ぶべきものなりとす、元來勞銀の増加を致す所以のものは彼の勞銀基金の増加にあり、此基金に多きを加へんと欲せば各種の營業利益多くして此基金へ配當する處の基本總額を増加し得べき結果を生ぜざるを得ず、果して然らば勞銀の増加と營業所得の多きとは同一原因の結果なりと云ふべし而して營業に利あるは之に使用する資本、勞力の効驗多きに依る故に勞銀の高きは即ち勞銀の効驗多きに依るものにして營業者の不利と云ふ可らず、是れ只理論の以て然りとするのみならず古今の實例以て能く此事の虚ならざるを示す、請ふ少しく之を辯せん。



曾て西暦千八百五十年に前後しキャリフォルニア州及濠洲に金坑を發見するや勞銀俄に増加し其盛時に於ては普通の勞力者にして尙且つ一日五弗の勞銀を得るに至れり而して營業者の利益を得たるや又此時を以て最とす然るに金坑の産出漸く減じ營業者の利益減するに隨ひ勞銀も亦漸次に減少せり又北米合衆國の西方は沃野千里の地其麥作に適する天下無雙と稱す故に農夫の勞銀の高き實に世界に冠たり是れ其從事する所の事業大に天利を有し勞力の効驗大なるに由るにあらずして何ぞや、由是觀之勞銀の高きは營業所得の多きと其原因を同くし互に親子の關係を爲さずして兄弟姉妹の關係を爲すものなれば其高きは必ずしも營業者の不利に非ずして却て大に喜ぶべきものなしとせず而して其低きは營業者の利益に非ずして其所得の減少に由り己むを得ざるに出づるもの多し鑑みずんばある可らざるなり。

又勞銀に名義上の勞銀と事實上の勞銀との分あり前者は貨幣を以て計るものにして後者は其購買力を以て計るものなり、今英國に於ける西暦千八百五十年以來の兩者の變動を見るに左の如し。

西 曆 年	名義上の勞銀	小賣相場	生計費	事實上の勞銀
一八五〇.....	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

一八五〇—一八五四	一〇三	一〇四	一〇四	一〇一
一八五五—一八五九	一一三	一一七	一一五	九八
一八六〇—一八六四	一一七	一一〇	一〇九	一〇七
一八六五—一八六九	一三〇	一一五	一一四	一一四
一八七〇—一八七四	一四五	一一七	一一六	一二五
一八七五—一八七九	一五〇	一一〇	一一一	一三五
一八八〇—一八八四	一四七	一〇四	一〇七	一三七
一八八五—一八八九	一五一	九一	九七	一五五
一八九〇—一八九四	一六二	九〇	九九	一六六
一八九五—一九〇〇	一六五	八五	九四	一七六
一九〇〇—一九〇二	一七八	九〇	九八	一八一

第五目 人口の増減と勞銀との關係

人口の増減は前目所論の如く勞銀歩合を増減するの一原因たるや疑を容れず而して其増減は勞銀歩合に二重の効力を驗はすものとす、即ち其原因の如何に拘はらず勞銀基金其他一切生産上の事項に變動を來さざるに人口減少せば勞銀の平均高に多少の増加を來し同時に衣食住に供する物品は従前と同量なるに之を少數の人数に分配するを以て幾分か其代價を減すべ



し果して然らば勞力者は増加したる勞銀を以て低價の物品を購買することを得べく其利益鮮少に非ざるべし而して其人口の減少が新地移住の爲に起りしものとすれば其利益は殊に大なり、元來移住は天下の壯丁を失ひ一見不利の觀なきに非ずと雖も其原因舊地に溢るゝ所の人口を新地に移すものなるときは舊地に於ては之が爲に生産を妨げず、新地の生産は之が爲に發達し、其生産物を舊地に致し食品若くは原料品の價を低下し其製造品の需用を増加し以て商工事業の發達を助くること少しとせず（國內の移住即ち我が内地人民が北海道、樺太、臺灣に移るが如きは最も然り）然りと雖も生産上の要件に變動なく勞銀基金の増加せざるに人口増加するときは全く之と反對の効驗を生じ勞銀の平均高は多少減少せざるを得ず而して衣食住に供する所の物品は其供給多きを加へざるに多數の人員に之を配賦せざるを得ずして其價格を騰貴するは數の免れざる所なり、然らば則ち勞働社會は其減少したる勞銀を以て騰貴したる物品を購買せざるを得ざるの悲境に陥るは自然の趨勢なり、事茲に至れば其生計の難き固より論を俟たず思ふて茲に至れば轉た寒心に堪へざるものあり。

## 第六目 勞銀歩合増加の利益を維持する能力の強弱

既論の如く資本の増加、人口の減少は勞報歩合の平均を増加し勞力者の生計を進むるの効

力あるや多辨を要せず加之生産物價格の減少は假令直接に勞銀基金の増加を生ずと雖も勞銀歩合の増加と其効驗を均くす、何となれば物價の減少は勞力者をして同額の銀を以て多量、若くは良質の物品を獲得せしむることを得ればなり、然るに勞力者は概ね智力に乏しく此等の利益を維持すること能はざるの嘆あり戒めずんばある可らず、彼等の無謀なる人口の減少資本の増加、物價低廉等の爲め聊か其生計を易うするの實あれば、其永久の原因又は一時の原因より出づるに拘はらず（永久の原因とは國富増加し爲に其資本の増加を來し又は農工業の進歩し生産の費用を減じ爲に農産工業の價格の減少する等を謂ひ、一時の原因とは豊年若くは一時嗜好の變更保護政策等に依り其從事する所の事業の生産物の價格一時大に増加する所を謂ふ）忽ち人口を増加し又は不當の消費を増加し忽ちにして一時得る處の利益を失ふを通例とす、實に食品價格の減少又は其供給の増加は以て勞力社會の婚姻の數を増加し隨て人口の増加を促すに至るは古今各國の經驗する處なり、請ふ之を證せん。

塊地利に於て西曆千八百五十一年には大麥一「メッツ」(「メッツ」は凡そ三斗)の價二「フ  
ローリン」と百分の四十七にして婚姻の數三十三萬六千八百、同千八百五十二年には大麥一  
「メッツ」の價二「フローリン」一、婚姻の數三十三萬六千八百(此年に於て大麥の價格減少



せしも婚姻の數少しく減少せしは前年に其數多かりしに依る。同千八百五十三年には大麥「メッツ」の價三「フロリン」三八婚姻の數二十八萬三千四百同千八百五十四年は大麥「メッツ」の價四「フロリン」三六、婚姻の數二十五萬八千、同千八百五十五年は大麥「メッツ」の價四「フロリン」四三、婚姻の數二十四萬五千四百なりしと云ふ、是等婚姻の數は全國一般に涉り敢て勞力者婚姻の數に限るものに非ず。雖も、富民は平日の貯蓄を有するを以て其婚姻の數は年の豊凶に依り著しき増減を現はさざるべし、唯其食品價格に依り顯著なる増減を示すは勞力者の結婚に係るものたる疑を容れざるなり。

又愛蘭に於ては馬鈴薯の耕作の如何に依り食品の供給を増減し西曆千六百五十四年の人口百三萬四千人なりしが爾後馬鈴薯の耕作漸次に増加し同千六百九十五年には二百三十七萬二千人となり、同千八百五十五年には五百三十九萬五千人、同千八百二十三年には六百八十萬千八百二十七人、同千八百四十一年には八百七十七萬五千人となれり、是れ實に著しき増加と謂ふべし、然れども西曆千八百五十一年には馬鈴薯凶作の爲に人口減少して六百五十一萬五千人となれり、兩後の實況を以て之を見るも大同小異にして即ち西曆千八百九十九年には英倫に於ける小麥「クウォートル」の價格二十五志八片にして婚姻の數は千人に付き十五人六分なり

しに同千九百五年には麥價二十九志八片に上りしに其數遽かに減じ千人に付十四人六分となり及同年と最近西曆千九百九年を比較するに前者 於ては婚姻總數二萬三千七十八件なりしに後者に於ては麥價三十六志十一片にして婚姻總數二萬二千六百五十件に減少せり、食品價格の社會情態に關する斯の如し鑑みずんばある可らざるなり。

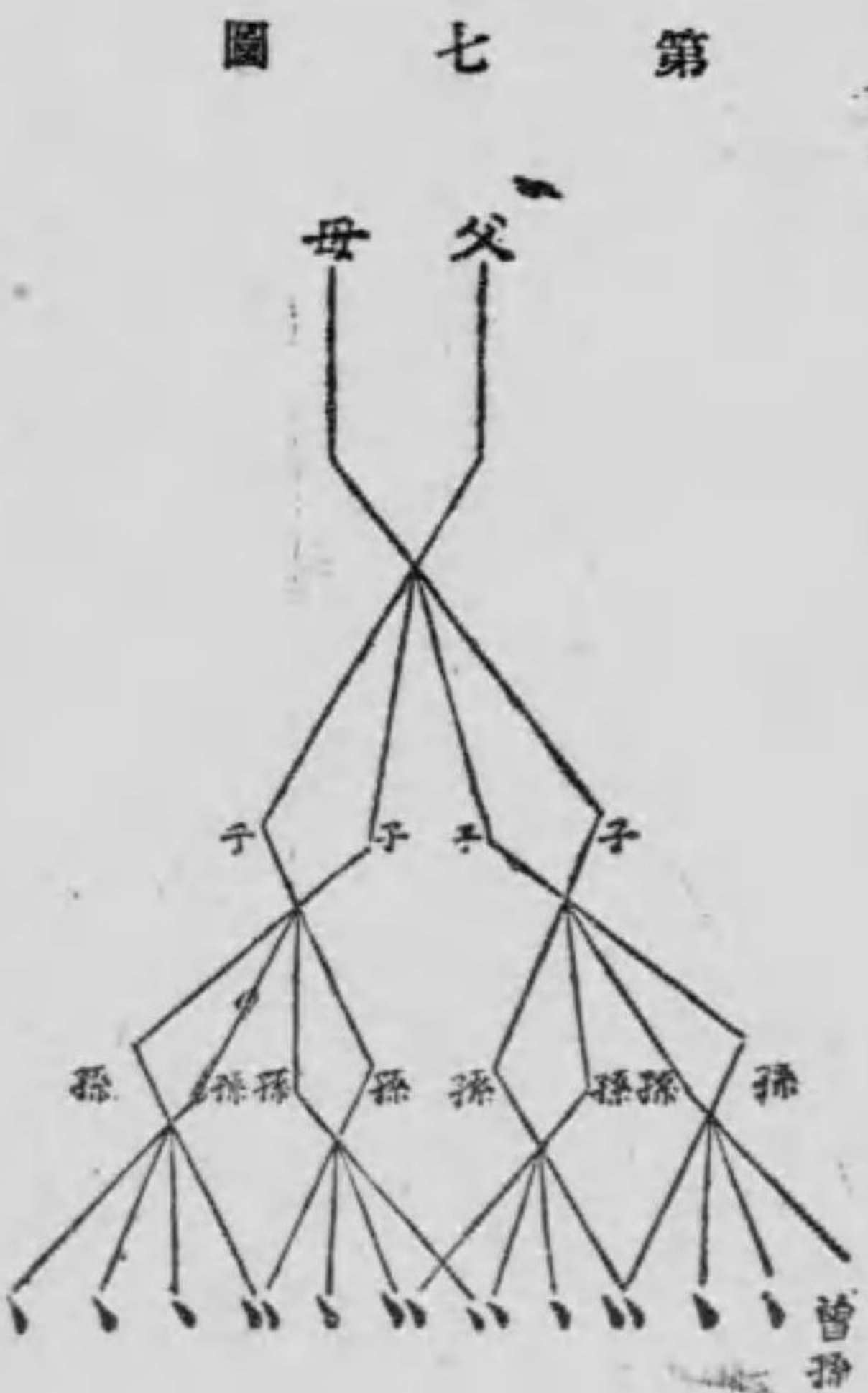
人口の増加をして永久の原因より來るものならしめば増加の後と雖も人々尙ほ或は從前の生計を保つことを得べきも一時の原因より來りたるものは即ち然らず何となれば其原因漸やく消滅し生産從前の高に減するに至れば其已に増加したる人口は衣食足らず以て非常の困難を來す可ればなり、豈に慎まざる可んや。

第七目 人口の増加は勞銀の平均歩合 減するの傾向あり

人口は勞銀の源泉にして勞力なくんば生産を發達すること能はざるは論を俟たず故に人口をして其適度即ち生産遞減の點迄に達せしむるは固より國家の富強を致す所以の道なりと雖も其一たび此點に達せし後漫に之を増加するは國家の利益に非らざるなり何となれば需用品生産の増加は之を比例する能はず、各人の消費を節して以て全體の人口を養はざるを得ざるの必要を來すればなり故に生産遞減點を超過する所の人口の増加は生産分配の事業更に發



達し能く之を支持し得るの後に非ずんば國家經濟の爲め安全なる能はざるなり、然るに彼れ  
勞力者の輩は敢て深謀深慮あるに非ず、動もすれば一時の好況の爲め未だ子孫を養育するの  
餘力あらざるに既に人口を増加し勞銀の歩合を減少するに至るの通弊あり、元來人口の増加



加す人口増加の度亦盛んなりと謂つべし、今西人の調査に依れば百年の後は英語使用の人民  
は九億に達し、露は方今一億七千萬人なるが同期間に三億を超過すべし獨の人口増加率は方

は俗に所謂鼠の子算に  
類するものにして例は  
一男一女四子を擧げ、  
此四子八子を生じ、八  
子十六子を生ずとせば  
二人の男女より其曾孫  
の世に至れば已に壯年  
十六人を増し代を重ね  
る毎に其増進の度を増

今少しく減少せしと雖一時は一步五厘高度を保てり若し同率を保つに於ては百年後に於ては  
其數二億に達すべし今事の解し易からんが爲に一圖解を以て其繁殖の景況を示せば第七圖の  
如し。

然るに食品の増加は國土の開發生産遞減の點に達したる後は人口一人を加ふる毎に其需用  
高丈けを増加すること能はず、只僅々の増加を見るに止まる、果して然らば人口増加するに  
從ひて食品の價格益々騰貴すべし假令資本の増加は人口に伴ふことありとするも其増加は資  
金の輸出、原料品騰貴等の爲め舉て之を勞銀基金の増殖に投ずるを得ずして食品騰貴の費用  
を償ふに足らず爲に勞働社會の困難を増加せざるを得ざるなり。

### 第八目 人口の抑制

人口の増加或程度に達するまでは生産増加の爲め大に利益あるは既論の如しと雖も無限の  
増加は曾に國家の利益に非ざるのみならず、營養の力能く之に堪ゆる所に非ざるなり、是に  
於て乎人口の増加が國土に比例し或程度に達するときは必ず其増加を抑制する所の自然的  
及人爲的原因、條件若くは事情を生ず而して其抑制に四種あり。

#### 第一 自然の抑制

第三節 勞銀 第七目 勞銀人口の増加はの平均歩合を減するの傾向あり



第二 人爲の抑制

第三 不期の抑制

第四 遠慮の抑制

是なり、謂ふ少しく之を辯せん。

地球上温帯の地方に於ては男子生れて十四歳女子生れて十三歳に至れば生理上既に父母たるの能力を備ふるを通例とす、故に若し人口の増加を自然に放擲して毫も抑制する所なくんば第七圖に示したるが如く二人の男女十六人の曾孫を見るは決して例外の事に非ざるべし、然りと雖も人口を支ふるには衣食住の供給なきを得ず、其供給を増加せんと欲せば土地の以て之に應ずるものなかる可らず、然るに土地の供給固より限りあり故に生産の増加は人口の増加と其度を均くすること能はず人口増加して若干の點に達したるときは衣食給せず偶々子孫の生ずるあるも體格孱弱從て夭折の數を増し、人口は前記の率を以て増加すること能はざるに至るべし之れを自然の抑制とす、現に獨逸の如きは往年前記の増率を示せしも輓近保護政策其他の爲め物價大に騰貴し、生計の困難年に加はり西曆二千九百十一年には普漏西及バイエルンに於て増加十萬を減じ大に世の注意を惹くに至れり鑑みずんばある可らざるなり

人爲の抑制

人爲の抑制とは人口増加して生計漸く難きを告ぐるに至れば移住、出稼等の事起り以て其他の人口を減ずるを言ふ。

元來移住は人世の難事、人情の欲せざる所にして老幼の能く爲し得る處に非ず、移住者は主として壯年たるを通例とす而して故國にありては未だ其養育費用の返償を得ざるに壯丁を失ひ頗る損失を免れざるの狀ありと雖も徒手爲すことなき餘剰の人あらば之を他國に移住せしめ以て殘餘の人民をして其全力を生産に盡さしむれば同額の生産物を小數の人民に分つる利あり又一國中人民稠密なる地方より其稀薄なる地方に移住するが如きは大に國中の生産を増加し勞力の効驗を大にするの利あり、然れども移住の原因が制度の不良身體財産の危殆賦斂の過重干涉の過度、生産の衰頹等にありとせば速に其原因を矯め移住を止さざる可らず、出稼も又其効驗は移住と同くして却て利益の大なるものあり、何となれば出稼は移住の如く出で、歸らざるに非ず、他邦又は國中の他地方に於て幾分の貯蓄を得携へて故山に歸り身を立て所謂錦を故郷に飾るものなればなり。

不期の抑制とは疫病、戦争等の如く自然若くは人爲の出來事に依りて人口を少減するを云ふ、抑々疫病の禍たる當に生産に従事する所の勞力者の數を芟除するのみならず豫防、療養

不期の抑制



埋葬等の爲め巨額の費用を要し國家の富を浪費するは世人の熟知する處なり而して疾病老幼に比すれば壯丁を斃すこと割合に多し、是れ壯者は其強を頼みて自ら不攝生の弊に陥るに由らずんばある可らず戒めざるを得ざるなり、戦争（野蠻時代の戦争は食料の不足に原因する者多く文明世界に於ても領土に關する争少しとせず）は常に生産上最有効の壯丁を斃すのみならず其費用も亦疫病の比に非ず而して男女其數の比例を失ひ風儀に關することなしとせず加之世運の進歩するに従ひ戦争の害は抑々大なるに至れり、是れ巨大の建築物、商船、鐵道橋梁、工場等生産上の要具にして戦争の爲め災害を被むる者大に増加し又往々國家の生産事業を停止せざる可らざることあるに由らずんばある可らざるなり。

又未だ一身を養ふの外餘財なきに既に妻子を養ふの費用を負擔するときは生計の程度を低下せざるを得ざるは數の免れ能はざる所にして自己の能力を發達すること能はず社會に對し其地位を墮さざるを得ざるに至るは自然の勢なり故に苟も遠慮のある者は先づ自己の才力を磨き以て社會の上流に立つべき準備を爲し豫め財を積て妻子の養育に備へ然る後に一家を構成するを通例とす、凡そ此の如き社會に於ては早婚の弊少く無謀の婚姻も亦稀にして自ら人口の濫増を抑制す、之を遠慮の抑制とす實に是れ人口の抑制中最良のものにして大に貴重す

遠慮の抑

べき所のものたり、元來生理上に於ては人間が父母たる力を備ふるは前陳の如く以外に早きものなりと雖も男子は二十五歳女子は二十歳に達せざれば神經未だ全く發達せず、筋骨未だ具らず血氣鎮らず故に早生の幼兒は概ね體質孱弱腦力虛薄にして夭折する者亦少なからず、其能く成長する者と雖も健全なる者極めて稀なり夫れ人類は生れて十五六歳に至るまでは通例自活の力なく養育を父兄先輩に仰がざるを得ず幼兒の夭折の如きは實に生産物浪費の極度と云ふべし其能く成長する者と雖も天性多病勞力に堪へず其生産する所の物其消費する所の物に及ばざれば社會の損失固より尠少なからざるなり而して此等の弊を生ずるは多くは早婚に在り豈に慎まざる可んや又無謀の婚姻とは血統年齢性質貧富教育等の事を意とせず、區々の事情の爲め漫りに配偶を定むると云ふ抑々血統の禍は之を七世に傳ふ豈に慎まざる可んや腦病、神經病、血液病等の遺傳實に恐るべきものなり而して年齢の懸隔は調和を被るの恐あり性質の不良は家室を亂する虞あり、貧富一方に偏するは或は夫唱婦隨の弊に過ぎ或は牝雞の晨たするの災害を醸成せん、教育なくんば子弟に家庭の教育を布く能はず、其他の流弊擧げて數ふるに暇あらず、遠慮の抑制は能く是等の諸弊を絶つ、其尊むべきは論を俟たざるなり人口の増加を抑制する原因概ね斯の如し、然るに不幸にして勞力者輩は多くに無學無識に

結論



して深謀遠慮に乏しく抑制中最も利益なる遠慮の抑制の如きは専ら中流以上に行はれ労働社會に於ては其勢力甚だ微弱なり、兵亂の如きは人口を減ずるの効力ありと雖も大に生産事業の進行を妨げ資本を消耗し隨て勞銀基金の高を減少し亂後に勞力者の艱苦を増加することなきを保せず、此の原因に依りて人口の増加を抑制するは只其數を減少するに過ぎずして、却て大 其分配を亂し労働社會に利益を與ふるものなし只遠慮の抑制を以て其利の最も大なるものとす、然りと雖も勞力者の輩又敢て全體を通じて常識を缺く者に非ず遠慮の抑制の利あるを悟り深く茲に鑑みざるべからず、先覺の士豈に又進みて之を啓き之を導くの勞を取らずして可ならんや。

## 第九目 勞銀基金の増加は資本の増加と正比例を

保つこと能はず

一國資本の總額を増加せば勞銀基金の高又隨て増加するは既論の如しと雖も勞銀基金の高は必ずしも資本總額の増加と同比例を以て増加すること能はず却て世の進歩に隨ひ比較的に減少するの傾向あるを通例とす、抑々世運進歩し人口増加するに従ひ其需用漸次多を加へ優等土地のみに依りて食品及原料品を生産すること能はず進みて劣等の土地に生産を試みざる

を得ざるは勢の免れざる處なり、然らば即ち人口増加、事業擴張するに従ひ一方に於ては食品、原料品の需用を増加し一方に於ては其生産を困難ならしめ以て其價格益々貴きを致すは經濟上普通の順序にして資本は原料品、購買に勞銀は食品の購買に比較的多額を費やさざるを得ざるは天下の大勢なり、而して固定資本の如きも世の進歩に従ひ益々其精を加へ其數を増加せざるを得ず、之が爲め巨額の金員を要する實に昔日の比に非ず、資本の増加は勞銀基金に入るもの割合に少なく其大部分は固定資本増加の資に供せられ原料品需用の増加と騰貴との爲に投せらるゝは較近の情態なり。

加之一國の資本漸やく増加し總て之を國中に於て使用するときには資本家所得の歩合大に減少するに至れば彼等は資本を内國低利の事業に使用するを欲せず之を他國に輸出するに至るべし、英國の如きは夙に外國放資を以て鳴り内國投資も少なからず、雖も近時英國人民の所有する外國及殖民地の有價證券は其高積んで四百億圓に達し毎年同國の新海外投資高は凡そ二十億圓にして佛國は約百五十五億圓一箇年の海外投資高凡そ十億なり西曆千九百十三年の投資總額は約十八億七千萬圓中約九億七千萬圓にして内國投資を超過す獨逸は百十六億餘圓にして毎年の海外投資額は十二億圓乃至十三億圓なり、斯の如く巨額の資本 輸出するのみ



ならず一方に於ては固定資本原料品の爲め割合に巨額の資金を要し資本の總額増加するも勞銀基金は資本の他の部分と正比例を保つ能はず富の増加と同一の比例を以て増加すること能はざるは勢の免れ能はざるものあり而して人口の増加は家屋の不足を來し方今家賃の高き亦往日の比に非ず、獨都伯林の如きは最も甚しく僅々八百馬克（一馬克は四十七錢二厘）の收入より最低二百馬克最高四百馬克、家賃賃を支拂はざるを得ざるの實例あり、勞働者の境遇困難なるものなしとせず、然れども資本總額の増加は多少勞銀の平均を増加すべきを以て大體に於て其利益たる固より論なき耳（英獨佛内外投資高に就ては拙著財政と金融乾第一編第九章第二節各目參觀）

## 第十目 機械の進歩と勞銀との關係

世運進歩し需用漸やく加はり生産の事業盛大に赴くに從ひ機械の使用漸次に發達し大に勞力を省略す、是に於て機械の使用は如何なる効驗を勞力者に及ぼすやの論顯囂然として世に起れり殊に勞力者輩の如きは往々事物の關係を推究するの力に乏しく専ら目下直接の影響を考へ、機械を以て勞力の需用を減じ隨て勞銀を減すべきものとし直に其使用の擴張と改良とを厭嫌するの弊あり又新式機械の使用は勞力者頗る之を難んずるの事情あり、蓋し數年の間

舊式機械を使用し馴れ身體、筋骨自から之に適合し習ひ性と爲りて殆ど其勞働を意とせざるに突然新式機械を用ゆるときは舊慣其用を失ひ、所謂古る固まりに固まりたる筋骨を以て更に新奇の動作を試みざるを得ず、爲に頗る困難を覺ゆのみならず未だ新式機械の使用に熟練せず、當初は新式機械の効力意外に薄弱にして其効用の如何に迷ふもの少しとせず、然れども是れ只一時の効驗のみ筋骨を訓練する數回幾くもなく能く新規の動作に堪ゆるに至るべし苟も新式改良の機械にして適當の者たらしめば最後の効驗を全ふするは疑を容れず一時の効驗を以て永遠の効驗として不利を萬世に傳へ以て噬臍の悔を殘すは迂愚の極と云ふざるを得ず、慮らすんばある可らざるなり。

斯の如く機械使用の擴張と其改良とは一方に於ては直接に勞力の需用を減するの思あり一方に於ては當初勞力者が其機械の使用に苦むの事情あるは疑ふ可らずと雖も凡そ勞銀歩合は資本家漫りに之を左右し得べきものに非ず、又勞力者の隨意に之を昇降し得べきものに非ず其多少を決するは必ずや之が原因なかる可らず、今若し機械の使用又は改良發明の爲め勞銀基金を減するの結果あらば之を以て多少勞銀の歩合を減少せざるを得ず、機械の擴張進歩劇に過ぎ機械亦其目的を誤まり生産を輔くること能はざるときは或は此結果を來すなきを保

機械の使用  
は結局  
勞力者に  
有利あり



し難し、然りと雖も苟も其進歩擴張をして眞に生産の増加を助くるものたらしめば勞銀基金忽ち舊に復し更に進みて舊に倍するに至らん、今北米合衆國の實況に就て之を見るに西曆千九百三年を以て終る所の五十年間に機械の使用に依り生産力は十三倍に増加し勞力者の數は五倍半と成り、勞銀總額の増は十倍に達せり故に機械使用の擴張、改良、發明の實施は假令一時勞銀を減少するの傾向あるも結局勞力者の利益と爲るを常勢とす然れども若し一國資本の總額を増加するに非らずして工場濫設又は鐵道熱の結果の如く急劇に固定を増加するときは其結果必ず流動資本を減せざるを得ずして勞力社會に不利を與ふるは勿論一國の生産に圓滑の動作を失ふは既に第三章に於て論究したるが如し故に不當の機械擴張は勞力者の利益に非ずして國家の進運に害あるものと云はざるを得ず。

斯の如く機械の擴張は結局勞力者の利益と爲るを通例と爲すと雖も精巧勞力は改良發明の爲め永久に其精巧より生ずる利益の一部又は全部を失ふの場合なしとせず例へば茲に一製靴師ありて革を斷ち靴を縫ふの妙技を得其製する所の靴は品質佳良にして且つ一日に製造する所の分量は他同業者の得て企て及ぶ所に非ず其伎の精巧なるが爲め他の同業者に比して二倍の勞銀を得たりとせん、然るに茲に精巧なる製靴機械の發明ありて佳良の靴を製造し其品質

精巧勞力  
は或は  
改良機械  
の爲め其  
利を失ふ  
ことあり

彼の精巧なる靴師の製造品に劣らず而して價格に於ては却て廉價なることを得ば彼れ其妙技の利益を壟斷すること能はず、唯尋常一般の製靴師に比すれば少しく顧客多きの利あるか又は普通の勞力者より少しく高き勞力を以て製造所に雇はれ得るかに過ぎざるべく其妙技より生ぜし特利の如きは最早之を施すに所なく永久に之を失却せざるを得ざるなり、然れども尙ほ技能の効能は全く消滅せず其収入は尋常一般の勞力者にして多少多かるべきは疑を容れず

第十一目 勞力者生計の困難

前十目に論ずる所を以て之を觀れば勞銀基金は資本増加の割合に其額を加へず、人口の増加は勞力社會に其勢力を逞ふること能はず、機械の進歩は結局勞力者一般を利するの効力ありと雖も一時如需用を減少する場合なきを得ず加ふるに世運の進歩人口の増加は食品及原料品の價格を高め（獨逸に於ては西曆一八七五年の牛肉の價を百とすれば同一九〇年には百十一、小牛の肉の西曆一八七一年の價を百とすれば同一九〇年には百二十一と成り、羊毛は西曆一八九七年を百とすれば同一九〇七年には百四十八と成り、木材は同期間に百より百三十九に上れり）機械の進歩は生産費を減じ工産の價格を減じ得べきも其最少の利益を得るは細民の需用品に非ずして中流以上の需用に係る精巧にありて細民の需用に係る物品の如



きは其原料品の價格の増加に因り割合に低廉なること能はざるなり何となれば上等精巧品の價格を決するは其製造の手續如何に依るもの多くして原料品の如きは實に其價格の一小部分たるに過ぎざるも粗造品に至りては即ち然らず其價格の高下は一に原料品を得るの難易に由ればなり故に進歩改良の大利を占むる者は富民にして細民に非ず、加之人口の増加に従ひ食品益々其價を加ふるの傾向あり、果して然らば勞力者將來の生計其困難を増すは自然の數なりと云ふべし、實に是れ大勢の向ふ處固より人爲の奈何ともすること能はざる處なり。

然りと雖も人定まりて而して後能く天に勝つ、資本配當の途其宜きを失はず、勞働社會の智力を養ひ其勞力の効驗を増し勤勉遠慮の念を喚起し以て其地位を進むることを得ば先天の困難如何ぞ之を避くるを難しとせんや、然るに世之を悟らず往々他人に依頼し誤謬の見を以て之が救済の途を求めんとす過らざらんと欲すと雖も豈に得べけんや、今之を實地に徴するに近年我國中流以下人士の生計漸く困難ならんとす請ふ左に近年に於ける物價騰貴の實況を示さん固より列記物品中には專賣制度消費稅等人爲の結果に因るものなきに非すと雖も亦以て大體を觀るに足らん。

大正二年五月中東京物價指

品目	本月	前月	前年同月	品目	本月	前月	前年同月
第一類	一八三	一八三	一七五	肥料	一〇六	一〇六	一〇十
米	二一七	二二二	二三四	魚肥	一一〇	一一四	一一一
大麥	二二一	二三五	二三九	炭	一一四	一一五	九九
小麥	一五一	一五〇	一五一	薪	一五二	一五二	一四二
小豆	二一四	二一五	二〇五	木材	一一二	一一二	一一二
鹽	二三五	二三五	二三八	石	一〇六	一〇六	一〇六
味噌	一九五	一九五	二〇三	煉瓦	一一四	一一四	一一六
醬油	五八	五八	一〇三	瓦	一〇八	一〇八	九〇
日本酒	一二四	一二四	一二八	セメント	九七	九七	一〇九
啤酒	一〇三	一一八	一四三	表	一一八	一一七	一二六
鶏卵	九八	九五	九二	木蠟	一四三	一四一	一三三
油	一九一	一一八	一一八	生漆	一三二	一二九	一二六
麵粉	一二九	一二九	一二九	藍	一四三	一四三	一三八
其他	一二九	一二九	一二九	麻	一五二	一五一	一六五

第三節 勞銀 第十一目 勞力者生計の困難

一一九



銅	石	炭	綿	絹	甲	羽	生	製	第	平	眞	白	絹	日
炭	炭	寸	糸	手	斐	二	糸	茶	二	均	綿	木	裏	本
均	均	均	均	均	均	均	均	均	均	均	均	均	均	均
一〇二	一三二	一〇二	一五九	九三	九二	八二	一一二	一一二	一三五、九〇	八七	一一一	一一五	一一六	一二六
一〇二	一三二	一〇二	一六一	八九	九一	八一	一一三	一二三	一三六、五八	八八	一一一	一一五	一二六	一二六
一〇八	一三〇	一〇一	一五五	八八	九〇	七七	一一〇	一三七	一三七、四八	八八	一一四	一一九	一二三	一二三
洋	洋	皮	毛	金	毛	フ	綿	油	大	西	小	砂	第	平
鐵	紙	革	織	巾	斯	ラン	綿	糖	豆	洋	麥	糖	三	均
均	均	均	均	均	均	均	均	均	均	均	均	均	均	均
八四	一一三	一四六	一四〇	一一〇	九〇	一〇九	一四六	一三二	一三九	一六四	一五五	二四五	一〇九、五六	一一〇、三三
八五	一一三	一四六	一四〇	一一〇	九一	一〇九	一四六	一三三	一三七	一六四	一五二	二四四	一一〇、三三	一一〇、六七
九八	一三三	一四一	一四七	一一一	〇三	一〇四	一四八	一四四	一四四	一六三	一五三	二四八	一一〇、六七	一一〇、六七

洋	硝	石	平
釘	子	油	均
均	均	均	均
九三	一〇九	一五八	一三三、九一
九四	一〇九	一六一	一三四、〇〇
九二	九七	一五〇	一三四、三八
第一類	第二類	第三類	總平均
一三五、九〇	一〇九、五六	一三三、九一	一三一、一一
一三六、五八	一一〇、三三	一三四、〇〇	一三一、六三
一三七、四八	一一〇、六七	一三四、三八	一三二、二八

備考 右は明治三十三年十月の平均相場を一〇〇として算出したるものなり今更に前月及既住五個年間の同月を一〇〇として本月の高低を對比すれば左の如し。

第一類	第二類	第三類	總平均	前月に比し	大正元年五月に比し	明治四十四年五月に比し	同四十二年五月に比し
九九、五二	九九、三〇	九九、九三	九九、九〇	前月に比し	九九、八五	一〇七、四一	一一二、九五
九九、五二	九九、三〇	九九、九三	九九、九〇	大正元年五月に比し	九九、八五	九九、〇〇	一〇一、〇四
九九、五二	九九、三〇	九九、九三	九九、九〇	明治四十四年五月に比し	九九、八五	一〇八、五四	一〇七、一三
九九、五二	九九、三〇	九九、九三	九九、九〇	同四十二年五月に比し	九九、八五	一〇六、五三	一〇九、六三
九九、五二	九九、三〇	九九、九三	九九、九〇	同四十二年五月に比し	九九、八五	一〇六、五三	一一〇、三七

又近年に於ける物價と勢銀との關係を見るに後者の騰貴に概ね前者に及ばず以て本目論する處を證するに餘りあり。



東京市中の物價と工賃

年次	物價指數												
	大工	大工	大工	大工	大工	大工	大工	大工	大工	大工	大工	大工	大工
明治三十三年	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
同三十四年	99.3	100.0	111.5	98.8	101.0	99.3	87.7	100.5	100.5	100.5	100.5	100.5	100.5
同三十五年	97.3	98.8	103.7	90.6	95.5	99.9	93.3	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同三十六年	106.5	110.1	107.8	85.2	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同三十七年	110.5	107.7	103.7	85.2	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同三十八年	110.1	109.9	109.1	88.6	94.5	100.0	96.1	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同三十九年	111.5	111.5	113.7	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同四十年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同四十一年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同四十二年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同四十三年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同四十四年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同四十五年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同四十六年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同四十七年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同四十八年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同四十九年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同五十年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同五十一年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同五十二年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同五十三年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同五十四年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同五十五年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同五十六年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同五十七年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同五十八年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同五十九年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0
同六十年	119.0	117.7	119.8	101.0	95.5	100.0	98.6	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.0

一 物價指數は日本銀行に於て毎月調査せる物價指數の第一類即ち日用必需品の明治三十三年十月の相場を百として算出したる一ケ年の平均なり。

一 工賃指數は大蔵省に於て調査せる諸職勞銀に依り明治三十三年の平均を百として算出したるものなり。

一 大正二年は三月までの平均指數なり。

實況斯の如し下層社會の爲め対策する處なきを得ず、請ふ諸般救濟法中真正有効なる者と其無効有害なる者とに就て略陳する處あらんとす。

第十二目 職工同盟、強請及同盟罷工

勞力者の生計は今日既に難く且つ將來に益々困難を加ふるの傾向あるを以て勞力者中同盟を爲し規約を設け以て互に疾病、又は老後の費用を幫助し或は資本家に對して自己の希望を訴へんと欲するとき其要求を遂るを以て目的とし一致團結することあり之を職工同盟と爲す又連合の力に依り強て資本家に迫り其望む處を請求するを強請と云ひ、聽れざるときは同盟して業を罷むるの方法とするを同盟罷工と云ふ由是觀之職工同盟に二個の目的あり。

第一 互に疾病、傷痍等の不幸を助け、及老後の安樂を幫助する事。



第二 資本家が資金を減少せんとするときは同盟中一致團結して一時に労働を罷むる等の強迫手段を用ひて其減少を拒み要くは労働の増加又は労働時間の減少を請求し又は同盟外の労働者使用に反抗する事。

是等なり、第一の目的の如きは同業相憐み疾病其他の災害に際しては相互に幫助し又は老者の救護を期するものなれば人情宜く此の如くなるべくして固より聞然すべきものなしと雖も第二の目的の如きは大に論究すべきものあり、今若し商業沈滞し資本家相當の利益を得る能はざるに尙ほ労働を減せず従前の高を支拂ふとせし勢ひ營 所得を減少し甚しきに至りては損失を受けざるを得ざるべし、此時に當り資本家に反對するの同盟を結び労働に維持若くは増加を求むるも資本家は決して之に應せず同盟者の失敗に終るや論なき耳何となれば斯の如き時期に際會しては資本家に對る暫時事業を停止するの利あるを知ればなり、元來斯の如く生産品の捌け方思はしからず下向きの市況を呈するは其の事情に變動なしとせば生品の供給多きに過るに原因す、此時に當り同盟罷工すと雖も毫も資本家に痛痒を感せしむること能はず、却て其喜ぶ所なるや亦知る可らず、然るに同盟の貯蓄固より限りあり焉ぞ久に堪るに足ん、然るを況や此時に方り資本家をして強て従前の労働を拂はしめば實際損失を被り彼等其

向上市場  
には強請  
を爲す可  
らず

業を全廢せざるを得ざるに於てをや、果して然らば勞力者は終に一錢の労働をも得ること能はざるに至るは必然の勢なり故に斯の如き時機に際して同盟罷工を企つるが如きは只徒らに同盟の貯蓄を蕩盡するのみならず弓折れ矢盡き終に兜を脱ひて資本家の軍門に降らざる可らず、然らば即ち情露はれ勢屈して曩の五分減(例へば)或は一割減となるも尙且つ忍ばざるを得ざるの悲境に陥るなきを保せざるなり。

然りと雖も市場活潑資本家の營業所得漸次に増加し實際其所得を勞力者に分與することを得べきに當り尙ほ従前の労働歩合を保つときは勞力者より進みて之が増加を請求し、聽れざれば同盟罷工を企るも決して之を不穩當と云ふを得ず却て之を智慮ある文明的動作と云ふを得べきなり、元來斯の如きの市況に際しては營業者の生産する處の物品は其需用を増加して供給不足を告げ其價格騰貴し資本家異常の利益を得べきを以て假令一日と雖も、罷工に遭遇せば需用正に盛なるの物品を生産すること能はずして恰も龍の玉を失ふが如き思あるは自然の勢なり、此順況に應じ労働の増加を請求せば資本家も計算上之を増加し得べきを以て罷工の目的を達すること必然たり、是れ固より天の許す處にして固より逆取に非ざるなり、抑々先天の利は進みて以て之を收むべし天の與ふるを取らずんば却て禍あり而かも逆取は天の許

向上市場  
には強請  
成功す



機先を制するの必制

さやる所なり、夫れ向下轉去は自己の鼻孔人の手裏にあり慮らずんばある可らず、然れども向上轉去は以て他人の鼻孔を穿つに足る豈に敢て之を忽にするを得ん哉同盟罷工は斯の如く時に勞力者の爲め損失となり時に利益となる、禍福の分るゝ所は只々自然に従ふと之に反するに於てある耳、然るに勞力者輩は大率見聞狭くして深謀遠慮を缺き事物の關係を探究し機に乗じて着々其歩を進むるの智力に乏しく勞銀減少すれば其原因の如何を問はず情に驅られて漫然同盟罷工を試み資本家の利益多く増給の目的を達し得るの機あるも之に投ずるの才識なく機を失ひ敗を取り尙ほ茫乎として悟らず殆ど傍觀するに必びざるものあり、先覺の士能く之を導くに非ずんば何を以てか彼等の他位を進むるを得ん、然り而して其宜く工罷を試みるべく宜く之を試みる可らざるの機を察するは決して爲し難きの業に非ざるなり、凡そ經濟界の事物は依る可きの標準あらざるはなし苟しくも普通の注意を怠らざれば機を逸し誤を爲すこと甚だ難し例へば茲に多數の勞力者を使用する紡績事業に従事する者ありとせん、生産事項に變動あるに非ずして綿糸の價格日に月に減少を來すが如きことあれば即ち是れ營業所得の歩合減少するの時なり此時に方り若し勞銀の減少あれば勞力者は宜く柔順に伏従すべし、之に反して其價格日に月に増進するときは即ち是れ資本家の所得格かにして増給を聽するを

得るの時なり、然るに資本家より進みて勞銀を増加するが如きは同業者其他より勞力需用の競争を始むるに非ざれば實地に於て決して之なしと云ふも敢て妨げなかるべし故に斯の如き時機に際會するときは勞力者より進みて増給を請永し聽れざれば罷工を試みるは機宜を制するものにして屈より謙讓すべきに非ざるなり、然れども斯の如きの機宜を制するは無智の勞力者輩の能く爲し得べき處に非ずして先覺の士之を導くに非ずんば焉んぞ能く其終を全ふするを得ん哉、須らく有効の組織を構成し常に内外市場の景況を詳にし進退其宜きを制し大に益する所なかる可らず、勞力者は此同盟あるは猶ほ兵に隊伍あるが如く其指導者ある 猶ほ隊伍に將校あるが如し、先輩亦奮ひて以て指導の勞を惜まず平時に在りては勞力者智識の進歩を計り事あれば即ち其進退を指揮し勢に依り其宜きを制せば世を利する蓋し鮮少に非ざるべし、元來勞力者は天下人口の過半を占め以て社會の基礎たり、此基礎にして鞏固ならざれば社會の安寧を期するを得ず國力の伸張得て望む可らざるなり、勞力社の利益豈に夫れ之を忽にするを得ん哉。

今事實に就き米國に於ける同盟罷工の實況を示せば別表の如し。



然り而して英國の實況は左の如し。

自西曆千八百九十四年 至同千九百五年 十二年間に於ける英國の資本勞力の爭議

種 類	名 稱	百分比例	原 因		結 果	
			名 稱	百分比例	名 稱	百分比例
建 築 業	勞 働 時 間	九、〇	勞 働 時 間	六三、五	勞 働 者 ノ 勝 利	二七、五
礦 山 及 石 坑 業	勞 働 時 間	四七、〇	勞 働 時 間	四、五	資 本 家 ノ 勝 利	四一、五〇
金 屬 事 業 及 造 船 業	勞 働 時 間	一四、五	勞 働 時 間	八、五	仲 裁 ニ テ 折 合	三一、二五
紡 績 及 織 物 業	勞 働 時 間	一五、五	職 工 同 盟	一三、五		
衣 類 業	職 工 同 盟	四、	其 他	八、〇		
運 送 業	其 他	四、五		二、〇		
雜 業		五、〇				

往時に於ける英國の同盟罷工の狀況斯の如し而して爾來多少穩健の情態を示し來りしに最近西曆千九百十一二兩年は最も險惡なる情態を示せり請ふ少しく之を述ん。  
 晩近英國に於ては資本勞力の間頻りに調和を失ひ西曆千九百十一年に於ける労働紛議中最

も顯著なる者は運送人夫の同盟罷工にして諸般の事業著しく其影響を受け當年中に解決を告る能はずして翌年に持越したる者二十七件關係労働者二萬六千七百二十人を數へたり、當年の同盟罷工九百二件中五千人以上の關係労働者を有せし者僅に十五件なりしが其關係労働者の數は實に總數の約六割七分に當れり。

當年の労働紛議關係者の内容は左の如し。

建築業	二、七八九人
鑛山及石坑業	一四〇、八〇八
金工及造船業	九三、七八三
織物業	二二一、四三三
裁縫業	九、八一〇
運送業	四四八、六一八
其他	四四、七三九
計	九六一、九八〇

今英國に於ける農業以外の労働者一年の就業日數は約三十一億日なり、然るに當年の罷工



延日数は千三十一萬九千五百九十一日に達し總就業日数の三百分の一に當れり、是れ英國に於ける労働者各一人一日罷工を爲したるの割合にして運送業者の罷業の如きは一人二日、炭坑罷業は一人約四日、金工機械及造船業罷業は一人一日、織物業罷業は一人一日、建築業罷業は一人一日の約十二分の一に當れり而して紛議の多數は勞銀問題にして當年の紛議中五百七十六件は之に基因し其中三百七十四件關係労働者三十三萬三千六百四十七人は勞銀増加にして運送業者其大部を占め、其他建築業、機械業、造船業等の紛議は其因を同うせり、然るに織物業、裁縫、業炭坑業紛議に至りては第一者は三分の一、第二者は四分の一、第三者は五分の一のみ勞銀増加に起因せり今當年の紛議の原因と其關係労働者の内譯を示せば左の如し。

勞銀問題	勞銀の増加要求	三三三、六四七人
同上の減少反對	其他原因	一六、二八〇
計		三三三、二八八
勞働時間問題	勞働時間減少要求	三八三、二一五
其他原因		八、六九九
計		四、四六二

計	一二三、一六一
特殊労働者使用問題	三三二、六三九
労働條件問題	六八、〇〇九
労働組合承認問題	三二七、五八八
其他の原因	六、四九二

當年の労働紛議の範圍、原因等斯の如し今一步を進めて其結果を見るに左の如し。

紛議件名	労働者の勝利	雇主の勝利	協 議	未 定
建築業	四、九〇	五、九	四五、一	—
炭坑業	二五、九	三三、五	四〇、二	〇、四
石坑其他鑛業	一〇、八	四八、〇	四一、二	—
金工、機械及造船業	二三、五	二〇、二	五六、三	—
織物業	一、七	八、三	九〇、〇	—
裁縫業	一一、三	一七、二	七一、五	—
運送業	二、二	三、三	九四、五	—



其他

八、六

三〇、六

六〇、八

一三三

即ち總體に於て労働者の勝利に歸したるもの六分五厘、雇主の勝利に歸したるもの九分三厘、相互の協議に終りたるもの八割四分一厘にして紛議の結果労働者の全勝及全敗に歸したる歩合は過去十年以來未曾有の低率を示せり而して調和解決の方法及件数は左の如し。

件 數	關係の働勞者數
雇主側と労働者のと直接交渉	六五二
仲裁々判	二八三、四九三
和解	二一
交渉を開始せずして雇主提示條件の下に復業	一三、七〇五
労働者の更代	八四
事業の閉鎖	五二四、二二四
未決	七二
計	一五、九一九
	六六
	二、八五三
	六〇四
	三〇六
	九〇三
	八三二、一〇四

西曆千九百十一年に於ける情況斯の如く既に世人をして肝膽を寒からしめしに同千九百十

二年は更に一層の險惡を加へたり當年中同盟罷業の爲め労働者の休業せし時間は四千十三萬九千三百日に達し未曾有の多數を示せり而して當年の石炭坑夫の罷業は英國罷業史上最大の同盟罷工にして勞銀の損害一億五千九百八十五萬五千圓に達し英國の炭坑區は悉く休業し罷工者百九萬六千九百四十七人に達し二月より三月に亘る六週間に及び時間の損害三千百五十六萬七千日なり而して炭坑人夫以外各種の勞 紛擾に關係せし労働者の數は百四十萬八千二百六十六名にして各方面の同盟罷工の爲に休業せし日數左の如し。

罷 工 者 數	延 日 數
建築業	一〇七、六〇〇
採石業	三七、四〇〇
機械及造船業	一、〇九三、〇〇〇
其他の金屬業	一三四、九〇〇
織物業	三、六五五、〇〇〇
反物業	五〇七、八〇〇
運輸業	二、五五八、五〇〇
第三節 勞銀 第十二目 職工同盟、強請及同盟罷工	一三三



第四章 分 部

其他の貿易業

二二、七七四

二三四

四七八、二〇〇

にして之に坑夫の同盟罷業を加ふれば前記の四千十三萬九千四百日の損害となる實に空前の多数にして其絶後たるを冀望せざるを得ざるなり。

又其回数及人員等は左の如し。

四 曆 年 次	資本勞力問争議回数	争議ニ關係シタル勞力者ノ數	争議間ノ延日數
自一九五至九(毎年ノ平均)	七九三	二二五、〇〇〇	七、五二四、〇〇〇
一九〇〇	六四八	一八八、五三八	三、一五二、六九四
一九〇一	六四二	一七九、五四六	四、一四二、二八七
一九〇二	四四二	二五六、六六七	三、四七九、二五五
一九〇三	三八七	一一六、九〇一	二、三三八、六六八
一九〇四	三五五	八七、二〇八	一、四八四、二二〇
一九〇五	三五八	九三、五〇二	二、四七〇、一八九
一九〇六	四八六	二一七、七七三	三、〇二八、八一六
一九〇七	六〇一	一四七、四九八	二、一六二、一五一

一九〇八	三九九	二九五、五〇七	一〇、八三四、一八九
一九〇九	四三六	三〇〇、八九一	二、七七三、九八六
一九一〇	五三一	五一五、一六六	九、八九四、八三一
一九一一	八六四	九三一、〇五〇	一〇、二四七、一〇〇
一九一二	八五七	一、四六三、二八一	四〇、九一四、六七五
一九一三	一、四九七	六八八、九二五	一一、六三〇、七三二
一九一四	七九三	四四六、二〇五	一〇、一〇四、七〇〇

進んで西曆千九百十三年中の同盟罷工の詳況を述んに係争人員百二十三萬餘中八十五萬人(石炭坑夫)は勞銀最低率に付き不平を訴へ十二萬九百二十九人は職工同盟の主義綱領を固守するに出で十一萬四千六百六人は勞銀増加其他は種々の原因に擔るものにして内七割四分即ち件數七十六、人員二十二萬三千六百六人は係争者相互の協議及第三者の仲裁に依り二十三件は常設仲裁機關の裁判に依り其終を告げたり、今設常設機關は百六十四箇所に設けられ西曆千九百十三年乃至同千九百十三年迄に取扱に係る者三千百六件の多きに達し其効力漸く顯はる而して西曆千九百十三年十一月に於ける勞働大會の如きは大にキヤナダ主法(後に説くべ



歐洲大陸  
の概況

し)の趣旨を賛し同盟非同盟罷工者の使用に區別を措くの非なるを承認せり。

英米兩國に於ける同盟罷工の情況は前陳の如し、然り而して輓近歐洲大陸に於ても商工の事業發達するに隨ひ罷工漸やく頻繁にして西曆千八百九十七年乃至同千九百六年に至る滿十ヶ年間佛國に於て起りたる同盟罷工は四千四百二十一件之に關係したる勞力者の數は百八十八萬四千九百七十八人にして一年平均十八萬八千四百九十八人なりとす、今西曆千九百一年の調査に據れば佛國の職工人夫の數は九百四十五萬一千九百七十九人なるを以て一ヶ年に於て同盟罷工に關係せし人員の總數の凡そ二分なり、而して罷工には各々長短ありて休業日數も區々なりと雖も右十ヶ年の休業延日數は三千四百四十萬二千七百九十八日にして一ヶ年約三百四十四萬二千八百八十日に相當す是れ一見甚だ多きが如しと雖も佛國に於ける一ヶ年の勞働日數は三百日なるを以て之を基礎とし一箇年の勞働總延日數を計算するときは前記三百四十四萬餘日は僅かに其萬分の十二に止まり敢て驚くべき大數と云ふを得ず、又之を工事に従事せざる官吏公吏の疾病其他の事故休の數即ち西曆千九百一年に比するも甚だ少し故に同盟罷工は其害一見甚だ大なるが如しと雖も事一小部分に關し一般に對し其害則ち大ならずと論斷する者あり、然りと雖も是れ徒らに重を員數の多少に置き事物の關係を詳かにせざるもの

勞力者外  
の疾病及  
事故休

罷工者の  
最も慮る  
べき點

にして固より堂に登るを得ざるものたり何となれば同盟罷工は直ちに生産分配の機關に係り其組織を紊亂し其調和を破り損害測知す可らざるものあればなり、殊に其衝に當る部分の如きは之が爲め大損失を受け加ふるに一般の不便を免れず今一例を舉んに曾て西曆千九百四年マarseyに於て起りし港人足の同盟罷工の如きは近年に起りし著名なる者の一にして同年三月より九月に連なり殆ど同港の經濟機關を立ち窹みの状態に陥らしめ出入貨物の噸數前年は千四百五十一萬二千噸なりしに罷工當年は千三百三十五萬三千噸に減じ、對向港なるゲンスは之に反し千百五十三萬噸より千二百七萬噸に増加し西曆千九百五年に於ては反動の爲めマarseyは二百二十二萬噸に増加しゲンスは九十二萬噸を減せり、總て運送、通信、點燈等公共的性質を帶ぶる所の事業に於ける罷工は其害の及ぶ所廣且つ大なり而して西曆千九百十一年五月佛國に於て起りし『ペンゾール』油課税に反對し自動車運轉手が同盟罷工せしが如きは彼の郵便事業者の罷工の如く災大ならずと雖も其素質最も險惡なる者と云はざるを得ずして立法上亦大に注意を要す、慎まざるばある可らず又勞力者に就て之を論ずるも罷工の爲め利益を得るは容易に非ず今前記の例に據り之を見るに十八萬八千餘の休業日の平均は一人十五日八分にして一ヶ年の勞働日數三百日の五分二厘七毛に當り其丈は勞銀を失ひた



る勘定なり、假令好時機に罷工を爲し例へば五分の増給を得るとするも五分増にて十五日以上失ふたる勞銀の全額を回収するは短日月の能く爲し得る所に非ず、況や長日月の罷工は同盟の資金を盡して尙ほ不足を見るは數の免れ能はざる所なるに於てをや、今佛人某の調査に據るに前記十ヶ年間の同盟罷工中勞力者の勝利となり給料の増を得たる高は一日に平均零法三二七にして休業の爲め失ふたる者は七十九法四七三なりとす、果して然らば得を以て失を償ふには二百四十三日の勞働を要す、然れども是れは前記十ヶ年間の平均にして其間種々の事情ありて其結果を異にす即ち西曆千九百四五年は好景氣なりしを以て回復は七十五日乃至七十八日に足りしと雖も同千九百六年は不景氣なりしを以て三百六十三日を要し同千九百十二年の如きは年柄最も悪くして回復には三ヶ年を要する計算となれり、然らば則ち前損を回復せざる中に復た新罷工を生じ永劫回収の道なきの不幸に陥るなきを保せず慮らすんはある可らざるなり。

次に記載すべきは西曆千九百六年五月一日に始まり三百九十五の罷工を惹起し一萬二千五百八十五箇所の印刷所を動搖せしめたる一大罷工なりとす、此罷工に關係したる勞力者の數二十萬二千五百七人にして休業延日數三百五十七萬三十三日に及び是等罷工中の得失は失

罷工者損失の實例

失業者の復歸に長せし月を要する例

六百三十七萬六千八百八十三法、得百二萬千七百七十七法にして失の回復の爲め千八百七十一日即ち六年以上を要せり、豈に怖れざる可けんや、元來罷工は協議に前つある後るゝあり又は仲裁の上協定する者等種々ありて毎日其情況を異にすと雖も前記十ヶ年間の罷工の結果其損失を償ひ得して平均二百四十三日なりとす、而して成功は總數の二割三分、人員は一割二分に止まり不成功は三割八分にして人員は二割六分にし達し其他は仲裁にて協議に終れり、然れども長期に亘る罷工は概ね成功少なく件數は百分の六人員三分六厘に當れり獨逸に於ても同様の結果を呈せり、今佛國最近の罷工回數及人員を表出すれば左の如し。

西曆年次	回 數	人 員
一九〇〇	九〇二	二二二、七二四
一九〇一	五二三	一一一、四二二
一九〇二	五二二	二二三、七〇四
一九〇三	五六七	一一三、一五一
一九〇四	一、〇二六	二七一、〇九七
一九〇五	八三〇	一七七、六六六



一九〇六	一、三〇九	二〇三、四二二
一九〇七	一、〇五九	二〇六、九三〇
一九〇八	九八六	二〇〇、四〇四
一九〇九	一、九〇九	二二一、八六〇
一九一〇	一、五二一	二〇〇、七〇五
一九一一	一、六二一	二二〇、四〇八

右の中西曆千九百十年四月より六月に亘る間に起りし水火夫一般罷工は殆ど海港の貿易を閉塞し同年六月の南部鐵道の罷工は多大の不便を惹起せり、兩罷工に對しては政府は嚴重なる處置を爲し公安の維持及貿易の障害を除くに殆ど其全力を盡せり、是等罷工漸やく治まり世人纒かに愁眉を開きしに十月十日に更に北部鐵道の職工人夫等突然何等の通知なくして罷工を遂行し西部其他の線路に延及し數日の間巴里と西北部との聯絡全く杜絶し英獨との通行亦多大の障礙を破りたり、是に於て政府は急に自動車隊を組織し之を以て窺かに郵便物の運送を爲し、煽動者は容赦なく之を捕縛し相當の罰に處し、兵士をして列車の運轉荷物の運送等を爲さしめ動員令を利用し罷工者中の豫後備に在る者を招集し其職に應じて現役兵士を助

けて鐵道事務に従事せしめ、罷工の効力をして其過半を失ふに至らしめたり、此罷工は一週間を繼續せり、今回の罷工に對しては政府の處置甚だ嚴重なりしを以て例の社會黨議員は之を喜ばず政府に對し劇烈なる攻撃を試みたり時に内閣議長内務卿及教務院長ブリアン氏は奮然として『公法の安寧は是れ佛國革命の主義にして萬世動す可からず而して社會存立の權利は職工が罷工するの權利と固より同日の論に非ず』と論定し社會黨の試みたる種々の妨害を鎮壓し百八十三に對する三百二十九の多數を以て政府の處置を可として其の信用を保持する旨を決議せしめたり、是れ十月二十九日の出來事なり、然れども氏は内閣が少數たりと雖も國民の一部と衝突するは國家の慶事に非ずとし閣員總體の辭職を主張し、終に之を決行せり大統領ファリエル氏は一旦其請を容れしと雖もブ氏に非ざれば新内閣組織の大任に當る者なきを察し氏をして新たに内閣を組織せしめたり氏も之を辭むに言葉なく新内閣を組織し十一月七日を以て議院に出席し國家の交通機關を以て勞働争闘の目的物と爲す可らざるの立法を要すべき旨を公言せり、嗚呼佛國も亦キヤナダ立法(後にあり)に一步を進めしものと云ふべし、由來佛國は同盟罷工の取締り頗る寛裕にして國家の經濟は勿論屢々良民の苦む處と爲りしがブ氏の處置は甚だ機宜に適し進退亦公明なり只氏が議論中罷工の權利を認むるが如き口



吻あるは頗る遺憾とする處なり、然れども佛國人士に此言あるは事情怪むに足らず而して氏の云ふ處は佛人多數の云ふを憚る處なり嗚呼氏も亦英傑なる哉。

因に云ふ獨逸に於て西曆千九百十年八月九月に於て起りたる同盟罷工は兩月の間私立造船所は殆ど總て休業せり、九月の末には伯林に於て百五十人の石炭輸送夫が同盟罷業を企て一揆を起し暴行を擅にせしを以て一千人の巡查を繰出し之を制せしも鎮定に至らず警官は終に抜劍するの已むを得ざるに至り拳銃丸の交換を見るに至れり豈に物騒ならず哉。

近時獨逸は同盟罷工最も多く西曆千九百六年に於ては資本家と勞力者の爭議八千五百四十三件を數へ内四千五百五十八件は仲裁に依り罷工を見ずして止めり、尤も佛國に於ては單に勞銀に關する紛議にして協議整ひし者を數へず獨に於ては之を數ふるを以て此差違を生ずるも獨に於ては前記年中の現に罷工となりたる者三千七十五件を數へたり、而して罷工を爲したる勞力者は三十一萬六千四十二人、單に勞銀増加の請求又は減少の抵抗を爲したる人員は六十萬千七百六人にして前者の成効は五割五分、後者の成効は七割八分に達し、失敗は罷工に於て二割一分、勞働問題に於ては二分に止まり、其餘は仲裁に依り讓歩となれり而して勞働問題の紛紜に付き要したる費用五萬八百七十八馬にして罷工の費用は千三百二十九萬七百

八百六十二馬に達せり、當年の罷工又は協議に依り六十九萬人は三百日即ち五十週間問題に就て勝利を得、一年に六千四百萬馬の利益を得其内四千二百萬馬は勞銀問題に關する者の獲得する處と爲れり、然れども罷工の爲め失ひたる勞銀は二千七百七十萬馬にして勞銀問題の紛紜中休業したるが爲に失ひたる勞銀は千五百萬馬にして休業時間は平均一人に付き四十八日なりとす、爾後の情況も大同小異にして大差なく西曆千九百七年に起りし同盟罷工は二千二百七十九回にして組合若くは第三者の煽動に係る者千六百七十九回其内千三百四十九回は金を以て幫助せられたり、然して之に與りたる人員は四十四萬五千六百六十五人にして其原因は主として勞銀及勞働時間なりとす、今其内容を見るに前者中の重なる者は勞銀の維持、増加、時間外勞働に對する特別報酬、從たる勞働に對する特別勞銀の請求等にして後者中の重なる者は勞働時間の維持短縮、時間外勞働の短縮若くは廢止、土曜日夜業時間の短縮、勞働時間確定の請求等なり而して其結果は成効三百七十七回、一部成効九百三十三回、不成効則ち失敗九百六十九回なりとす、越へて西曆千九百八年に於ては同數千三百七十七回、不成効則ち七百八十七回にして成効二百十回、一部成効四百十六回、失敗六百八十二回にして失敗當に多數を占む、翻つて鎖出の結果を見るに西曆千九百七年に起りし鎖出は二百四十九回にして内



同年中に鎮定したる者二百四十六件にして失職者八萬千六百六十七人なりとす、其結果は成功百十二、而して一部成功百十九不成効即ち失敗は僅かに十五回なり同千九百八年に於て起りし鎖出は百八十一回、失職者八萬二千四百四十一人にして成功百二十四、一部成功五十六、失敗十一回なりとす、是に由て之を觀れば罷工鎖出は正反對の結果を示し資本勢力の間圓熟の調和を缺くや疑を容れず尙は大に研究を積むの要あるや多辯を要せず然して最近の實況は左の如し。

同盟罷工

西曆年次	回數	人員	成功	一部成功	失敗
一九〇九	一、二二六	二四二、二一〇	二五五	四八八	六七六
一九一〇	二、〇五五	三五九、一九〇	三八二	八五〇	七五一
鎖出					
一九〇九	二〇〇	三五、六〇六	四六	五一	九
一九一〇	二、八一九	二五九、三〇〇	八九	七五六	四一

(備考) 西曆千九百十年の鎖出多かりしは建築事業の不振に由る近年伯林の人口は

其増加を止め附近宿驛の如きは著しき凋落の状を呈すとの記事あり(佛蘭西經濟雜誌)

方今同盟罷業及鎖出の實況概ね斯の如し蓋し鎖出とは資本家か單獨若くは協同して労働又は労働時間等に關し自己の主張を貫かんが爲め工場を鎖して強制的に勞力者を解雇するを云ひ、罷工と相對して譲らず兩者交々起りて互角の勢を爲し事罷工より起りて轉じて鎖出と成り、又は鎖出の結果變じて罷工と成るありて時に或は何れを何れと別つ能はざる處のものあり、今近時佛國に於て起りたる有名なる鎖出にして尙ほ吾人の記憶に新たなる者を舉れば、プレスルの硝子事業家の鎖出、ローン河の 세인트、ルイ港運送業の鎖出、ベサンソンの『ベシキ』塗師の鎖出、巴里の建築業者の鎖出等にして就中最も有名なる者は列記最後の者なりとす、此鎖出は西曆千九百六年五月一日を以て發表せられ忽ち罷工となり事不意に出て勞力者方少しの用意もなく種々の反抗を試みしと雖も終に其大敗に歸せり、是等の事屢々起り雙方の不利甚だしく其弊に堪へざるを以て巴里建築家はアンウエルスマーセイユの例に倣ひ資本家勞力者間に同盟を組織し其費用は資本家方の受持と爲し加入勞力者には他に先ち雇備すべき等の種々の便宜を與へ、勞力者方は之に報するに濫りに罷工を爲さず已を得ざる事



情あるときは先づ以て之を仲裁委員に訴へ其指揮に従ふべきものとし之に反する者は解雇の處分を受けるものと爲せし等頗る見るべきものあり、今哉我國の事情亦商工漸やく盛ならんとし罷工、鎖出に向て一層の注意を拂はすんばある可からざるの時機に達せり、前記同盟の規約書中参考すべきもの少しとせず、依て其梗概を左に掲出せん。

一 社員の数は無限にして左の三級より成立す。

一 正員

二 客員

三 名譽員

正員は建築事業家にして組合同規約を遵守す。

客員は職工長及職工にして組合同規約を遵守し規定の利益を受く。

名譽員は委員の定むる所の年額を負擔す。

正員は組合年限即ち三ヶ年間は組合を脱することを得ず。

客員は何時たりとは組合を脱することを得。

二 本組合は勞力者の爲め最短労働時間に就て定められたる最低労働を保持するを目的と

爲す。

三 資本家と勞力者間に生ぜし一切の係爾事件は總て之を仲裁に附す。

四 本組合は左の救護方法を設け建築業に従事する勞力者の物質的及精神的改良に力むべし。

一 疾病及び休業に對する救護

二 勞力者の寡婦孫兒に對する同上

三 退職者に對する同上

建築事業の雇傭人及監督者は必要あるとき本規約の利益を受けるの請求を爲すことを得。

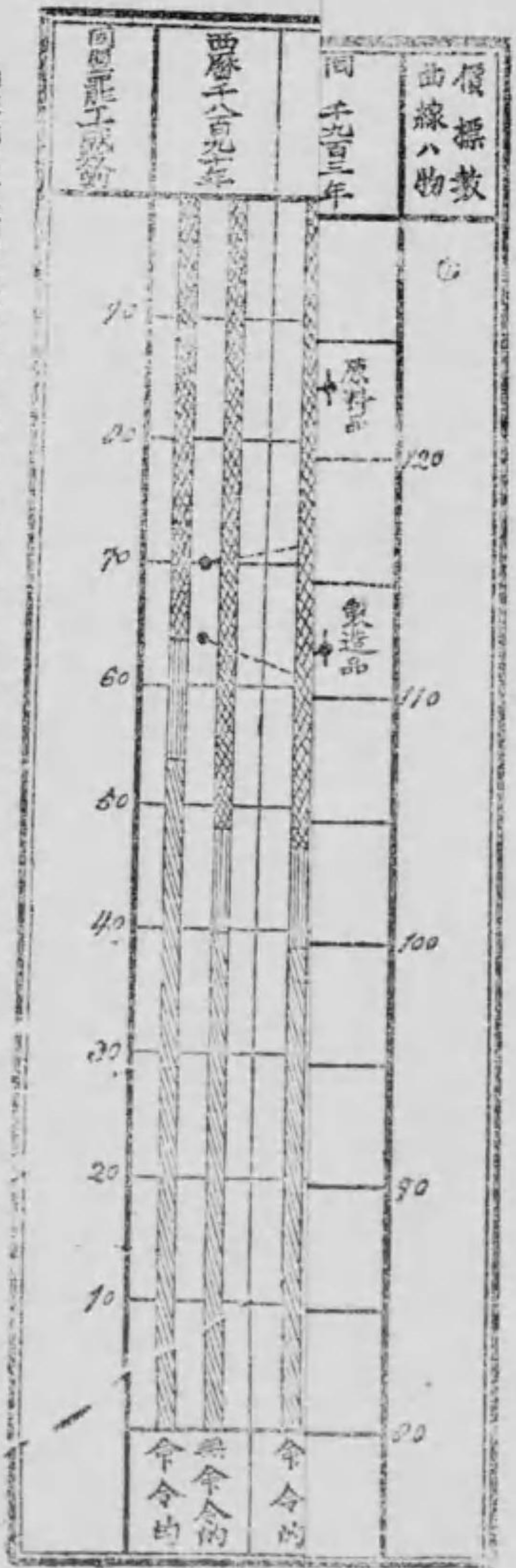
五 正員は客員のみにて其事業經營の爲め不足を生ぜし場合の外組合外の勞力者を使用することを得ず。

客員は正員以外の建築家の爲に労働すること得ず但組合所定の最短労働時間外に於て正員が客員の爲に適當なる労働を與ふること能はざるときは此限に非ず。

六 正員は其使用したる勞力者に支拂ひたる勞銀の年額に比例し加入費保險保給費の費用を分擔す。



- 七 規約書第十五條に従ひ正員及客員は仲裁委員に訴ふることなくして鎖出又は罷工を決定することを得ず。
  - 八 本組合の事務は正員及客部所屬の客員に依り選ばれたる委員之に任す。
  - 九 選舉は委員定めたる時と場所に於て無記名投票を以て之を行ふ。
  - 十 總會には正員客員總て出席す。
  - 十一 資本案勞力者間の爭議は所定の局へ之を提出し局は之を仲裁委員に移牒す。第一仲裁の結果満足ならざるときは委員中より又は名譽員中より双方に於て各々二人を選び再審を行はしむ。
  - 十二 再審員の說一致せざるときは委員に於て豫て(一ヶ年前)調製し置きたる建築家の氏名簿中より抽籤を以て一人を定め其說に従ふものとす。
  - 十二 宣告は總て儀式を用ひず友愛の情を以て説論的に之を爲す。
- 新組合の組織凡そ斯の如し設立日尙ほ淺く未だ十分に實際の結果を見る能はずと雖も其資本勞力雙方に利あるや論を俟たざるなり、然れども花季風雨多く明月亦雲霧あり世常に平か



近來北不來國に罷工を以て著名なる國の一にして西曆千八百一年乃至同千九百五年の罷工回数は三萬六千七百五十七にして關係人員六百七十二萬八千二十八人の多きに達し、抑々不來國に英國に比し倍數以上の人員を有するを以て回數人員に於ては敢て多なりと云ふを得ざるに似たりと雖も主農牛工國としては頗る多大の數と云はざるを得ず而して其數逐年増加し西曆千八百八十一年には同數四百七十一人員十二萬九千五百二十一、同千八百九十年には千八百三十三回人員三十五萬千九百四十四人、同千八百九十四年には千三百四十九回人員六十六萬四千二百五十五人、而して人數の多きは蓋し此年を以て最とす、同千九百年には千七百七十九回、人員五十五萬五千六百六十六人、千三百三年には三千四百九十四回人員未詳同千九百五年には千七百七十七回人員以上にして少しく減少せしと雖も西曆千九百零六年には商業繁榮、年額なるを忘る可らず而して罷工の原因は主として増加の請求、減給の抵抗、労働時間、労働組合認許の請求等なり、罷工の勢は年に依り増減あるは勿論なりと雖も西曆千八百九十八年以降は概して増加し、仲裁も漸やく多きを加へ成功の氣亦増加の傾向を示し不來國労働問題も近時多少の面目を改めたり

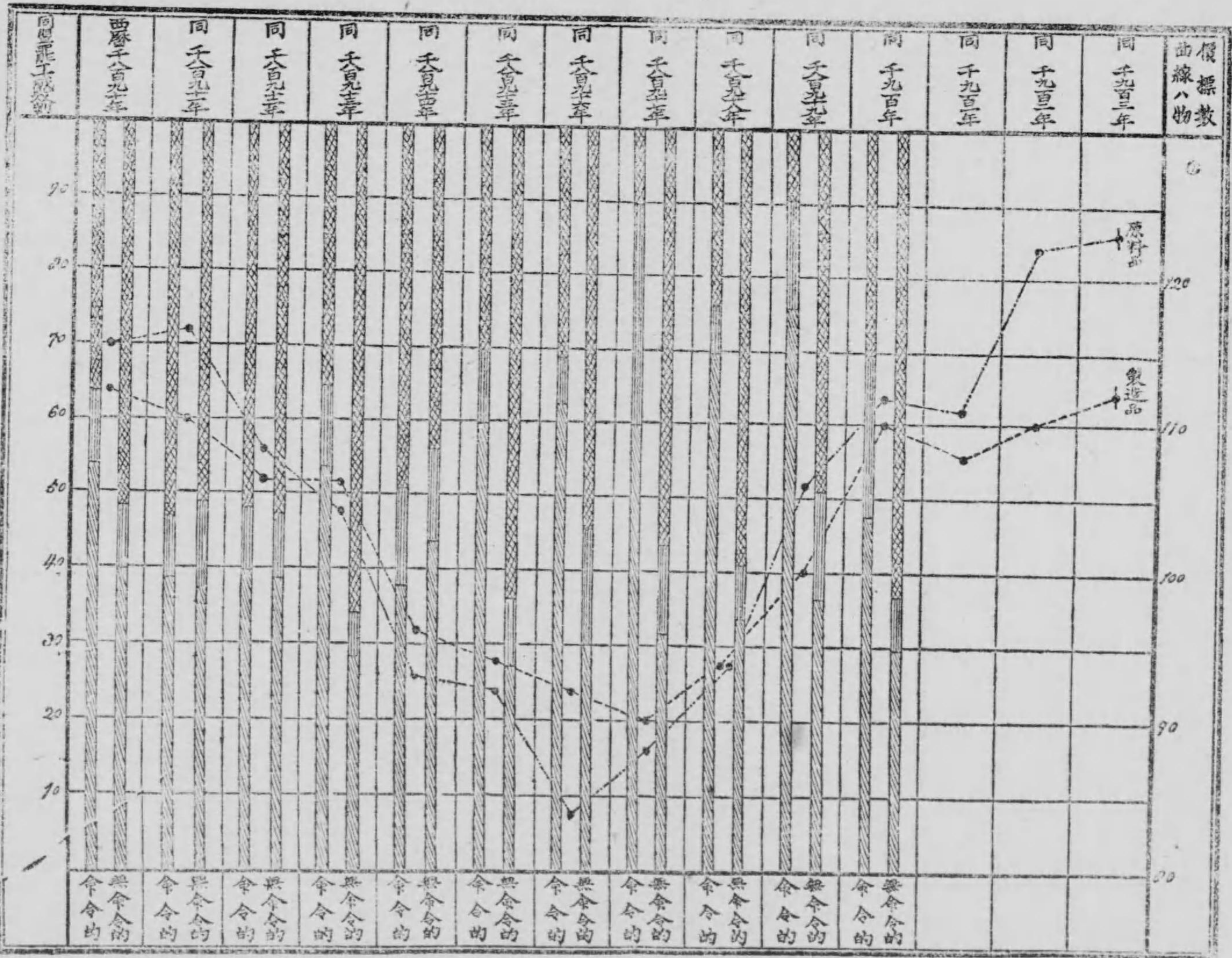


選び再審を行はしむ。

再審員の説一致せざるときは委員に於て豫て(一ヶ年前)調製し置きたる建築家の氏名簿中より抽籤を以て一人を定め其説に従ふものとす。

十二 宣告は總て儀式を用ひず友愛の情を以て説論的に之を爲す。

新組合の組織凡そ斯の如し設立日尙ほ淺く未だ十分に實際の結果を見る能はずと雖も其資本勢力雙方に利あるや論を俟たざるなり、然れども花季風雨多く明月亦雲霧あり世常に平か



流來北米合衆國は罷工を以て著名なる國の一にして西曆千八百一一年乃至同千九百零五年の罷工回数は三萬六千七百五十七にして關係人員六百七十二萬八千二十八人の多きに達し、抑々合衆國に英國に比し倍數以上の入力を有するを以て同數人員に於ては敢て多量なりと云ふを得ざるに似たりと雖も主農半工國としては頗る多大の數と云はざるを得ず而して其數逐年増加し西曆千八百八十一年には同數四百七十一人員十二萬九千五百二十一、同千八百九十年には千八百三十三回人員三十五萬千九百四十四人、同千八百九十四年には千三百四十九人員六十六萬四千二百二十五人、而して人數の多きは蓋し此年を以て最とす、同千九百零一年には千七百七十九回、員五十五萬五千六百六十六人、千三百三年には三千四百九十四回人員未詳同千九百零五年には千七百七十七回人員以上にして少しく減少せしと雖も西曆千九百零六年には商業繁榮、年柄なるを忘る可らず而して罷工の原因は主として増加の請求、減給の抵抗、労働時間、労働組合認許の請求等なり、罷工の勢は年に依り増減あるは勿論なりと雖も西曆千八百九十八年以降は概して増加し、仲裁も漸やく多きを加へ成功の數亦増加の傾向を示し合衆國労働問題も近時多少の面目を改めたり



なること能はず如何なる良法あるも時に或は罷工の災あるを免れず故に近年百尺竿頭一步を進め罷工保険なる者の設立を見るに至り率先之が設備を爲せしは里昂のロイド會社にして西曆千九百五年六月の設備に係る、尋て同千九百七年六月プログレ(進歩)會社之を開設して頗る世人の注意を惹けり今其組織の大體を見るに同一事業を各部に分ち勞力者をして其從事する所の業務に従ひ各々其一部局に專屬せしめ、更に中央部を置て各部局を援助し、中央委員(寧該事業に關係なき者を以て組織す)を設けて罷工が全く勞力者の利害に係り資本家に關せざるものなるときは之が指導の任に際り、罷工中生計費及勞力者が資本家に向て起す訴訟費を捕給し其他罷工より起る費用は之を支出せず、斯の如くして前記第一の會社は西曆千九百八年一月一日には既に二千萬法の保険金を集めたり。

又商工同盟組合は左の方法を採用せり罷工の第四日より第二十七日まで前記の如き各部に於て勞力を者救護し第二十八日より第九十日までは之を中央部に移す而して被保險者の組合は同一事業の各部専門と土地の區域を以て之を分ち中央部に於て罷工者の請求理ありと判斷するときは資本家は之に従ふの義務あるものとす、地組合も既に三百萬法の保険金を集め結果好良にして紡績事業に於て殊に然りとす。



## 第十三目 職工同盟の利害

職工同盟は互に困厄を助け一致團結して同盟中の利益を計るものにして理に於て間然する所なく而して其同盟罷工を爲すも自然の時機に投ずれば敢て資本家の利益を傷はず同時に勞力者を利し會社を益すること少からず、然れども勞働社會は概ね智識を缺き見聞廣からず動もすれば罷工其時機を誤り剩さへ其方法穩當ならず、同盟中罷業に同意せざる者あれば之に暴行を加へ其同意を強ひ或は資本家の身體財産を傷ひ機械の使用を拒み其改良を歎げず或は資本家の同盟外の勞力者を使用するを拒み他地方より勞力者を輸入するを妨げ、資本家が同盟外又は他地方の勞力者を使用せんとすれば彼等は忽ち同盟強迫の勢を示し、資本家をして不自由を感せしめて以て自己等を使用せしめんとし我は同盟中の人員を増加せしめざるが爲め故らに其人員を限り、徒弟、見習の數を制限し其他同盟中に種々不可思議の規定を設け力めて事業を遅延せんとする(例へば煉瓦は一回に五枚以上を運ぶ可らず又之を運搬するに疾走す可らずと云ふが如し)か如きは職工同盟の通弊なり、其他之に類するの流弊擧て加ふるに違あらず是等は皆資本の増加殖營業の効驗を増するの本旨に悖戻し一時或は同盟中の勞銀低落を防ぐの効あるべきも勞力者は一般の利益に反し勞銀歩合を維持するの効あるに非ず、

職工同盟の弊害

資本家の同盟

唯纔かに同盟中の勞銀歩合を維持するに止まり其奏功は却て同盟外の勞力者の勞銀に著しき減少を來すべし、英國勞働者の總數は凡そ千二百萬人なり其内職工同盟に屬する者二百萬人に過ぎずして即ち六分の一の小數なり此小數の爲め多數を苦しむるは固より不可なり、然れども既述の如く資本家中亦同盟あり相談して以ての勞銀増加を豫防し同業中勞銀歩合、勞働時間等に就て規約を定め甲の使用する處の勞力者其勞銀歩合の低きを憤り去りて乙の使役に服し割合善き勞銀を得んと欲するも甲乙の間に約束あるを以て乙は彼等の爲に勞銀を増加せず、丙に至りても同様丁に至りても同斷にして勞力者をして去就を自由にすること能はざらしむ故に勞力者側に於ても一團を組織し進退の秩序を保ち隊伍整々堂々の陣を要するは論を待たず、烏合の衆教へざるの民夫れ將た何を乎爲さんや、然れども茲に最も慎むべきは運輸交通、點燈の如き公共の利害安寧に關する事業及兵器、造幣等の如き官業に於て罷業を爲すは事國家の進運に係り其害最も甚しきを以て豫め之に備ふるの立法なかる可らず、是に於てや英國は西曆千八百七十五年一法律を發布し公私を問はず瓦斯及給水の業に従事する勞働者は故意に(一人又は同盟を問はず)契約を破り市に瓦斯又は用水を供給する能はざるの結果を來すの虞ある行爲を敢てする者は懲役に處するものとし、人身攻撃又は財産の破壊又は損



罷工及鎖出に關するカナダの立法

害の虞ある行爲は公私及事業の種類を問はず總て懲役に處するものとせり、是れ或は暴を防ぐに足らん乎、然れども今日より之を見るに尙ほ未だ盡さざる處のものあり其他引くべきの立法例少なからずと雖ども（拙著經濟史第十二章參觀）西曆千九百七年のキヤナダの工事業議調査法の如きは能く諸般の要素を調和し暨て餘師と爲すに足れり即ち該法の目的は罷業鎖出又は暴行に對し制裁を設くるに非ずして之を未然に防ぐにあり例へば鐵道、點燈等の如き公共事業及鑛山事業（石炭を目的とす）に於ては罷工若くは鎖出を許さず萬一已を得ざる事情あるときは之を政府に訴へ政府先づ其理由を調査し、理由ありとするときは豫め之を國中に公告し然る後ち之を許すものとす、斯の如くして根底に於て營業者及職工の自由行動を妨げやと雖も事苟も國家公共の利害に關する事は容易に罷工又は鎖出の發生を許さず理否を明白にして國民をして豫め覺悟する處あらしむるを得べし誠に巧妙の立法なりと言ふを得べし、又勞力者に就て一言すべきは假令罷工其目的を達し増給を得るも其得る處は給料の幾分（例へば五分）にして失ふ所は罷工中の給料全額なるを以て容易に得失相償ふこと能はざること是なり、是に於てや英國に於ては近年大に其弊に鑑み共同法を擴張し、相互協定法を設け以て資本勞力の利害を疎通し融和し其成績頗る見るべきものあり、其最も有名なる者は、

ダラム鑛業同盟、南ウエキルス鑛夫組合等にして綿業、製鐵事業等にも其例少なからず之を要するに是等の設備は資本家及勞力者間の協定を以て互に和衷協同し相互の利益を失はざるに努むるにあり又一世の美譽なりと云ふを得べし。

第十四目 共 同 法

農工商百般の事業を發達伸暢せんと欲せば資本勞力の利益を調和し相馴れ相親み兩者をして互に父子兄弟の思を爲さしむるに若くはなし、然るに方今多少の進歩なしとせずと雖も大體に於て資本勞力の間斯の如きの關係なく一は勞力購買者の地位に立ち一は勞力販賣者の地位に立ち、互に永遠の利益を忘れ剩さへ賣買者の利益は相反せず結局同一に歸するの理由を悟らず、目下の少利に眩惑し資本勞力互に相敵視し資本家は只管ら勞銀減少の機會を窺ひ勞力者は器具機械の取扱を粗略にし使用品（器械に用ふる油、石炭等を云ふ）の使用に注意せず心を業務に委ねず時間を竊み監督者の眼を掠め勞力の効驗を減じ動もすれば罷工強請を企て以て資本の増加を妨げ、勞銀基金の減少を來し却つて自ら其禍に陥ることを知らざるもの滔々たる天下皆是なり、今是等の弊を矯正せんと欲せば資本勞力の利益を一にし、一方に於ては資本家をして勞銀歩合の高きは敢て其損失に非他の一方に於ては勞力者をして營業所



得歩合の増加は即ち自身の利益たることを知らしむるを以て捷路とす然りと雖も斯の如き心事の進歩は一朝一夕の能く爲し得べき所に非ず故に他に適當の良法を求めざる可らず其良法とは何ぞや曰く共同法是なり。

抑々共同法とは資本の所得普通の歩合例へば一割を超過せば其超過したる部分は之を資本家及勞力者に配當すべしと定め又故らに小額の株券を發行して勞力者中僅少の貯蓄を有する勞力者を誘ひ或は彼等の爲め金融の道を開き以て之を購買せしめ勞力者をして半ば資本家、半ば勞力者として其會社の事業に従事せしむるを云ふ、果して斯の如くなるを得ば勞力者も自然に勞力を勵み機械器具の使用に注意し使用品を慎み營業所得の多からんことに努むべきは人情自然の勢なり、又既に幾分の貯蓄を爲して小額なりとも平生其の従事し居る所の會社の株券を得たる者は勞銀の外更に其株券に對して割賦を得べく、不知不識の間に勞力者の勉勵は資本家を利し、資本家の利益は翻つて勞力者の利益となるの眞理を解し、資本家も亦勞銀の増加は勞力の效驗を増し監督の勞を省き以て生産費を減するの結果あるを知り進みて勞銀高きも敢て營業所得の歩合を減せざるの事實を認め資本、勞力互に相敵視するの妄念釋然として氷解し是に甫めて同盟罷工、強請等の弊に假令全く其跡を絶つに至らざるも大に其數

を減じ其害を軽くすべきや疑を容れず、果して然らば國家の生産を増加し、資本の増殖を助け以て勞銀基金を増加するは期して俟つべきなり。

## 第十五目 共同法に對する駁論

共同法の利益たる斯の如く夫れ大なり、然るに其效驗を以て甚だ薄しと爲し之を駁する者あり、其言に曰く、

共同法の利あるや敢て疑を容る可からずと雖も勞力者の智力進歩せざれば其效驗甚だ薄し何となれば共同法の勞力者に利益を與ふるに依り忽ち人口を増加し其増加勞銀基金増加の割合に超過し却て勞力者の不幸を醸成すれば可なり。

と、此言たる現在の事情を酌量して論據を人口と勞銀基金との比例に取るものにして敢て一理なきの論に非ずと雖も畢竟是れ啾々たる蚊蚋何ぞ風鳴を障げん、蓋し勞力者の無智無謀なるも決して常識を缺くに非ず、豈に福利の愛すべくして貧困の厭ふべきを知らざらんや、若し茲に其道を開き、其地位を進むるは敢て爲し難きの業に非ざるを示さば必ず飄然悟る處あらん、然らば即ち令せずして勤勉の風を爲し、禁せずして無謀の舉動を防遏せん、而して其地位の進むに従ひ遠慮の念亦生すべきなり、假令當初は之が爲め其地位を進むる者多からず



して一時或は論者の言の如く人口増加の効驗を生ずることなきに非ざるべしと雖も星移り時替るに従ひ其進む者と其退く者との間に著しき苦樂の差違を生やべし、此差違を見ると同時に其進むの難事に非ざるを知らば必ず各自相競ひ奮然邁往し以て後年に逸樂を得んことを務むべし世豈に故らに好みて苦楚を嘗むる者あらんや是れ最も賭易きの理にして共同法實施の結果又之を事實に徴して明なり。

抑々方今勞力者輩が世に賤視せらるゝ所以のものは主として其自ら招く處なりと雖も亦何ぞ其地位を進むるの難きに依るなきを得んや、人生一たび艱難の地位に陥りて容易に之を脱却すること能はずんば終に自暴自棄に至るは蓋し自然の勢なりとす、方今勞力者の地位艱難なきに非ず、其自暴自棄の弊に陥り不當の人口増加を見る亦多恕すべきものなしとせず一たび之をして寛裕の地位に進ましむれば即ち勤勉の風遠慮の念隨て生ずべく其人口増加の抑制に効力ある敢て疑を容れざるなり、抑々勞力者根本の進歩は素より國民教育の力に賴らざるを得ずと雖心事の發達を以て風を革め俗を和するは至難の事に屬し一朝一夕の能く爲し得べき所に非ず故に根本法の外尙ほ之を導くの捷路を求めざる可らず而して其道たるや求めて、其難きに非ず即ち前に述ぶる所の共同法の如き亦之なり、一方に應救策を用ひ一方に根本法

を講じ内外相待ち以て進行せば富源の發達、勞銀基金の増加期して俟つべきなり、由是觀之共同法は人口不當の増加を抑制するの一方と云ふことを得べし、何ぞ之を以て其増加の原因と爲すを得んや、論者の如きは其一を知りて未だ其二を知らざるに座するものなり。

## 第十六目 共 同 店

資本案勞力者互に共同し營業の所得を分配するの利益は已に説く所の如し、爰に又勞力者中の共同法あり、其方法は勞力者互に醜金して一店を設け日常の需用品を問屋若くは其生産地より直に買入れ更に之を其店より通常の市價にて購買し後日出金の高に應じて其利益を分配するか又は只買入元價に加ふるに店費のみを以てしたる價にて之を購買するものとす、斯の如くして設立したる店を共同店と稱す、元來此方法の利益たる良品を低價に購買し得るにありて實際勞銀の増加したると其効驗を同くす英國に於ては此方法盛行はれ各地に共同店を組織し、非常の發達を爲し、巨額の資金を有し其高西曆千八百八十八年の千三十六萬餘磅より同千九百四十年には貸出及積立金を合せ六千四百八十萬餘磅に増進し店類千五百二十四箇組合員三百九萬六千三百十四人となり約千五百十四萬一千磅の利益を得頗る勢力あり而して其區域を分配の業に止めず更に進みて生産業(生産事業の產出高は年に約千三百萬磅なり)



に及ぼし自己の船舶を以て海外生産地より食品及原料品を直接輸入するに至れり、然れども米國に於ては未だ共同店の發達を見ず、是れ蓋し英國に於ては勞働社會の生計己に難きが爲め之が必要を感ずるに由ると雖も抑々亦該國には富裕閑散にして爲すべきの才智を有し眞乎に社會を憂ふる所の人士に富み勞力者生計の進歩を計るが如き舉あれば其智力と時間とを假するに吝ならざるに由るなきに非ざるを得んや而して此方法たる必ずしも之を勞働社會中に限るに非ず中等社會にありても亦其便利なしとせず故に英國に於ては勞力者は勿論小吏の如きに至りても相團結して共同を設置するに至れり。

抑々共同店に二種あるは既論の如し而して其物品を通常市價にて販賣し後に利益を配當すると初めより低價に物品を販賣するとは自から得失あり前者は他の小賣店と競争することなく而して利益の配當は多少纏まりたる金員を一時に得るの利ありて之を以て直に其店の株を増加することを得べく又は之を以て新に家具、衣服等を購ひ以て其生計の進歩を後年に傳ふることを得べし且つ此方法に従へば賣却代價は普通價格なるを以て同盟外の人と雖も此店と取引するに差支なし故に營業を擴張し資本の運轉を一層鋭敏にするの利あり、後者に至りては然らず即ち在來の小賣店と氷炭相容れず他店の忌む處となり其發達を妨ぐるることなきを保

二種の得  
失

せず又收支相償はざるを以て同盟外の人と取引を爲すこと能はざるべし、然れども後者は現在物品を低價に販賣するを以て其設立容易なり而して生計に餘裕なく収入一杯にて總か一家を養ふを得る者の爲には甚だ便利なり又大都會に於て配當金領收の勞多き場合に於ては後者を以て便利とするの事情なしとせず。

共同店は常に一定の需用者を有し且つ現金拂にして掛賣を爲さるものとす故に資本の運轉速にして物品も亦隨て新鮮なるを得べし、其販賣現金拂なるを以て仕入も亦現金を以て爲すことを得べく精良の物品を低價に得るの便宜あり、斯の如く其經營一切現金拂なるを以て掛賣の如く代價の滞りなく利益の割合隨て大なり（英國にては小賣營業の掛賣代價滞りの損失を償ふが爲め通例物品代價に二割の割増を掛くると云ふ）由是觀之共同店の方法は勞力者其他の爲に頗る利益あるものにして其効驗は實際勞銀の増加したると異なることなく却て單に勞銀の金高の増加したるより利ありと云ふべし、何となれば勞力者多くは自ら營業の株主となり資本勞力の關係を知るの一助となる可れはなり然り而して中等以下の生計に於ては糧食費其大部分を占め歳入額の増進するに隨ひ其比例を減す、今北米合衆國輓近の實況を示せば左の如し。

共同店は  
現金拂を  
要す



収入別	家賃	燃料	點燈	糧食	被服	雜費	總計
千二百弗以上	一、七四〇	三八五	一一八	三、六四五	一、五七二	二、五四〇	一〇、〇〇〇
千百弗乃至千二百弗	一、六五九	三六三	一〇八	三、七六八	一、四八九	二、六一三	一〇、〇〇〇
千弗乃至千百弗	一、七五三	三七七	一一六	三、八七九	一、五〇六	二、三六九	一〇、〇〇〇
九百弗乃至千弗	一、七五八	三八五	一一一	三、九九〇	一、四三五	二、三二一	一〇、〇〇〇
八百弗乃至九百弗	一、七〇七	三七八	一一〇	四、一三七	一、三五七	二、三〇二	一〇、〇〇〇
七百弗乃至八百弗	一、八一七	四一四	一一二	四、一四四	一、三五〇	二、一六三	一〇、〇〇〇
六百弗乃至七百弗	一、八四八	四六五	一一二	四、三四八	一、二八八	一、九二九	一〇、〇〇〇
五百弗乃至六百弗	一、八四三	五〇九	一一二	四、六一六	一、一九八	一、七二二	一〇、〇〇〇
四百弗乃至五百弗	一、八五七	五五四	一一二	四、六八八	一、一三九	一、六五〇	一〇、〇〇〇
三百弗乃至四百弗	一、八六一	五九七	一四一	四、八〇九	一、〇〇二	一、六〇九	一〇、〇〇〇
二百弗乃至三百弗	一、八〇二	六〇九	一一三	四、七三三	八六六	一、八七七	一〇、〇〇〇
二百弗以下	一、六九三	六六九	一二七	五、〇八五	八六八	一、五五八	一〇、〇〇〇

又獨逸の實況 見れば左の如し(伯林市なり)

歳入	飲食費百分比例
一、〇〇〇乃至一、二五〇 <sup>馬</sup>	六八、六、九
一、二五〇乃至一、五〇〇	四九、六、三
一、五〇〇乃至一、七五〇	五〇、六、三
一、七五〇乃至二、〇〇〇	五三、六、一
二、〇〇〇以上	五五、二、五

(備考) 一、〇〇〇馬以上の収入にして飲食費の多きは家内の人数多く収入には妻子の稼ぎ高を包含する故なり。

又英國に於て西曆千九百七年千九百四十四の勞力者家族に就て調査したる結果左の如し

一家一週の収入	食糧費
二、一四、五〇 <sup>志片</sup>	一四、四、七五
二、六一、七五	一七、〇、二五
三、一一、二五	二〇、九、二五

第三節 勞銀 第十六目 共同店



三六 六、二五

五二 〇、五〇

二二 三、五〇

二九 八、〇〇

食糧費は共に小収入に比例強きを示して餘りあり。

第十七日 勞力者救済に關する次位の設備

勞力者救済に關し尙ほ前記方法に次ぎて用ゆべきものあり即ち家屋改良共同療養小兒養育法及資金貸付法等の如き是なり、是等の救済法は事小なるが如しと雖も、其實必ずしも然らずして頗る勞力者を利し勞力の効驗を増し勞銀基金の増加を致すの効力あり、請ふ其重要な者に就きて聊か陳述する所あらん。

夫れ家屋は人間三大需要の一に位し其構造の適否は衛生風儀等に關すること尠しとせず、然るに家屋の供給者多くは收利を以て目的とし未だ衛生、風儀等の點に注意するに暇あらず頗る遺憾の點なしとせず郷鄰共に家屋の供給は方今の一大問題なり、家賃の高下は之を大體上より論ずれば家屋需給の關係如何に由るは論なしと雖も社會的觀察より之を推すときは是所に多少の慈惠心を加味するの必要あり、抑々方今勞力者住家の家賃は家屋の實價に比して頗る高く大都會に於て殊に然りとす即ち獨都伯林の如きは附近宿驛を通じ人口の六分の五、

兵營式賃貸家屋に住居し六十萬人は一室五人以上九萬人以上は地下室に住し四十萬人の住居は一室を有するに過ぎず、三萬五千は臺所を有せず然るに家賃は甚高く八百馬克の歳入より最高四百馬克高低二百馬克の屋賃を拂ひ九百五十馬克の歳入より最高七百馬克最低三百馬克の屋賃を支拂ふの極に達し、倫敦の如き西曆千八百八十年の屋賃を百とすれば同千九百年には百十五、四七に上れり而して其東廓外の如きは二三十年以來工場大に起り廓外の村落一變して明治四十年二百萬の人口を以て満たさるゝに至り爲に家屋缺乏し十英尺平方の一室一週間の借料従前三四志なりしに今哉六志以上となり一家同居する能はず妻子を救貧院に託し自ら一泊四片の木賃宿に起臥するの例尠しとせず、甚しきに至りては住家の賃借の如きは最早昔日の夢と化し去り問題は寢室の賃借となり更に一步を進めて寢臺の賃借となり就業時間の都合を計り三人にて一寢臺を借受更代して之を用ひ小兒の如きは已事を得ず寢臺の下に臥せしむるの窮狀を呈せり事情斯の如くなるを以て細民の進歩を謀るに熱心なる者相集まりて一社を組織し空氣の流通、光線の注射、間取の都合、厨、廁、井戸の位置、下水の疏通等に注意して家屋を建築し之を勞力者に貸付け以て相當の家賃を收むるの方法起れり、此方法に依れば勞力者は同額の家賃を以て比較的守全の住居を得、從て身體の健康を増すを得べきを以て



其勞力の効驗を増加するに裨益あること少からず而して相當の家賃は固より之を徴するものにして出資者の利益を害することなし只需給自然の數に依り營利的に出來得る丈の家賃を徴收せざるにある耳、英國に於ては右の趣意を以て既に二千有餘の建築會社を設立し西曆千九百四年には社員六十一萬七千餘人に達し通例年四分餘の純益あり而して其資本約四千六百二十三萬三千鎊を有し預金は約千六百二十萬鎊に達せり、今英國に於ては其公債證書の利子は二分五厘なるを以て年四分の利益は決して薄利と云ふ可らず又右建築會社にて年賦を以て家屋を現住者に賣渡すの方法あり此の如くするときは一方に於ては勞力者中少しく餘裕ある者は數年の後に一家屋の所有者となるの望あるが故に努めて儉約を爲し又大に家屋の保存に注意し一方に於ては會社は速に資本を回收することを得て益々其事業を擴張するの便あり、勿論建築會社は常に勞力者に適當する家屋建築するに止まらず中等社會にも家屋を供給する方法を設け頗る社會の進歩改良に裨益す。

諸國に於ける勞力者住家の情況斯の如し、今試みに英獨兩國の一般勞力者一週間の家賃支拂額を比較するに左の如し。

英

獨

家屋購入年賦拂入

英國の比較

室數	家賃	室數	屋賃
二	自三〇至三六 <small>志片志片</small>	二	自二八至三六 <small>志片志片</small>
三	自三九至四六	三	自三六至四九
四	自四六至五六	四	自四三至五六

是れ一見一獨の方利あるが如しと雖も英國の屋賃には地方公課を含み獨に於ては稀れに上水料を含むことあるも其他の公課を含まず而して室の構造品位も亦頗る劣等なり依て之を英國の品位標準に引直し比較するに英百とすれば獨は百二十三となるの結果なり、英國の家賃之を前目記載の勞力者收入に比して決して輕きに非ず而して獨の勞銀は英の其に比して遙かに下位(主要なる事業に於て平均一割九分強)にあるも家賃の實額は却つて二割三步の上位に居るものなり況や前記の如き極端の例に乏しからざるに於てをや爲に一掬の涙なからんと欲すと雖も豈に得べけん哉(因に曰ふ勞働時間は一週間四十九乃至五十七時、獨五十四乃至六十時間の者最も多し)

又最近西曆千九百十年末の調査に係る獨逸國屋賃の實況は左の如し。

一週の勞働	收入の二割五分を屋賃	二割五分乃至三割を支拂ふ者
	どし支拂ふ者	三割以上を支拂ふ者

第三節 勞働 第十七日 勞力者救済に關する次位の設備



九 圓 以 上	九 圓 乃 至 十 圓 五 十 錢	十 圓 五 十 錢 乃 至 十 二 圓 五 十 錢	十 二 圓 五 十 錢 乃 至 十 五 圓	十 五 圓 乃 至 十 四 圓 五 十 錢	十 四 圓 五 十 錢 以 上
總人員の百分の六十二	百分の六十六	百分の七十七	百分の八十九	百分の九十四	百分の九十七
同十八	同二十一	同十三	同七	同五	同三
同二十	同十三	同十	同四	同	なし

由是觀之獨逸勞働者が屋賃として支拂ふ金高は給料の増加と逆比例を保つは了然たり細民の生計難を訴ふる故なきに非ざるなり、而して獨逸の男工一週間の勞銀概ね五圓乃至十四圓五十錢にして十二圓の者は勞働者總數中七千五百二十八人、最少額五圓の者は百九十八人、十四圓五十錢以上の者は五百三十人に止まる、女工は通例一週二圓五十錢乃至十圓にして十圓以上は僅々十六人にして内最高級を受ける者は十二人なり而して最小二圓五十錢以下は二十人あり、今其詳細を表出すれば左の如し。

男	女
一週間の勞銀之を得る人員	一週間の勞銀之を得る人員

男 (工(百分比例))	女 (工(同上))
六圓まで	四圓まで
一、一二	八、九二
六圓乃至七圓五十錢	四圓乃至五圓
四、七一	二九、五〇
七圓五十錢乃至九圓	五圓乃至六圓
一七、四九	三三、八〇
九圓乃至十圓五十錢	六圓乃至十二圓五十錢
二五、四九	二〇、一七
十圓五十錢乃至十二圓五十錢	十二圓五錢以上
三一、一二	七、六一
十二圓五十錢乃至十五圓	
一六、四〇	
十五圓以上十七圓五十錢	
二、九五	
十七圓以上	
〇、七二	

勞働時間は通例八時乃至十二時間なり、其以上の者は男工は總數の九分にして女工は一分なり、十時間は最も多くして男工六割五分六厘、女工六割二分なりとす。

屋賃の高きこと斯の如くなるを以て獨逸に於ては輒近市に於て地區を購入し（購入價格は「エイカ」即ち四反二十四歩強に付十萬乃至十五萬圓なり之を建築用に貸付け又は貸長屋を建築して慈善的に貸付料を低廉にするを力め而かも相當の利益あり即ちウルクム市に於ては西曆千八百九十一年より購入を始め西曆千九百十年までに五十萬圓の利益を收めたり、地區を賃



借して之に家屋を建築させる者あるときは市は原價にて之を買戻し三分の利子を徴するの權  
 利を保有す而して貸付地の面積はポーゼンに於ては一人に付十「ヤード」平方（一「ヤード」は  
 三尺一寸七分七厘餘）ツレステンに於ては十四「ヤード」二三平方タレットエルドに於ては十四  
 平方「ヤード」九五、伯林は八十四「ヤード」九一平方等にして最大はストラスボルヒの三百六  
 十四平方「ヤード」七八なりとす今又英國の經驗に據り人口の粗密と家屋の良否が如何に衛生  
 事項に影響するやを見るに西曆千九百四年にはボルミンガムの死亡率千人に付十九人三分  
 天折千に付三百三十一人なりしに僅々數度哩を隔てたるボルンウイイルに於ては前者僅かに六  
 人九分後六十五人に止まり後所の學童は前所の者より身長四「インチ」（一「インチ」は八分三  
 厘八毛餘、胸圍三「インチ」大なり、而してプールに於ける「カオンシル」小學校の貧民男兒は  
 七歳にして平均身長四十四「インチ」體量四十三「ポンド」（一「ポンド」は百二十分九分八五餘）  
 なるにポートンライト（標準花園市）に於ては四十七「インチ」五十「ポンド」半にして年を重  
 めるに従ひ其差違を増加す、進んで同所同一家屋に於ける實況を見るに二室に住居する男兒  
 は之を四室に起臥する者に比し十一「ポンド」七輕く、一室住居の女兒は四室の者より十四  
 「ポンド」輕く五「インチ」二低し而して西曆千九百六年にはセイント、メリー市に於て流行病

の爲に斃れたる者半々年にして十三萬九千四百九十七人なりしが人口稠密の部分に於ては之  
 を稀薄の所に比して四個の多きに達せり又酒亂發狂も稠密の場所に多し、今西曆千九百七年  
 の實況に據り人口の粗密と發狂者の關係を示せば左の如し。

場 所	「エイカ」の住民	發狂者人員
倫敦全部	五八	一、九
ベスナルグリーン	一七一	六、七
ホルボーン	一八六	八、二
ストランド	一四三	一一、〇

（附言）發狂者人員は千人に對する比例なるべし調査に單位を缺分明ならずと雖も逸す  
 可らざるの好材料なるを以て之を此處に掲載す。

家屋改良の必要なる斯の如し鑑みずんばある可らざるなり。

共同療養法とは勞力者同盟して一團結を爲し例へば月に五錢若くは十錢又は其得る所の勞  
 銀の百分の一と云ふが如き比例を定し醜金して以て相當の醫師を選み毎月之に若干の給料を  
 與へ同盟中に疾病、怪我等あるときは直に診察治療を請ふことを得るものとす、固より特に



高價の藥品、六ヶ敷き手術等を要することは定まりの月給の外に療養費を要することあるべしと雖も普通疾病の場合の如きは右の醜金を以て其費用に充つることを得べし、斯の如くなれば一人の力を以て療養し能はざる所の疾病と雖も容易に治療を受くることを得べく又數人の力を合すと雖も一時烏合の力にては十分の手當を爲すこと能はざるの難病も尙ほ能く之を療治することを得べし斯の如くなれば即ち同盟中の不幸者を慰すると同時に勞力の効驗を増加し國富の發達に裨益あること鮮少に非ざるなり。

## 小兒養育法

小兒養育法は勞力者の改良を計る者の設立する所にして其勞力の効驗を増すこと尠からず既論の如く勞力者が一家を爲すは大に慮らざるを得ざるは勿論なりと雖も之を方今の實況に徴するに家長死するときは妻子は其遺産に依り悠々生計を營むに足る者甚だ稀にして兒子未だ成長せずして夫死すれば妻は子を抱きて路食に迷ふる不幸に陥るの場合蓋し少しとせず、斯の如き場合に遭遇し未亡人幸にして裁縫、洗濯等の術を知らば其伎を以て僅に其生計を送ることを得べしと雖も赤子を抱きて是等の業に従ふは甚だ困難にして之が爲め遂に母子共に饑餓を免れず哀を他人に請はざる可らざるに至ることなきを保せず若し夫れ夫にして妻に別れ乳母を雇ふの餘力なからんか小兒を抱きて日々勞働に従事すること能はざるべし又親戚朋

友中に孩子の父母を失ふ者あらば自ら責任あるの子に非すと雖も人情として前陳の如き不幸を蒙り不便を感ずる場合なしとせず故に是等の不幸者の爲め小兒養育院を設け、毎朝就業前に小兒を預け毎夕業終るの後ち之を抱きて家に歸らしめ相當の代價を取るものとす若し親父又は親分たる者にして費用を支ふることを得ば之を院中に留め置くも可なり此方法に依れば子を抱きて爲し能はざる所の勞働と雖も克く之を爲し得べく以て其全力を盡すことを得べし勞力の効驗を増すこと蓋し僅少に非ざるなり。

## 資金貸付の方法

資金貸付の方法は種々ありと雖も其詳細の如きは銀行論に屬するが故に此には其一方方法にして勞力者に最も關係深き保證貸を論ずるを以て足れりとせん、蓋し保證貸とは伎藝熟達精心有爲の壯年の輩世に出でんとするに方り資本を缺き其技能を逞ふること能はざる場合に二人以上の先進者其事情を銀行に通じ各自保證人となりて資金の融通を開くの方法なり例ば茲に大工の一子弟ありとせん其技能に熟し且つ天然勤勉の質を具へ將來名工となるの望みあり、然れども名聲未だ顯はれず資金を借らんと欲すれども之を顧る者なく假令之を借り得るも勢ひ非常の高利を拂はざるを得ず、然らば則ち彼れ其師に優るの器量ありと雖も之を實地に施すこと能はずして其勞力の効驗を失ふこと頗る大なるべし、然るに若し此方法に依り資



金を借ることを得ば資本勞力兼ね備はり直に彼が數年練磨せし所の技能と天稟の才とを實地に施すことを得べし是れ只彼れ一身の勞力の効驗を増すの利に止まらず延ひて社會に利あるものと云ふを得べし。

以上論する所の者は皆勞力の効驗を増加し勞銀基金を増殖し以て勞銀を増加するの効力あり假令直接に之を増加せずとも其効驗は之を増加したるに異ならず故に皆是れ民を救ひ世を益する方法と謂ふべきなり、然るに世往々之を誤り婦人の仁に倣ひ或は貧者に一碗の飯を恵み或は乞食に數錢を投じ以て得色ある者少からず是等は決して勞力の効驗を増加するものに非ず却て懶惰心を奨励するに過ぎずして苟も細民の改良進歩を謀らんとする者の爲すべき事に非ざるなり、抑々人を救助せんと欲せば宜く彼等をして獨立自治の道を得せしめんことを力むべし否らざれば助けんと欲して却て之を害ふに至るべし、豈に慎まざる可んや。

## 第十八目 社會主義

茲に又細民の貧窮を救はんと欲して國家の權能を借り富民の産を割きて之を細民に與へんと欲する者あり之を稱して「ソシヤリスト」即ち社會黨と云ひ其主張する主義を「ソシヤリズム」即ち社會主義と云ふ是れ決して勞力の効驗を増加するに非ずして細民救助の法を得たる

救助の目的

ものと云ふを得ず、然るに人口漸く稠密を致し、細民の生計漸やく難きに方りては該黨の説頗る勢力を得るの傾向あり、請ふ其妄を辯せん。

勞力社會の生計を改良せんと欲せば其數を減するか否らざれば勞銀基金を増加するの外復た他に方法なきは既に論究せしが如し、然るに彼の社會黨の輩は世進歩し貧富の懸隔漸やく甚しきを致すを見、國家の權能を借りて富民の餘財を割き之を社會に平分して以て貧富の平均を計らんとす、其意は好みすべしと雖も其方法に致りては則ち誤れり故に世に寸益なくして却て勞力者を害し、世亂れ制度頹廢するに方りては亂臣賊子の輩詭激の言を恣にし名を社會主義に藉り以て細民を煽動するの虞れなしとせず、澆季の世人心維れ危く道心維れ最も微なり、豈に懼れざる可んや、抑々國民の財を蓄ふるや逸樂を後年に求め餘榮を子孫に傳へんと欲するにあり而して其財を積むの難きは既論の如し、今夫れ社會黨の欲する所に據り富民の餘財を割きて之を社會に分與せば誰か目下の快樂を棄て、後年の爲め財を積む者あらんや、偶々生産に従事する者も只自から消費する所の物を生産するを以て足れりと爲し力を盡して餘財を積むの念慮全く消滅し衆に擢て能く多財を生産するの力あるも財を積み富を致すの念を存せず、一般人民の如きは勞働を爲すと雖も其得る所は僅に一家を支ふるに止まり甚



しきに至りては之に従事せざるも尙ほ能く凍餒を免るゝを得べきを以て誰か勤勉其勞を執り後年を慮る者あらんや只懈惰逸樂を是れ事とし富民の膏血を絞りにて以て一生を過ごすの念を盛にするに過ぎざるは疑を容るゝ餘地なく其結果細民中人口の増加を抑制するものなく富の減少と人口の増加と交々相接し來りて大に勞銀の歩合を減少し細民の艱苦更に數層を加ふるは勢の免れ能はざる所なり而して社會主義中財産平分説の如きは不利不當なるは勿論決して其實効を見ること能はざるなり、抑々眞は法に由りて妄は情に由る眞妄體同しきも其用裁則ち異なり察せずんばある可らず、今夫れ非常の威力を用ゐて一國、一郡若くは一村の財産を其住民の間に平分せんか人間死生の變あり嗜好の別あり今日の平分は決して明日の平分に非ず忽ち變動懸隔を來すべし貧富の別は苟も人間に智力、健康等の差違ある以上は決して免るゝこと能はざる所の現象たり、偶々僥倖にして巨大の富を得る者なきに非るも是れ固より異常の事にして決して人間の常事を以て論すべきに非ざるなり、然るに彼の社會黨の輩は之を悟らず其結果に就きて事を論じ其原因に遡ることを知らず猶ほ其形を捕へんと欲して其影を逐ふが如く勞して功なきや論を俟たざるなり、今更に數歩を譲り彼等の説をして實施することを得べきものと爲すも其世に益なくして害あるや既論の如し而して彼等の所謂平均を求め

社會主義  
と人口と  
の關係

平準降等  
と昇昇  
の差異

んと欲するや常に強者を剥ぎて弱者に與へんことを力むるを以て一般に一國生計の度を低落するの効驗あるを免れず是れ所謂平準向下の法にして決して國家の進歩を謀る所以の道に非ざるなり平均を求めんと欲せば須らく平準向上の法を捕るべきなり、蓋し平準昇等の法とは弱者を進めて強者に接近せしめ以て強弱懸隔の度を減するを云ひ、降等は之に反す察せずんばある可らず前數目を以て論ずる所の者の如きは即ち平準昇等則ち向上の法なり以て則るべし以て用ゆべきなり、社會主義の如きは平準降等則ち向下の法にして國家の進歩を妨げ再び人民をして野蠻の域に陥らしむるの結果を來すを免れず何ぞ思はざるの甚しきや。

#### 第四節 貸付料

##### 第一目 貸付料の釋義並に小作料

貸付料とは所有の財産を他人に使用せしめて受くる所の報酬を云ふ、元來財産を所有するは過去の勞力と節儉との結果なり、其勞力の困難なる節儉及耐忍を要するは既に之を説けり焉ぞ此困難と耐忍とに報ゆる所なかる可んや而して現今及將來は此過去の勞力と節儉との結果に依り大に益せらるゝを以て此便益の幾分を割きて之を酬ゆるは自然の條理なり、然るに

貸付料の  
釋義



小作料

其報酬たる生産に取らずんば之を出だすの道なし故に貸付料は分配の一通路となるものとす  
 貸付料中最も吾人の注意を要するものは土地の貸付料即ち小作料とす、何となれば其方法  
 如何は生産上に多大の影響を及す可ればなり、蓋し小作料とは土地の所有者より土地を借受  
 け資本勞力を用ひて收穫を得其幾分を土地使用の報酬として地主に支拂ふものを云ふ、抑々  
 小作法に數種あり。

- 一 競争地代法
- 二 年期小作法
- 三 慣習小作法

等是なり蓋し競争地代とは地代の設定を土地借受人の競争に一任し最も高き地代を拂ふ者に  
 土地を貸付る者を謂ひ金期小作法とは例へば五年若くは十年と云ふ如く豫め年期を定め一箇  
 年若干と小作料を定めて之を拂ふを云ひ、慣習小作法とは例へば收穫高の三分の一若くは四  
 分の一と云ふが如く慣習に依り定りたる高を小作料として地主に納むるを云ふ、元來世運の  
 進歩は諸事習慣に據るの古風を脱し競争以て事を決するの風俗を養成す小作料の如きも亦此  
 の例に漏れざるなり、方今諸國に於て競争小作法年と共に發達し英國の如きは概ね此方法に

依り、習慣小作の如きは殆んど其痕跡を見ざるの境遇に進めり。

第二目 競争地代法

競争地代法に於ては地代は現耕最下等地即ち耕作限界點に在る地の生産力と高等耕地の生  
 産力との差違より生ずるものとす例は國の或時期に於ける食品の需用は第四圖の「甲一」と  
 「甲二」若くは「乙一」及「甲三」「乙二」若くは「丙一」の三ヶ所の地面を耕して足るとせん、然る  
 ときは「甲二」若くは「乙一」の地代は其生産力と「甲三」「乙二」若くは「丙一」の生産力との差違  
 にして「甲一」の地代は其生産力と「甲三」「乙二」若くは「丙一」の生産力との差違あり、此の場  
 合に於ては「甲三」「乙二」若くは「丙一」の如く現耕最下等地に位する場所を耕作限界點と云ふ  
 其土地は多額の地代を拂ふこと能はず纔かに名義のみ地代を拂ふに過ぎざるなり何となれば  
 地主は空しく其所有地を荆棘に委するより假令名義のみの地代たりと雖も之を貸付する方利  
 あればなり古人曰く勤勉精巧なる農民に土地を貸付するの利は猶ほ巧妙なる樂人に藥品を貸  
 付するが如しと眞なる哉、今人口増加し食品の需用増加すれば勢ひ「甲四」「乙三」「丙二」若く  
 は「丁一」の如き下等の土地をも耕耘に附せざるを得ず之を耕作限界點の降下と云ふ、此時に  
 至れば曩には只名目の地代を拂ひたる「甲三」「乙二」等の土地も最早最下等地に非ずして其土



地の生産力と「甲四」「乙三」等の如き新最下等地。生産力との差違だけを地代として地主に納めざるを得ざるに至るべし。今事の解し易からんが爲め一等地若干は農業者にありては生産の費用を差引き正味百石の收穫、二等地は正味九十石、三等地は正味八十石、四等地は正味七十石を穫るものとし代数的方式を以て前陳の理由を示せば左の如し。

地	代	20	10	0
第一	=	=	=	=
第二	=	=	=	=
第三	=	=	=	=
第四	=	=	=	=
合 場		100	90	80
各地收穫高	(一)	100	90	80
土地等級	(二)	90	80	70
	(三)	80	70	60
	(四)	70	60	50
		270		

元來農業も一營業なれば相當の所得なかる可らず  
今第一の場合に於けるが如く三等地は耕作限界點に  
位し之を耕す者は正味九十石を穫れば相當の營業所  
得あるものとせん、然るに二等地を耕す者は正味九  
十石を穫るを以て若し地代を拂はざれば例外の利益  
を得べし故に三等地耕作者甲某其利を見て地主に請

ひ我に二等地を貸與せよ我能く五石の地代を拂はん、三等地の小作人乙は八石、丙は九石、丁は九石九斗を拂ふべしと云はん、然らば現に二等地を耕し居る者も二等地より逐出され、三等地を借らざるを得ざるに據れば八十石の正味より外に至る所なかるべきに由り従來借用し來れる二等地を離れ新に生産力少き三等地に移らんより寧ろ十石の小作料を出し舊地に據

りて八十石の正味を得るに如かずとの念慮を起し互に競ふて遂に二等地と三等地との生産力の差違即ち此場合に於ては十石を地主に納むるに至るべし、一等地も亦之と同一の理にて終に其生産力と三等地の生産力との差違即ち二十石を地主に納め正味八十石の收入を以て満足せざるを得ざるべし、第二の場合には人口増加し第一の場合の如く二百七十石を以て之を養ふ

第二	地	代	30	20	20	0
=	=	=	=	=	=	=
=	=	=	=	=	=	=
=	=	=	=	=	=	=
合 場			100	90	80	70
各地收穫高	(一)	100	90	80	70	60
土地等級	(二)	90	80	70	60	50
	(三)	80	70	60	50	40
	(四)	70	60	50	40	30
		340				

こと能はず更に七十石を増加せざるを、然  
るに三等地以上の土地は既に餘地なく四等地 耕  
さざる可らざるの場合を想像するものなり、然  
るに四等地を耕すにも固より相當の利益はかる  
可らず其若干を耕すに正味七十石を得ば相當の  
利益あるものと推定せば三等地と四等地とは其

生産力に十石の差違あるを以て前陳の道理に由り三等地は其地主の爲め十石の地代を納めざれば之を借受ること能はざるべし、同一の理由にて五等地を耕さざるを得ざるに至れば四等地は五等地と其生産力を異にする丈けのものを地代として支拂はざるを得ず、斯の如く耕作限界點降下する毎に其地より高等に位する土地は必ず地代を増加するものとす、是れ競争